

加納諸平の研究 下篇

井上豊太郎 著

加納諸平の研究 下篇

起雲閣

起雲閣叢書 加納諸平之研究 下篇

目次

第五編 諸平の思想學問歌

一、	萬葉集額田王考	一、	萬葉集額田王考
一、	竹取物語考と伊勢物語論	一、	竹取物語考と伊勢物語論
一、	曾丹集摘草	一、	曾丹集摘草
一、	枕詞考・其他柿園雜考	一、	枕詞考・其他柿園雜考
一、	柿園詠草及全拾遺	一、	柿園詠草及全拾遺
一、	諸平の作歌態度	一、	諸平の作歌態度
一、	諸平の歌合批判	一、	諸平の歌合批判
一、	諸平の長歌	一、	諸平の長歌
一、	諸平の短歌（評釈『柿園詠草』粗評）	一、	諸平の短歌（評釈『柿園詠草』粗評）
一、	諸平の蒙求の歌	一、	諸平の蒙求の歌
一、	山菅と愀翠琴房記	一、	山菅と愀翠琴房記
一、	樂亭記	一、	樂亭記
一、	諸平の埋れ木考添削	一、	諸平の埋れ木考添削
一、	勤皇家としての諸平	一、	勤皇家としての諸平
一、	郷土歌人としての諸平	一、	郷土歌人としての諸平
一、	師家としての諸平	一、	師家としての諸平

(74)(68)(61)(55)(49)(47)(45)(37)(34)(30)(20)(14)(12)(7)(3)(1)

第六編 加納諸平周辺の人々

一、	諸平周辺の人々		78
一、	藩主第十代治宝侯と諸平		81
一、	久能丹波守純固と諸平		82
一、	古岳奄幽真と諸平		86
一、	伊達千廣と諸平		87
一、	長沢伴雄と諸平		90
一、	安田長穂と諸平		92
一、	吉田安年と諸平		94
一、	菊池海莊と諸平		97
一、	西田直養・伴信友・其他と諸平		100
一、	柿園門人概況		100
◎紀 藩	山田 尚忠		
	瀬見 善水		
	熊代 繁里		
◎大阪方面	伴林 光平		
	佐々木春夫		
◎因幡方面	飯田 年平		
	小谷 古蔭		
	室谷 賀親		
	新 貞老		
	中村 義弼		
	菅賢附あや		
	古屋		
	二人 義信		

(100)(100)(97)(94)(92)(90)(87)(86)(82)(81)(78)

第五編 諸平の思想學問歌

萬葉集額田王考

一、本居宣長わ古孝者であつたが、而も『古事記』の解説に殆ど一生を捧げた形であるが、それでも『萬葉集玉之小琴』の著がある。『萬葉集』を研究せずにおけなかつたのである。本居大平わ師承して古孝を祖述し、門人に教へ・門人を導く事を専らにしたが、『萬葉集山常百首』の撰があつて、之により蝸集し来る門人達に『萬葉集』の古調を窺ひ知らせようとした。『萬葉集』は古今・新古今調の随弱な歌のみが行われた時代にあつても、『萬葉集』の存在わ無視する事を許さぬ良師大平の許に在つて、『萬葉百常百首』の講義をきき、『萬葉集』を珍重したであろう諸平に、何ぞ『萬葉集』に関する記事がありそうなものと思われて年月たづねる間、漸くにして発見された事がよろこばしい。

一、諸平わ詠歌の上に盛に古語を引用して、之を巧に転用し襲用した。此古語わひとり『萬葉集』に限つたわけではなく、『古今集』・其他にも求め、又ひとり歌集のみに限らず、あらゆる文献中の文句を大胆に引ひて転用する事を心得た。之わ諸平の詠歌の一大特色で、其引用の語句の豊富さによつて諸平の孝殖を知り得るわけであるが、又諸平の『萬葉集』を知る事わ、かなり深きものありし事と察する事が出来る。諸平わ又門人にも『萬葉』をよむことをすすめて居る。諸平の室谷賀親に宛てたる書簡中にも、『萬葉集』追々御熟覽あらまほしく候」とあつて、『萬葉集』をよく熟覽せよと希望している。随分むづかしい註文を出して居る。之によつても諸平が『萬葉集』に傾注して居た事が知れるのである。

一、唯『萬葉集』わむづかしい現代の如く『萬葉集』研究の盛なる時に在りても、『萬葉集』の全歌わ窮めつくされたとわ云へないであらう。『萬葉集』の研究わ人一生涯之に傾注するとも、之が完成を見る事わ至難であらう。諸平わ一生涯を通じ『紀伊續風土記』編纂に纂修として参加した。之わ机上の閑事業ではなく、脚と目と耳を極端に働かせて、其上頭を働かせ・参考書を引きて、後筆を働かせて出来たものであり、次に『紀伊國名所圖繪』の纂修も同じく又忙しい仕事である。その他『鰻玉集』の撰集も一大事業である。そうした仕事をつぎ／＼にやっていつて

居り屢々病氣もして居る。歌の會もあつて其方にも時間がかゝる故に、遂に『萬葉集』の研究に手を染むるに至らなかつたのわ、無理もない次第と云わねばならない。

一、ここに『嚶々筆語』と云う書物がある。何巻まで出たものか知らない。一の編と二の編がある。之わ天保十三年(一八四二年)の頃に岡部東平が家に當時國學研究の錚々西田直養と大橋長広・長沢伴雄・妙玄寺義門・野之口隆正等が集つて、國孝上の研究發表をなして、之が研究録を一巻にまとめて出すことになり、其集が此『嚶々筆語』で、中々参考になる論文が多く出て居り、其中に本居内遠・長沢伴雄・加納諸平が加わつて居り、伴信友も加つて居る。

二、諸平わ此『嚶々筆語』の第二編に、『伊勢物語論』と『額田女王論考』の二編を寄稿してゐる。『伊勢物語論』わ別講に解説した。ここでわ此『額田女王考』について解説を試みる。

一、諸平の『額田女王考』わ之を以て必ずしも『萬葉集』の考証と云う事わあたらないかも知れないけれども、額田女王の歌わ沢山『萬葉集』に出て居る事であるから、結局わ『萬葉』の考証として取扱ふ可きものであらう。惜しい事に「歌の解あれど、省いて次編にこそ」と編者の手加減で、遂に諸平の萬葉歌見を窮知し得ざる事になつて居るの遺憾である。

二、諸平の『額田鏡王考』は「額田は氏王おきみは姓鏡かばねは名」とやうに心得可きであるとし、其所以を明かにし、即ち一般に額田女王と云われて居る額田の王わ、女王でない事を明かしたもので、其系圖を左の如くに考証して居るのであり、此王女君二人をもち給ひ、推古天皇の御世に生れ、持統天皇の御代には年八十にも余りておはしけんとも云つて居るのである。

額田王鏡

集中歌多

額田女王

天武天皇妃後中臣大島室敷

母敷黄刀自敷

十市皇女

大友天皇皇后

天智天皇皇子

葛野王

大友天皇皇子

鏡女王
天智天皇妃後藤原鎌足公嫡室

氷上娘
天武天皇夫人
藤原鎌足公女
但馬皇女
天智天皇御子

五百重娘
天武天皇夫人宇大原刀自藤原鎌足公女実天智天皇皇女歟
後藤原不比等公室

新田部皇子
天智天皇御子

一、諸平わ此考証に諸平一流の深い処を見せて、『皇流紹雲録』・『天武紀』・『萬葉集後記』六帖・「大和国城上郡栗原寺の塔の露盤の銘」・「威奈大村墓誌銘」・「懷風藻又因幡国にて掘出したる和銅三年^{〔七〇年〕}の墓誌銘」・『興福寺縁起』・『能嗣令』・『延喜諸陵式』・『玉葉集』・『姓氏録』等を引用して、相當こまごま其所以を考証して居り、一箇の研究として尊敬するに足りる一篇と思われる。

一、此書のはしがきに、諸平の額田王わ女王ならぬ所ありと云う事を義門のかたりけるを、東平いみじう見まほしがりと、義門にもことつけ自らも文通はしなどしてこの比乞ひ得しかば、即ち加えてなほ大方の異見もきかまほし」と云つて居るが如く、當時にあつてわ珍らしい新意見だったにちかひなく、現代にあつても大に参考とするに足る見解なりと信ぜらるるのである。

一、この余諸平が『萬葉集』についての研究をもつかどうかわ、只今の処其資料を得て居ない。諸平が『曾丹集摘草』に於て、曾根丹忠が歌を以て『萬葉集』にすがりたる歌ひぶりなりと評して居り、而も此『曾丹集』をもつてすれば、尚他にもつと『萬葉集研究』の文が存して居つてしかるべくも思われるのであるがさてやみなん。

『竹取物語考』と『伊勢物語論』

一、諸平に国文學上どう云う著作があるか、甚だ興味を以て研討さる可き所である。今諸平の室谷賀親宛の書簡集、及び瀬見善水宛の書簡等を校閲して、『古今集序注』・『清少納言・枕草子註釋』の起稿された事が明にされて居り、又『古事記新注』・『源氏物語』の講義も用意された事が明にされて居るが、其稿本がったわらざる故に、其内容を知る事が叶わざるを遺憾とする。

二、唯ここに『竹取物語考』が室谷鉄腸によりて翻刻されて、諸平の『竹取物語』についての見解を知る事が出来、又『嚶々筆語』中に『伊勢物語論』があつて、『伊勢桃語』に対する見解を知る事が出来、ここに諸平の国學解釈の一斑を察する事が出来る次第である。

三、諸平の考証わすべて諸平の聡明顯知が遍溜して居つて、簡明・直截・周到・親切で徹底して居り、他の国文學者に見るが如きまわりくどき事がなく、意見が明確である事がまこと信頼でき、其引用も該博適切であり、中々學究的の眞摯さを失わざる処に敬意を表したくなるのである。

四、『竹取物語』わ、わが国に「物語」と云うものの出来た濫觴なりと云う。私共わ之を一個の假作の物語で、実話でわない様に思つて居るのが普通であるが、諸平わ之を以て當時一ケの実話小説で、多分に世相の風刺を含むものなりと解して、諸平一流の犀利なる考証を注いで居るのである。此諸平の態度が是認される可きや否やわ、大に議論のわかるる处であると思われるが、よいかわるいかわ別として、其場合に必ず議論の中心となる見解たる事わ失われず、『竹取物語』についてかゝる見解を試みたる人わ、恐らく他に其人あるを見ないのである。故にこの『竹取物語考』わ、ひとり諸平の研究にとりて大切なばかりでなく、又諸平の国文學者としての地位を明かにするばかりでなく、我国国文學者解釈史上を飾る一大論文たるを失わないと信ぜらるるものである。

一、諸平云う

今按ふに其事跡は藤原宮の頃と覺しければ　もと浦島子伝・柘枝仙伝などに倣ひて作れる書なりしを　後其意を濱べ歌を加えて物語とせしなるべし　然思はるる由を云はん　持統天皇の十年七月高市皇子尊葬れ給ひ其年十月　大臣以下中納言以上五人に□□人若干を給ひ専ら政を執らせ給ふ　翌十一年二月輕皇子年十五にて皇太子に立ち給ひ其八月即位し給ふ　是を文武天皇と申す　踐祚の年を以て元年とせられしは珍しき例ながら　高市皇子尊薨れ給ひて後わ　此天皇皇子尊とて皇太子の様に坐しければなるべし　かれ執政人たちに□人を賜ひしも　専ら此天皇をかしづきて政事申さしむる　御情にてぞ坐しけん　それよれ大宝元年^(七〇一年)まで五年ばかりが

程が其人々政を執れるさま正史に見ゆ 五人とは即ち丹比真人島・阿部朝臣御主人・大伴□□御行・石上朝臣
麿・藤原朝臣不比等なり 此物語即ち其五人の上に亘れる書にして 色好と云はるる限と書けるは 執政と云
はるる五人を然書なしたるなり 丹比真人島公を石作王といひ 藤原朝臣不比等公を車持皇子と書けり 是當
時の俗称なるべし さて文に世の中に多かる人をだに 少しも形よしと聞ては見まほししする人たちと云へり
天下の執政ながら色好なるを誹りて作れる書なればなり 其比竹取翁とて男女の媒などし 其人の許に美人
ありしを 執政の人たち妾とせん事を思ひ 天皇はた召し入れ給はんとせしかど事ならざりしを かく作りな
したりけるにて 誠は孝徳天皇の御世よりつきく 律令など嚴重に成もて行くが 中に政を失ひたる事も多く
大伴御行宿祢の三田五瀬に欺かれし類 或は人をも欺き執政の威を振ひて強事せしなどを 佛の御石の鑄蓬
菜の玉の枝火鼠の裘龍の首の珠燕の子安貝によそへて作れるさまなれば 島公の用意深き不比等公の思慮ある
御主人公の氏上として富み栄え 御行公の雄々しくて奸しき心なく 麿公の用意なりけん 性質もおのづから
知られ「詳瑞」とかひて種々の奇品などを貢とせしもかゝる贗物の多かりけん事さへ思ひ寄せられて 其御代
の態を正目に見るが如し、慶雲二年三月の詔に此作者司容儀多達礼儀加之男女光別晝夜相会と云へるも 文も
赫映姫を見まほしうて物をも喰わず思いつゝ 彼家にゆきてたゞずみありきけれども甲斐あるべくもあらず
文をやれども返事もせず わが歌など書きて遣すれどかひなしと思へども 霜月極月の水無月の照はたゞくに
も降らず障らず来りなど云へるに思ひ合すべし 近江朝廷の頃より漢ぶりの學隆盛になりしかば それが中に
上を覬覦するさかしら心の悪者も多かりしなるべし 『萬葉集』十六に謗倭人歌 奈良山の兎手相両弥左毛倭
人之友と 明徑博士肖奈行文の詠めるは 奈良の朝に任奉れる百官人左右ともに 倭人なりと誹れる意なる可
く 穂井田忠友が云へるも宣なる考とこそ覺ゆれ すべて其代々の人情を知らんには 正史よりも小説書の方
中々に定かなるものなれば 唯文章のみにまっはれず克く其事跡を考ふ可し 彼の丹比真人島を石作王といひ
藤原不比等公を車持皇子と申せるが如きは正史に載せざる名なるが此書に伝はり 其他古意を知るべき事多
かるを 先輩唯文章のみにまっはれて空しく見過したるは口惜しかれ 今五人の傳を始めて古伝説と思しき事
どもを抜き出でて 下文に解き試みたり 云々

とかく解題して此物語の出来たのわ、文武天皇の御代の始めより大宝元年の間なるべしとして、之が考証を試みて
居る。文理の解もたとえば「なよ竹のかぐや姫とけつけ」を解き、なよ竹は万葉集に奈用竹のとをよる子等、名湯
竹のとをよるみ子などの意にて、竹の中より生れたる意をもこめたる名なり。かゝれば奈用竹のとをよるかぐや姫

の意にて　とをよると云う用語を畧きたるわ『万葉集』に白波の寄する濱を白波の波　『古事記』に沖つ波よする磯と云うべきを　沖つ浪そといへる類にていと多し　かぐや姫わ美女の称にて『古事記』垂仁天皇の段に、天皇聚大藺^{イノ}乘根王之女迦具夜比売命生御子遠邪辨王、又小野宮左大臣の女にかぐや姫といへるがありし。『大鏡』見ゆと記すが如く可なり。詳細を極めた講義である。

一、諸平が此物語を解くに『古事記』・『日本書紀』・『古語拾遺』・『續記』・『後記』・『類聚国史』・『姓氏錄』・『肥前風土記』・『延喜式』・『本朝月令』・『和名抄』・『文徳実録』・『三代実録』・『万葉集』・其他の文献を引いて居り、本文よりも解釈の解釈が入り相な程のことである。国文学研究者必読の文字と云うべきであろうと思う。此一書によつて諸平が実に造詣深き国文学者たる事をはつきりさせてゐると云へるであらう。

一、諸平の『嚶々筆語』にのせた『伊勢物語論』わ小論考であつて、『伊勢物語』の成立を論じたもので、あまり深く突つこんでゐるものでわないが、しかしここにも諸平の犀利な史眼の光つて居るのを見る。諸平は此物語をもつて、在五位中將が惟喬親王を慰め申さんとして、其手記を親王にさし上げておいたのを、親王の側からもれていろ／＼に書き加えられて、一つの物語になつていたのであつて、物語について見れば在五位中將が如何にも好色漢に見えるが必ずしもそうではなく、深き理解を注ぐべき史実をふくんだ物語であるとして居るのである。

一、諸平云う

前畧　もと在中將の自記にありし事どもを引きでてあらぬさまに作りたり　つくれる時代は後撰の次といふ説正しかるべけれど　惟喬親王の御上につきてかの朝臣の世をうとましようおもふ比来し方の事ども　又よめるうたなと心なぐさみにみづからかきおかれし記の筈の底などにのこりて　世につたはりためるままに『古今集』にも其記より撰出でて載せられたるなるべし　云々

又曰く

かく作りひがめたる事を僻事とは云へりと知りて　條々にこころをつけてよく／＼見わきなば　さりとはひが事はひがことと大方はわかれぬべし　言葉の上にのみ心をとむる大人たちしれりやしらむ

一、諸平わかく此物語を著しく史実的に見、唯單に言葉の上に意を注ぐ可きに非ずとし、其例として二條の作に通へる條を詳しく解説して、あるまじき道德上の反逆児でわ無い事を辨護してゐるのである。

一、又此事実を見る懊言すれば、古文學を見るに徒に文詞の上のみの解釈に捉われず、もっと実質的に見て事理を解釈して行くと云ふゆき方わ、一つの特異な態度と評してよく、諸平の研究上注目す可き占なりと信ずるのである。

曾丹集摘菜

『曾丹集摘草』わ諸平の稿する『曾根好忠歌集』の抄釈で、明治十九年（一八八六年）の冬、其門人の前田水穂が翁の三十年忌辰追福の供養の為に之を木彫せしめて、故旧に頒布せしめた刊本がある。此刊本わ當時己に草稿の虫ばんだ所わ虫喰いのまゝ空白として彫木して居る程であるが、之によつて諸平の歌見を窺うに足る絶好の資料となす事が出来るのである。此『曾丹集摘草』わ曾根好忠家集の内から僅かに四十九首の歌と、詞書一節とを抄出して、之に畧釈を加えた小冊子にすぎず、刊本の紙数わ僅に十三枚ばかりの分量に過ぎないものであるが、其内容わ少々ならず読みごたえのあることばに満ちて居ると云う可きである。

一、曾根好忠の家集（家集）についてわ、既に契沖阿奢梨によつて、其歌の読み振りに清新な所があり、一個特異の歌風をもつて居る点を摘示された所であり、後に此集を校訂した岸本豊流・安田躬恒（加茂季鷹門人）・中岡寛光（村田春海門人）らの其の序言中に舉示して居る如くに

和歌に師なし古歌をもて師とするか 此道の先達も云はれしぞかし されば歌學びせんには 先づ古の歌を眼に馴らし腹に味はひて よき歌のよき心をととりてこそ よき歌もいてきなまし さりとて只管古歌にのみ泥みて其姿を學ばんとすなるは 儂き似繪なと書きたらんか こと姿は似せ得たりとも まことのきはに至れる事少なかるべし はやくこの心をさとりて心を古に基き詞を今に取りて 読み口にさへに改め物されしは 獨り丹後様好忠ぬしになんありける

次第で、曾根好忠の歌わ実に一風かわつて居るのであり、其清新澁刺にしてキビキビした力のこもった、しかも古を失わざる歌ひぶりが、丁度當時に於ける諸平の態度に似通ふた所があつて、此点靈犀一脈通ずるものが存すると見る事、決して誤りに非ずと信ぜらるるのである。

一、されば諸平は此『曾丹集摘草』に叙して曰く

曾根連は石上朝臣の同祖饒速日命の後なれどはかくしき人もきこゑず ひとり好忠の名世にかくれなきは其世より「かいなで」ならぬ歌よみなれはなるべし 父祖などつまびらかならぬぞ口惜しきや 家は此歌集三月終に「梅津川春のくれにそ成にける庭のゐせ支もせきとゞめなん」 又四月の詞書にも「梅津川春のくれに

し朝より庭の草もひまなく」など見えたるにて 其あたりなりけん程知られたり 歌の様一ふしありて『萬葉集』にすがれる読み口なれど 其比の俗語とももこれかれ見え いとことやうもありて解得かたきふし多ければ 此集読み味ふも歌學びの一つにして 誰にも心よすれどいぶかしきなしは さて過來にけるを 文政の頃(一八一八—一八三〇年) 江戸人源躬弦が校正にて いささかたより得たるものから 中々まきはしき事ばもましりて 一首の格調などのかたに心つくさはりともなりぬべし 今見むに先其歌柄よさあしさを心にはいたため さて解きかたきふしをも辨ふへくなむ そは此集にかきれる事にもあらねと大かたの集よりもめづらかなる辞ともあまたあれば たゞ其興あるかたにのみひかれて さらぬ歌をないかしろに見なさんか くちをしければいさゝかことわりおくになん かくておのがひとつ二つおもひよれるあるは 人のかたれる事ともをつきしるし つきく考さためてんとふとおもひよれる この一とじぞ

菅原 諸平

と曾根好忠の歌の格調用語などについて大畧の解を下し、其万葉調なる事を明かにし、且つ源躬弦等の校訂に未だ謙焉たらざる旨を明かにしてゐる。

一、此『曾丹集摘草』の刊本も小冊子の故に今己に残存少なく、今私共の手許にある書も、己に相當虫喰を生じて、読みづらひ所もなきにあらざである。今此うちから五・七の項を抜いて諸平の之に対する意見を窺つて見る事にする。

二、諸平自身の歌について見て感ずる事の一つわ、其歌の「本歌とり」と云う事を中々に重んじた事で、之わ即ち古来儀式の場合に先例を尊重したると同じく、崇古或わ尊古の思想に基く事で、誰しも當時に在りてわ、之を尊重しないわけでわなかつたけれども、就中諸平に於てわ之を強調する事著しいものがある。この思想の歌に及ぶ所、即ち古語を尊しとし・先例を重んじ・本歌を尊重する事となる。此事わ諸平がいろくの考証を物した場合にも見え得る著しい特色で、今この曾根好忠が集の抄釈についても之を見通すわけにゆかない。今其例三項を引用して見よう。

正月

須磨の蛸も今は春べと志りぬらしいつくともなくなへて霞めり

「塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり」

を本歌にして 四句をかくいへるなるへけれど いとほのかにて須麻せんなきこちす

みやつこき生きる垣根ぞ春たてはふかきみとりにさきは見えける

造木(ミヤツコ木)は接骨木(ニハツコキ)とも云ひ、今庭床(ニハツコ)とも多豆(タヅ)ともいふ木にして、此木芽ざし諸木のうちにていとはやければ、先ぞ見えけるといひ、国造伴造さらてもおほらかに臣連のやんことなきにはならぬ、

下官をいふみ奴の義なるべければ、此歌も六位の官人の服色先立て見ゆる意にもあるへけれど、猶おもうに官奴のまもる神社には六位の袖の色多しと云う意にとりなしたるなるへし。神垣を垣根といへる証多し。この歌を本歌にて『散木集』に

恋

春されば生る垣根のみやつこ木われこそ先におもひそめしか
とよめり、先に染る意 先は見えけるといふにおなし

三月中

たくひれの鷺坂岡のつつし原色てるまてに梅咲きにけり

本歌

たくひれの鷺坂山の白つゞぢ我にほはね妹にしめさん

万葉九卷に見ゆ、さて此四句は色へるの寫誤なるべし。岡の名の鷺を彩色^{イロヘ}たるやうに、白つつしの花咲けりといふ意なるへし。

九月上

住みよしのなこしの岡をたにつくり数ならぬ身は秋ぞ悲しき

「万葉集」十卷

住みよしの岸を田にはりまきし稲かてて刈りまてあはぬ君かも
を本歌にてよめるなり。二句 ならし岡と『夫木抄』にはあれと、住みよしは稜する所なれば 本集のかたを正しかるへし 二三の句本とも互にあやまたれるを今考へ足めつ

一、諸平の考証わすべて其聡明英敏なる頭腦才腕のひらめきを随所に見せて、実に心にくさまでに明快なる解釈を試み、かつ前人未発の言に満たされて居る事に驚嘆する次第であるが、此『曾丹集摘草』に於ても又之を見るのである。

二月始

ささき津にすすきさほせり春毎にえりさす民のしはさならしも

ささき津一本 さゝきつま 又さゝき水に 又さゝきつきともあり 本集三月終

野洲川の早瀬にさせるのほり梁今日の日和にいくつつくれる

とよめるをおもふに これも湖にて魚をとることをよめるなり 初句湖辺の地名をなるへけれど今詳ならず

古蒲生郡篠筥(サゝゲ)の郷見え 今も佐々木村あれど湖辺にはあらずとか

今おもふに『うつほ物語』(吹上 上) つるがなるあまのいをとまあまたかけて千すはつぎつぎ天もほしたり(そをくもと昔より今本くもと誤れり)と見えたる は。つ。き。は永久百首家郎の歌に

ぬれ衣今そはつきにかけてほすうつきしてけりよさのあま

と見え さらに歌にもよみたるものにて 竿をかくる杭なるへし 今世物干杭とて民家に立ておくはこの遺風なるべし かくて此初句ハ「はつきつぎ」にて 物干す はつきのみしかければ 継々にして簀搔をかけほし たるの意なるへし さらにさらは はつの誤とすべし 簀搔は芦をあみたる簀 さほすは干すことにてき。に意はなく発語のさまに聞え

三月中

山姫のそめてはさほす衣かと見るまで匂う岩つつじ哉

九月上

秋風のふきて衣をときみだりさほすほとこそ寒さめも見れ

も皆おなじ「えり」は むかし遠江よりのかへるて 四月許近江国膳所の里を過とて 湖を見わたすに 汀のここかしこは 垣の如くたてめぐらしたる芦簀のあまた見ゆるを 里人にその名をとひしに「えり」となん申す かの簀のうちに鮒の入るを捕らん料になんといへり 此名はやくも其国人などにも聞しかば かの国人の心あらん きははやかにて魚とるにも「えばさす」といふことありと聞しかどそのさま今よくも覺えず

三月終

浅ちふも雀かくれに成にけりむへ木のもととはこくらかりけり

新六帖

もえ出てし野辺の若草今朝見れば雀かくれにはやなりにけり

とよめるは此歌に本つきたるなるへし 又『蜻蛉日記』(下)「三月になりぬ このめすいかくれになりてとあるも 雀かくれの脱字なりとは やく人の云へるが如し」 今の周防の国の南の山さとわたりには 此詞のこりて「柿の葉も雀かくれになりぬ」と里人のいへるをきゝたりと鈴木高□がたれるよし 歌淡に見ゆかゝれば草木ともにいふ詞なり

山かつのはてに刈ほす麥の穂のくたけて物をおもふころかな

堀川百首に

吹く風に朝毎稲を干すよりははてをゆひてぞかくへかりける
本郡・在田郡山保田郷にて稲をかくるものを「はて」といふとぞ

十一月上

見わたせは越の高根に雪つもりいさしら山のほとはいつれぞ

二句一本こしのかたみちとあり 元弘四年^(二三四四年)に書せる本国日高郡『愛徳權現記』に「古志の堅道に七日行く七日の間とまりし」と云ふ詞あり 此書神世の御伝を書して此詞なともいと古き世のまゝにしるせりと聞ゆるに此集に見えたるもおかし

へつくりの垣根の雪をよそ人はつるの上毛と思ふらんやそ

本集源順が浅香山なくはつの返し歌の中にも

へつくりにしらせすもがな難波江の芦間を分てあそぶ鶴の子

とあり 『撰津国風土記』云(文永十年^(一二七三年)卜部兼文『古事記』の裏書に見ゆ)

稲倉山昔止た呼可乃壳神居山中以盛飯田爲名人曰昔豊宇可乃壳神常居稻掠山而爲膳厨(へツクリ)之處後有事故不可得已遂還於丹波国此遅乃麻奈草^{ヲチノマナクサ}

と善厨の文字を訓める意にて料理する人をへつくりといへり 今も京の四条家などにては料理人を然よふとぞ さてへはひえの約にて『古事記』の歌のこきたひえを傳に聶ね也 肉を薄く小さく切こなりとある意なるべし 鶴の包丁といふことは早くより故実ありて へつくりの第一のわさなれば二首ともかくよめるなり

此事故『散木集』に見えたる詞書等にも考合すべき事あれば 彼集の考證にも云ふへし
増基法師『遠江記』に

田鶴ならぬたかしの山のすゑつくりものおもひをすやくとすときく
とよみるも陶工(スエツクリ)と料理(へツクリ)をかねたるなるべし

冬十

いはやまとゆふしてかけて祈こしみかきおしなみおける霜かな

天石戸別亦謂櫛石窓神亦名八豊窓神此神ハ御門之神也と『古語拾遺』に見ゆ 岩間の神岩屋窓の神並同神の御名の又の伝なるへし

一、以上数例に見る如くに、諸平の古歌・古文の解釈に地方に残存する古語を拾って、之を用ふるが如き行き方わ、まことに民族的であり、今日に在りても頗る尊重すべき態度と云ふべく、「えり」に近江の俗風を引いて之を証とし、「雀かくれ」に周防の国の人口に用ふることばを引き、「はて」（稻架・今ははだと云ふ）に、紀伊の国有田郡保田の莊の慣用語を引く等のことは、まことに之を珍重すべきであり、諸平の古文・古歌の註釈に他に類を見ざる特異の点ありと云ふべきであると信ずる。又住吉の夏越の岡と考定したる一首の考定の如き、何人も異存なき考定と称せざるを得ない。

一、諸平の博學多識 この僅に十三枚五十首足らずの『曾丹集摘草』の評釈に引用されたる書物の名を挙げただけでも直にうなづかれるであろう。試に引用したることばによつて、その書物の名を記せば

『後撰集』・『蜻蛉日記』・『拾遺集』・『新古今集』・『和泉式部後集』・『散木抄』・『永久百首』・『更科日記』・『宇都保物語』・『古今集蒙求』・『榮華物語』・『大和物語』・『調物語』・『新六帖』・『堀川百首』・『万葉集』・『夫木集』・『愛徳權現伝記』・『摂津国風土記』・『古事記伝』・『増基法師遠江記』・『和泉式部集』・『古語拾遺』・『賀茂保徳女集』・『相模集』

以て其注釈・解釈のたしかさ・豊富さを知るべきであるとおもふ。

一、曾根好忠が集についてわ契沖阿奢梨の校訂、源能弦・岸本ユ豆流等の校訂の他、當時之が解釈するに手を染めたものの殆どなかった。それを僅かに五十首と雖も抄出して之に注釈を加えた、而も其注釈たるや実に簡にして要を得て居る。われわれわ諸平の『曾丹集摘草』を尊重しなければならぬ。

注 前田水穂の事別項柿園門人の項を参照

枕詞考・其他柿園雜考

一、諸平の『竹取物語考』・『條里圖帖考』・『枕詞考』を翻刻出版したる室谷鉄腸氏わ、其書の跋文に於て、「大人の遺書数百部を閲覧して」諸平の孝識の宏く深きを、知つたと記して居る所を見れば、諸平が生前門人の室谷賀親に送つた書き物のまとまりしもの、断片のものが数百部今尚残つて室谷家に在り、未だ門外不出のものも数多くある事が想像出来る。又加納録輔氏の翻刻した諸平の紀行歌文『山管』の序文中にも、多紀仁氏が尚他に数種の述作遺存

する事を述べて居る。故に諸平にわ尚世に公刊せられない幾多の著作の存する事を察する事が出来る。之等を参照して今日迄世にあらわれたる諸平の主なる述作を拾ひ上げ、一寸分類して見ると左の様な事になる。

一、加納諸平著作一覧表

◎ 神に関するもの

・『宅神祭考』

◎ 国土に関するもの

・『條里国帖考』・『紀伊国古風土記考』・『紀伊・伊勢・志摩三国の国境古へと今と異なる辨』・『古代村古墓考』

・合著『紀伊國名所圖繪』

◎ 国文学(著作)に関するもの

・『額田王考』・『古今集眞名序解』・『竹取物語考』・『伊勢物語論』・『枕草子考注』・『榮華物語校本』・『宇津保物語註解』・『曾丹集摘草』

◎ 歌文学等に関するもの

・『天地(亜米都地)』・『枕詞考』・『雑朽(こすゑ) 水鶴 巳津物 卷 寄大臣 漢奴加己利會者かむひ 石川古舞 香久山之衣 玉精 山多豆 高山 腰の芽の輪 等)』

◎ 有識故実に関するもの

・『冠位沿革』・『三位物語』

◎ 歌集及文集

・『萬葉名所集』・『柿園詠草』及『柿園詠草拾遺』・『類題鰻玉集』・『山菱』・『紀伊之国日記』・『摘草』・『櫟亭記』

◎ 雑

一、右のうち『宅神祭考』わ『竹取物語』刊本の口絵寫眞中山美宕より諸平宛の書簡寫眞版中に見えて居る名である。

実わ未詳。『扶桑葉国考』わ瀨見善隣『うもれ木考』の中に見ゆる名、実物わ未見。『紀伊国古風土記考』わ『万代村古墓考』とともに『山菅序文』多紀仁氏の掲げた名、実物未見。『古今集眞名序解』・『枕草子考注釈』わ、諸平より室谷賀親、又わ瀨見善水宛書簡中に記事あり実物未見。『榮華物語校本』・『宇津保物語註解』わ『竹取物語翻刻』の巻頭に書かれたる『加納諸平畧伝』中に見ゆる書名、実物未見。『天地』わ伴林光平『福木抄』に見ゆる書

名、実物未見。『香久山の衣』・『山多豆』・『玉精』・『高山』・『腰の芽の論』わ前記『山菅』の序に見ゆる著実名。『冠位沿革』全上。『三位物語』・『萬葉名所歌集』・『木之国日記』・『摘草』・『竹取物語考』・『巻頭諸平伝中』に所掲、何れも実物未見である。

一、斯様序次して羅列して見ると、諸平の學者歌人としての面貌が一目瞭然、其の著述も決して僅少でない事を知り、其足痕の可なり大きい事を知り得るのである。

一、茲で『枕詞考』・其他について畧解を附して置く。枕詞についてわ加茂真淵に『冠辞考』の大著がある。諸平の『枕詞考』わ之に比し簡明だが

枕は纏坐まきくらの約にてまきてねる、坐の義なるが、其枕は上にあるものなれば、頭たまといふ意にも云へり。と其起源から説き起して

枕詞は頭辞の意にて 古は神名・地名何にまれ其名の上におく風俗の諺あり 是かの頭辞にて其諺を常に云ひなれ 常に口ならす事を枕詞とも枕言とも云ひ 常に物書く手控の帳を枕冊子と云ふなるべし

と解いて居り。例によつて『古今集序』・『萬葉抄』・『荒木田久老の説』・『常陸風土記』・『内宮儀式帳』・『古事記』・『日本書紀』・『萬葉集』等を引いて簡単に説いて居る。

一、『條里圖帳考』わ一度本居内遠の著とまちがえられた由で、單行本としても内遠著として上梓された事があるが、其記述ぶりから諸平の著と知るべきである。「支那に井田圖などある如く 我国にも條里御圖帳がありし」との事で、之を詳に考証したもの。『紀伊国續風土記』撰集などに刺激されて出来たものと思われる。『紀伊・伊勢・志摩国堺考』の如きも亦そうであろう。偶以て學問見識の該博なる証するに足る、特異の著作と称すべきである。

一、『囲碁濫腸考』に至つてわ珍中の珍。諸平の詠物の歌中に將棋の駒・將棋盤・囲碁等を詠じたものがあり、亦徒然の折にわ一局弄した事もありしか。今此珍書に接して実に端睨すべからざる諸平の面目を見出す。之でわ當時何人も諸平の前に三舍をさけたる可き事わ、凡そ想像のつく事である。若し諸平にかすに今拾数年の日子を以てし、家庭によき後継者を得て彼の業をつがしめあらば、諸平の業績わ尚数倍の光輝を發したであらうと思はるる次第である。

『柿園詠草』及『拾遺』

一、諸平は俊敏なる穎智の持ち主であり、尚古の根本精神に造り詣った敬神家であり、皇国の本義に透徹した勤皇家であり、孝者としてわ本居孝系中の明星、歌人としてわ古今獨歩の地歩をしむる尚古理智派である。而も門人を導き教ゆる事懇切周倒、師匠本居大平をはづかしめざる親切なる師家であった。『類題鯁玉集』の撰についてわ嚴撰を極めたる事、時として一首も入撰し得ざる者も多かった旨、室谷賀親宛の手紙の中に認められて居る。それ程に嚴格潔癖なりし諸平が自己の『詠草』についてわ一向無頓着で、之を一卷にあつめて門人に示し、又わ後世に遺そうと云う風の事を絶えて考えなかったと云ふ事わ、まことに奥ゆかしい事である。

諸平を悪く云う人わ、諸平わそう云う謙遜を売り物にして、伶俐に世渡りをする事を考へたのだ、と云う人もないでわないが、私共わそうわ考へられず、諸平わ唯まじめな學究として或わ歌人として、内にわ烈々たる気魄を藏し乍ら、外面之を歌に託して志を云うばかりで、扱俗世間わあまりに汚く、權勢爭奪の渦中に加わるにわ諸平の性格わあまりに純真正直に過ぎたのだと思われ、そこに無限のしたしみが感ぜられ、又文人諸平の眞の面目を見出すのである。

一、ここに『柿園詠草』及『柿園詠草拾遺』がある。知る人は知っている、共に諸平の歌集である。此内『柿園詠草』わ半紙大判二冊、『拾遺』の方わ一冊。『柿園詠草』の方わ諸平生前の（八五三年）嘉永六年十一月に上梓されたものであり、『拾遺』の方わ諸平逝去の後廿三年明治十二年（八七年）に上梓されたものである。

諸平の歌わ此三冊の歌集の外、『鯁玉集』第七編にも収載されて居る外、門人達の手許に書簡の端に記されて、読み捨てにされたものが少からずある。森敬三氏の調べた処によると、短歌千五百首・長歌五十首以上・施頭歌三首と云う多数に上つて居ると云う。實際わ尚多数あるであろうと思われる（濱田康三郎曰く、『柿園詠草』短歌一〇七五 長歌三〇、『全拾遺』短歌二三〇、外に蒙求歌二五八 長歌二十一）。

一、『柿園詠草』及『全拾遺』わ諸平の歌集であり、共に木彫印刷の本であり紙数合計百五十枚ばかり、一枚廿四行一行に短歌一首がかゝれて居る勘定になる。故に半分を題詞と見て一枚十二首、その内に長歌もまじるし、題詞も長いものもあるから、彼是差引いて千何百首の短歌数になるのである。此『詠草』及『拾遺』わ共に諸平門人の編したものである故に、其編次がまことにだらしくなく、後世のわれわれが之をよんで、何れの頁にどんな歌があるやら殆ど分らず、そこは全く種別と云う事が行われて居らない。之わ『柿園詠草』及『拾遺』が他の歌集と著しく趣を異にするところであり、形の上でわまことに乱雑、『拾遺』に至りてわ殊に甚だしい。

一、『柿園詠草』の末尾に諸平わ跋文を認めて居るが

幼き時より歌よまむ事を好み侍れど　はかはかしきふしも侍らざりければ　父翁の歌とて『鰻玉集』にのせて
萬代につたえ侍れど　みつからは『詠草』とて殊更に人に見すべき心構へも侍らざれしを　折々の會などに
よめる中より　十・二十と寫しとりてもたる人も稀々には侍るに　先つ年因幡の年平ここにありける頃共に詠
める歌　さらても見聞まに／＼懷紙などに書ととめけむ　光平がもとに河内に冬こもりして書集めける一卷に
又人々かそへ侍るもなれかれ見し者らがふとかそふれは　それより十年のあまりを経て心地そこなひ侍りし
時亡おからむ後のかたみにもとて　義信が筆とりて古蔭らとともに　此処彼処の人々のもとに伝われる將書　櫃
の奥におしやられし走書の反故どもをあつめて　同じ様にいたつききけることとさは　やがて後こそ語り侍
りしが拙き歌をしも　さばかり集めつる志の浅からぬに一昨年の秋はかり　其人失せにければ　さまかへたる
かたみとして　茲に見つつよみひがめ寫し違へなどを改めて　千歌はかりを　序も定めず抜き出し侍れど　弘
仁より此方のめめしき方に流れて　神世のあとに続くへき姿詞もなくいとやさしきすさまに侍るを　一門かひ
たせめにせめてかく板にさへ彫らせ侍るよ

（一八五三年）
嘉永六年霜月廿三日

加納　兄瓶　しるす

此歌集わ流石に諸平のそうした心づかひから、売弘書肆の名を記さず、唯柿園社中藏板とのみ記して居る。

一、此詠草二巻の中に収められたる歌わ、諸平其頃迄の詠歌であり、若い時の詠もまじって居るわけで、いづれが何時頃の歌なのかさっぱりわからず、之を研究する上に至大の不便のあるのを知る中について、凡そ何時の頃の作なるべしと推定さるるものわ内数十首のみである。

一、『柿園詠草拾遺』の方わ明治に入つて、其門人達が各自に持つて居た師の詠草を集めて一卷としたもので、
・六年の詠と、外に若干の年月不詳のものがあるが、大体諸平晩年の作が収められて居ると見てよく、之に『鰻玉集』第七編に収められた歌を加へて、晩年の諸平の詠を知る事が出来る。晩年と云つても知命の年を出ずる僅に二歳の若死であつた。先づ智慧盛りの年に死んで居る次第で、元来理知的な歌ひぶりが最も理知的であるべき年令故に、この『詠草拾遺』の歌こそわ諸平を知るにもつとも好都合であらうと思う。唯此集わよせ集めで序次が乱雜、一寸被閱するにこれ位不便な集わない。

一、『柿園詠草拾遺』わ因幡の門人飯田年平・足立正声両名が出版人となつて居り、凡例わ飯田年平・瀬見善水となつて居り、主として飯田年平と瀬見善水が骨を折つて資料を集めたものを、年平が肝煎つて版にしたものであらう。

『拾遺』の巻頭の語わ、門人の師を思ふの情がにじみ出て居る故に引用する。

故柿園翁

中頃名を兄瓶と改められしを後又もとの諸平にかへされたり

『詠草』二巻はやく世に施れり

は嘉永六年^(一八五三年)の冬板に彫りたるなり

かくて安政四年^(一八五七年)の六月に俄に身まかられしに

嘉永五年^(一八五八年)の頃よりの詠草は

翁はさらなり 教子とももとより立てて書きつゞれる巻などもあらざれば さてくちなん事もやと年頃心に

かゝりて いかに心の及ぶかきりはさくりもとめて一卷ともなさばやと思ひたれたるに 己等さきつ年より事

にふれて文通はす程遙に此事を相謀りてより 文のゆきかひも更に度重りつゝ同じ心にいたつきて 善水が自

らもたる 又友とちのもちたる又年平がかつゝ拾ひえたるも思ひ出たるもあり 又小谷古蔭がおこせたる一

とち 又一昨年^(一八五七年)の事にて善水が浪華にものしける時 佐々木春夫がもとを訪ひしに 春夫はたはやくさる心し

らひありて 翁にこひもとめてもたる詠草二巻ありとて見せられたる 此れは嘉永六癸丑七甲寅年の歌なり

また短冊帖をうつしたる一卷をも得させたるを あまねくあはせ見るにおかし歌を ここにもそこにもしるし

たるが多くつらねさまも いとしどけなきをそれこれと取りわかちて かくついでてかきあらためたるになむ

すへてもとの詠草によりてもものせれば 『鰻玉集』の七編に入りたると同じ歌もいささかはあり

末にあけたる蒙求の歌二百五十八首あり これはいつはかりより読み出てられけむ題の半に至らずして歿られ

たる事と見えたり さて大方はかれ癸丑甲寅の巻の中にかきへえたるか いかなる故にかはじめの方五十二首

かけたりしを 善水からくしてもとめいてて補えり

集中題の下 また歌のひだりにをりゝ見えたる註は その拠を示さん爲めに翁のみつからものせられたるを

文の長きは今ちゞめて記せり

明治十二年九月

因幡 飯田 年平

紀伊 瀬見 善水

尚此書の板行上梓わ明治十八年四月十八日となつて居り、柿園門人で宮内省歌所出仕の足立正声が、其世話をしたものと思われるのである。

一、自己の著作を後世に遺す事に心を用ひなかつた諸平の詠歌も、其門人達の努力によつて、大半こうして集となつて世に残る事となつたのわ有がたい事である。

私共わ此三冊の書物の中から諸平の全貌、就中思想家乃至孝者としての諸平・勤皇家としての諸平・郷土歌人としての諸平の眞の姿を見出す事が出来、諸平が唯一介^界の歌よみに非ざりし事を思つて、今更の如く思慕の高まりゆく

を覺ゆるのである。

一、尚『柿園詠草』及び『拾遺』のことば書のうち二・三畧註。他項に記事するものを省く。

(イ) 中村 眞貫

(ロ) 日ぐらしの芝

(ハ) 田所 顯周

(ニ) 緑 窓君

(ホ) 和夫 正紹

鳴瀧

あしか島

伊丹 蓼園たてその

周参見

近露ちかづめ

湯の峯

花の窟

鬼が窟

巴嶽

秋津河

千疊敷

楡杭巖

谷ぐゝ

青木 永章

羽根田 良裕

岩崎 美隆

山田 久秋

未詳

紀伊有田郡廣男山近く

田辺藩町年寄 諸平及繁里門人

未詳

福田和夫 若山市中島八幡宮神官

福田左近正紹 紀伊若山中之島 井手半兵衛

紀伊海草郡

日高郡白崎村

中村良臣の家号

紀伊西牟婁郡周参見町

紀伊西牟婁郡近野村

紀伊東牟婁郡四村温泉場

三重縣北牟婁郡有馬村イザナミの命かくれ給ふ所と伝ふ

今鬼が城 三重縣北牟婁郡木寺町

在大台ヶ原山

紀伊西牟婁郡秋津川・上秋津・下秋津 三ヶ村

全 白浜町白浜温泉

全 古座町楡杭

ひきがへる

長崎 鈴之屋門人

未詳

鈴屋門人

紀藩士 藤垣内門人

(ロ)(イ)(ス)(セ)(モ)(ヒ)(エ)(シ)(ミ)(メ)(ユ)(キ)(サ)(ア)(テ)(エ)(コ)(フ)(ケ)(ヤ)(ク)(オ)(ノ)(ヰ)(ウ)

加納 清雄
觀如院
西浜御殿の大殿
早川 眞孝
実裕法師
阿弥陀寺
鹿背山
藤井
矢野 守光
小杉 俊夫
酒井 一門
高照師
幸年
松原の瀧
宮部 義臣
松田 直愛
松尾 偉俊
直川寺
日前宮
小浦 廣名
画家 文顯
竹垣 主
山内 繁樹
本居 永平
高榆 勝峯

同
大平の末子
鈴屋門人
未詳
（画家文顯は沼津文顯ならずや 貴志氏の『藝術家小伝』正編八九頁 康三郎）
紀藩士 代官ナドツトム
和か山市秋月 官幣大社
紀伊海草郡直川村
未詳
右全
未詳
有田川にあり
稲葉後年（若山）
未詳
全
全
全
全
日高郡藤田村藤井
シシカセ山 有田・日高の境にあり
和歌山市中之島
未詳
信濃 未詳
紀藩第十一代治宝候
未詳
全

(ハ) 長田 鶴夫 大阪鈴之屋門人
(ニ) 檀 嵩雄 未詳
(ホ) 長田 比等之 全

諸平の作歌態度

一、諸平の歌わ萬葉の歌に古今の調を加えて、微に萬葉の句のする古今調の歌風なりとして、萬葉ばやりの現代でわあまり喜ばれないと云われる。諸平の歌わ元来孝者の歌である。あまりに思想が盛られ過ぎてあつて、随つて質実に過ぎて華美優婉に乏しく、あまりに理知的であつて奔放自在な感情の流露が悉く制約せられてあり、其一首一首が悉く鏤心彫骨の作で、推敲又推敲一字一句も苟もせざる潔癖から生れ出て来て居る爲めに、そこに一段の精採を缺く、殊に用語の上に於て詞わ古きをよしとするとの詠歌、大概の原則を格守し殊更に古語を転用する場合も多く、自由奔放わ薬にしたくも見出しがたい。キチンキチンと居住居を正した上下姿を見る様な感じに打たれるのであつて、造形の美があつても自然の美にわ乏しい傾向わ争われないと思われるのである。

二、併し此諸平の作歌態度についてわ、諸平に一定の意見があつて、其意見の下に執り用ふる事であるから、漫然諸平の歌を斯々と評する事わ、あまりに事に不忠実なりとの譏を免れない。われわれ諸平の歌を語る者にあつてわ、まづ諸平の歌見を知るの必要がある。

一、諸平の歌見についてわ、諸平より室谷賀親に宛てたる書簡の中に、「過日歌の本論と申さんもの一・二枚に認試候」とあり、又伴林光平の『稻木抄』の中に「柿園翁の天地といへるものに空海がいろは歌七五の句法の濫觴なるよし妥しく論ひおけり」とあつて、諸平の歌見わ此の天地と云う文をみる可く、此稿本わ文學博士佐佐木信綱氏の手許に遺存するかと伝えらるるも未見。よりて「歌人書簡集」・其他に散見する諸平の意見を拾ひ集めて、纏めて見たいと思ふのである。

一、第一諸平わ思想なく・學問なき歌人を「手爾遠波」^(うでにいは)家として排斥して居る。此事わ瀬見善水宛の書簡中に

一兩日前より江戸海野幸思門人 今道心にて無相と申す者来 學事は更になし たゞ歌をよみ申候 所謂テニ
オハ家也 今朝出立致候而四国辺へ行申候

とあるによつて察せられる。

一、諸平にあつてお歌わ、国風第一・宇宙第一の技・治国天下の道と心得て居り、随つて歌わ尚古勤皇の皇国思想から出たものでなければならぬとされて居る。之を諸平から室谷賀親や瀬見善水宛の書簡等中に、折にふれて高調されて居る所で、此点に於て諸平が忠実なる本居思想の承継者であつて、藍を藍より出でて藍より濃きものである。而も諸平自身の詠の何処からでも容易に此句を嗅ぎ出す事が出来、又そうした句の漂える事強い歌に、諸平の歌としての傑作を見出し得るのである。今此点について諸平の書簡中の一・二節をひいて見る。

（歌は）皇国第一之風流 宇宙第一之わざなれば 扱々骨が折れ候へ共 萬世に君子之国風俗を伝ふる事 これをおきて何かあらん（中畧） 歌は開闢より億兆萬々歳有情也と定めおき候 頓首 尤今年は禁裏御

歌會御無沙汰御願有 之神社へ御法樂之由二付野生等も御国風の最大一治国平天下の大道をますます万世に伝ふる爲御世壽之會致候筈に御座候 俗人或は文治以降の武器等のみを国家の要の様に心得居候輩 御国風の第一の歌道をたゞなぐさみの様に存候輩もあらんかとて禁裏にても右之通の御事 誠に難有事に御座候 我天皇は五所謂五六洲かけての天皇なる事 年々夷類等もわきまへ候様に相成可申 愛度御代に御座候

以上 諸平より室谷賀親宛書簡『歌人書簡集』

一、更に言をかゆれば歌道わ即ち敷島の道にして、此道やがて古道に通ずと確信して居る。此言葉・此信念がまことに平凡なる言葉であり・著しく常識的であり、殆ど他奇なく何人と雖も凡そ歌詠む程の人わ、誰しも此考わ多少に不抱・抱懷して居る所である。唯其濃度・信念の熾烈さの程度が問題となるのである。此点に於ける諸平の信念の強烈さや隱微の間に、其詠歌の上に盛り上つて居るのであつて、此点を唯一時其歌の風潮、又わ表現技巧が奔放自在でない事の故を以て、等閑に看過する事わゆるされぬのである。諸平の歌の一首一首にわ、此思想の背景の存在する次第を銘記すべきである。

二、次に諸平の歌の特質わ、其技巧の精練なるにある。此点わ人或わ却つて技巧を無視した粗笨さを感じる事なきに非ずやと思はるるが、深く諸平を思はざるの致す処で、諸平の表現技巧にわ石橋を敲いて渡る手堅さがある。此点につき門人伴林光平わ、其著『稻木抄』の中に於て

我師柿園翁の歌に『万葉集』中歌のことの序に 詠何々歌と物すべき所を 皆詠何々作歌

と書り「作字意を留めて見る可し 歌は草卒に詠すべきものに非ず 幾たびも思ひめぐらし見直し 開直してかくかくに皆苦心して詠むべきこと、此作の字にて知られたり とのたまはく」とあり、又諸平の室谷賀親宛の書簡

中にも

尚々先年吉野川・伊勢の宮川・熊野川と三大川の水源の巴嶽と云う山へのぼりし時の長歌 やうやうよみとのへ申候 其内入御覽候

とあつて、巴嶽に登りし時の長歌などわ、随分苦心して作つたものなる事を知るのである。

一、諸平の歌わ又あまりに理知的に過ぎ、随つてすべてに華美が掩われ・優婉が失われ・素朴さがなく・奔放さがなく・自由さがなく・強烈なる気魄がこの理智に災されて、包みかくされて居るのであつて、此点わ諸平の性格・學問の然らしむる事わ万止むを得ざる処で、一面諸平の歌わパットしないと云われ、又作りすぎて居るとされる所以であらう。併しそれがまた諸平の歌の特質をなして居つて、来る可き時代の文化人の間にわ、此の態度そのまゝ是認さるる時もあるであらうと信ぜらるるのである。蓋し深く洗練された感情が理知を通じてなされた表現わ、近代文化人の特質であるから、此を代表する諸平の歌の是認されない筈わないと思われるからである。

諸平わ歌わ人の心のまことより出でて天地を動し、鬼神を感じしむると記した『古今集』の序の言葉を其まゝ信条として、之を實踐した人であつたのである。故に伴林光平『稻木抄』に諸平の説をかゝ曰く

光平始て柿園先生の御許に参て仕うまつりける時 歌は如何ならん所をば主と立てて詠み侍らんぞと問侍りければ 唯己が心の好むにまかせて詠むべし 人の心各異なるべければ 其を齎しくはなし得がたし されど何れ様の詠み出すとも 歌になるとならぬと差別は必ず有なれば 其をこそ教へ諭すべけれ 歌の様はいづれをとも吾は得定めず と答給ひき 此御教今時のうたよみにはこよなき藥石也

とあるが如くに、よかれ・あしかれ自己の個性を發揮す可しと云うにあつて、之又如何にも平凡の説だが千古の眞理であつて、古も今も一貫したる原則であり、此信念を守つて此を忠実に實踐にうつしてゐる所を以て、諸平を偉なりとしなければならない。

一、因幡の人新^{あたらしき}貞^{ただ}老^{おい}わ柿園門人で、諸平を以て柿本人麿・加茂真渕とを三大歌聖と称揚する程の諸平傾倒者であり、『柿園秀歌傍註』の著作を爲し居る人であるが、此人『万葉集摘英新釈総解』第三に諸平の長歌詠史二首を掲げて、之を註釈してゐる。之詠史二首わ、われわれとして見ればうっかり看過してしまひそうな作であるが、新貞老の説明によつて、如何にも諸平の作歌に対する態度を知るに好都合で、なるほどとうなづかせらるる点がある。故に之を引用する、此歌わ『柿園詠草』に出て居る詠史。

西寺の老鼠こそ おむつみ袈裟もつむとへみえし野に於てる虎は何しかも鼠のまころおむもつみ袈裟もつむらん其虎の息吹の狹霧天下すてに掩ひて鯨取り近江の海をひた土に吹きまとはせ沖さけて船はこけともへつきて船はたけとも沖の辺に眞梶ひきをりたときしらずも

又

鯨取淡海のうみは名のりそや見るめや生るみえし野の芳野の山は潜めやあまめやつどふかなりし時にあればか天の下国内ことごとく潮のいわきさわぎてえし野には潮をみたしめ淡海には潮をひしめしうつそみのこれの世の中二ゆくなして

第一首 まづ訳釈に

「おもむ」わ「御裳」なり、「つみ」わ「かむ」也、「もろこ」わ「如く」也、「ひた土」「眞土」にて、俗に「土べた」と云うに同じとある。次に解釈初句より既に覆ひまで俗言に積かばこれは

「催馬樂」に西寺の老鼠・若鼠御裳唆づ 袈裟唆づと謡えるをとりて 老鼠こそ衣服袈裟をつみかみもせめそれは聞えたる事なれど 三吉野に放てる虎が何故に鼠の如く衣服袈裟を噛み捨てしやと咎めたる言葉なり虎とは大海人皇子出家を望みて天智天皇より袈裟を賜りて吉野に入り給ふ時 虎に翼をつけて野に放つと謡ひし事あれば 放てる虎と詠まれし也 旨意は 皇子一旦佛道に入るとて落飾し給ひたれば さて終り給ふべきは理の當然なるを 其僧衣袈裟を脱ぎ捨て軍服を装ひ出立給ふは きこゑぬ御業にはあるなりと咎めて 其虎の嘯く息が天下を悉くかきくらし覆ひたりと云ひて 皇子の軍勢強大になりたる比喩なり 鯨魚取あふみの海以下の意は其虎の吹ける息が土べたよりすき間もなく あふみの海を吹きまどはすというは 天下に満てる軍勢一同に近江大津の宮を攻め悩すたとえにて 其風にあはてて沖の方へ離れて船をこげども堪えかね 又磯辺へより近づきて船をあげんとするも叫びがたく 沖の方にも磯の方にも何れへも逃るべき道はなく あきれ果てて眞梶をもち居りてなさん業も知らずといふにて 大津の官方防戦の術つきはて手を束ねて死を待ちし比喩なり

此二十五句の間にかくばかりの議論ならびに勝敗の形勢をいひ盡して 語調の高き実に高市皇子を傷みて 柿本大人の詠れたる 敵見有虎可叫吼登云々の長歌以来 かゝる歌を世に詠りしありしやいかに

さて「沖さけて船はこげどもへさきて船はたけども」此語の出所は「鯨魚取淡海乃海乎奥放而榜来船辺附而榜来船云々」とある 大后の御歌によられたるにて 此大人の歌は多くかゝる抛処ある也

第二首 訳釈

なそりそみるめ 皆海草也 海草が生ゆるならんとの意なり かづきめは 海にかづきいりて 海草をとる女
にてあまも同じ うつ潮は 潮にてみな潮と云う程の意なり いつき騒ぎてのいは発語 涌き騒ぎてなり 二
ゆくは成敗二途に別れどなり

此歌は天下の大変大洪水にて山海処を變へし趣 壬申の乱の比喻なり 一首の意を彼の俗語に釈かば 近海^{うみ}の
海に海草が生ひてあるのであるう 吉野山に其海草を海にかづき入りて取る海女が集まって居るであろうと冒
頭をおき 大海人の御名をも暗に含めたるなり どうした時であったか天下国中が残らず潮が涌き騒ぎて吉野
山に潮を満たせ あふみの海に潮を干さしめた 此世界が成敗二途に別れて一方は榮え・一方は亡びる さて
もさてもと云う大嘆息の意を言外に云ひのこされたる也 これ語脈上にうかび聞ゆる意にて 余韻の含蓄する
味ひは 冒頭のあふみの海はなのりそやみるめや生る 海草は食物なればうまきものの生ひてあるといふと意
にて 即ち近江朝廷にある大權なり 吉野の山にあるかつぎ女やあまめやつどひ 其うまき物を刈取りて得ん
とする海士があつまつてゐるといふにて 大海人皇子吉野山中に時を待ち給へるさまなり 常にともしれば我
余韻の事をいふは斯の如き味あればなり 今時の歌を詠む輩 かゝる妙味の世にある物とは知らず 無韻無調
の平語俗語を三十一字に並べつゝり そを歌なりと思ひ誇りて うるさきまで数多くよみいづるは 片腹いた
きはさるものにて 斯くまで言靈の幸ふてふは わが皇国自然の文を失へるを思へば嘆息に堪えざるなり さ
れどかゝる平語俗語をも取捨なく交へ綴りて我たけく取構えたるは 或一派の人人にて此風を攻撃する人も多
かれども いかに正しき語を並べたりとて 其継配置に注意せざれば 無韻のものとなりて平語と伯仲し 謡
ふべくもあらぬばかり拙なく歌とはいひ難し よき歌よまむとならば 此大人の著されたる『柿園詠草』・『同
拾遺』は所謂温故知新 古歌の語脉配置の妙所を近調に用ひて よみ出てられたるものなれば 熟読研究して
其高調なるを學ぶべくこそ

されど上にのべたる長歌の如く 此大人の歌は其趣向すべて人意の表に出で 殊に多く古事を下を含めて詠れ
たるなれば 浅學の人には解しかたからむ 他日此『詠草』にも註釈を試みんと思ひ構へたるなり あはれこ
の県居柿園の両大人は 柿本大人と等しき歌仙と知らざる世こそ悲しけれ(進藤泰世編『蜻蛉集』)

新貞老わ、かく結んで居る。此行き方わ諸平の歌の全部について同様である。

一、随つて諸平の歌にわ二つの特異な場合が見えて居る。其一つを故事を引用して、それを歌の中に織りこんで居る場

合

旅の五月雨道成寺縁起による

旅人のふくだやしなな風たえて日高のわたり五月雨ぞふる

此旅人のふくだ養ふ所、即ち道成寺縁起絵巻の中に絵圖となつて居る。旅人の行きながら、ふくだ餅を食ふ圖の語に

道にてはくるしからぬ物にて候へばふくだ養わせ給へ

と、中年男の人が若き女の人にふくだ餅一つ差出した所がある。之に對し女の人わ

「人のあひたらんに恥かしさいかに」げにもくるしかるましくば 旅もせよかし

と、評語まで入れてある一節がある。この『縁起絵巻』の姿を想像して旅の五月雨を詠じたのである。

建仁の『御幸記』に見えたる様を絵にかける中に萩原のあたり

うちなびく小野の萩原風こえて鹿背山は霧はれにけり

清少納言の『枕草紙』に云う原わ、萩原のみだれ咲きたる所に、大宮人が馬にまたがり旅してゐる圖で、即ち定家の『熊野御幸記』を胸にたゝんで詠んだ歌である。

田所顯周がもとにて水辺螢をよめる

建仁『熊野御幸記』による

たなへ川あせし渚やたつぬらん岸の芝生に螢とふなり

田辺川すたく螢はかり宮にほきし美草や朽ちてなりけむ

那智瀧

神あれし五十年の秋一つふていつまで瀧をさへむとはする

此歌は天明そのの年山すすなといふあらびありて瀧の上より落ちたる大巖をあかぬ事におもひてよめるなり

名草山の花見にゆきて

名草山麓の里も掩ふまで咲きけん花のかけぞこひしき

掩ひけんかげともしらぜ里人の薪になしし花ぞかなしき

此二首は五十年ばかり遠つ方迄、いと大なる木のありける物語をきゝてよみり

後京極殿灯のもとに書見給ふかた

きりきりす霜夜の窓に声かけて朽ちせぬ筆のあとをとふらん

此殿いみじ手かきにておはしければ 後京極様とて一乃の風をたてたまへり 又筆くちてきりきりすとなれる
事もものに見えたり

後嵯峨院の御時吉田の瀧にて御連歌ありけり 女房弁内待召されて簾中にさふらひけり 民部卿入道女房の申
次にて簾のきはに祇候せられけり 耳おぼろにて瀧のひゞきにまぎれあひて きゝわかれさりけるほとりに御
連歌もしまさりけるに 教少將 山より紫はくくりて瀧の落つるところにふたき待ければ 水のおともきこえ
ずなりにけり 其後御連歌しみて待りけると『弁内侍日記井蛙抄』などに見えたるさまかけるに
とたゑつるころをつかねて白糸のかゝるましばや花と見えけん

信濃人早川眞學が書ける震災の詩歌ともを見て

ちとせへてつらきためにひかんともしらて小松の根やゆるきけん

集中かなしき事とも多かるか中に 妻子弟兄渾十人俱遭難壓殺委灰塵豈思九百年前変惨苦如今係此身とつゝく
れる 自註に仁和(八八七年)十未大地震去今九百六十年とあるによりてよめり

一、其二わ古語を歌の句中に取入れてゐる場合

将棋盤

すみわふるくくめ屋形と見らめともさすかに賤か心をそやる

二句『久安百首』に見えたる詞に盤面の八十一目をこめたれとさはきこえかたかるべしや

餅花とて柳につくるをむさしの国にては眉玉とそいふとそ

下めくむ柳か枝の眉玉にまたきこもれる春の色かな

烏瓜

此種むすひ文に似たれは玉つさと云うとぞ

紅のこそ免の袖につゝみつるたか玉つさのかたみなるらも

旅人事 丹生告門による

あて人は夏瀬の丹生に枝やさすと紅葉をわけて櫛くしとるらし

水辺柳 全

杖つえさしし江川の丹生の柳蔭水葉も若かに春風そ吹く

円珠院の會に早苗

石の上なるの山田にとる苗の三つ葉さしたり国ぞさかえむ

四句有田郡の田植歌による

千鳥

えのくまにかさかくれせし芦の穂の花をさそひて立つ千鳥かな

初句海部郡の村名

初夏

玉津島興のいはやも夏ならし葛の若葉の露光る見ゆ

二句丹生神の故事

舞子に遊びける時の詠

此夜亀屋といふ家にてよめる

三首の一 又

山うつす大和絵師かも河うつす河内絵師かも望月のうかへる海を筆とりたゝにうつしてその絵まさらん

結句『源氏物語』若葉巻による

一、右に掲げたのわ『柿園詠草』中に収められた歌のうちから、其例証を引いて見たわけで、詞書に其旨を断り書してゐる分のみをぬいたものである。第一に故事を作中に引くと云う事わ、漢詩でわよく行われる所であるが、併し用事わ老練の人に非れば成りがたしとされてゐる。諸平の歌にわ其明示せざる場合に在っても、こうした歴史上の史実を背景にしてよんで居る歌が中々多く、歴史學を修めた人の眼から見れば、興味津々たる者が存在するにちがひないのであつて、是非の議論わ第二として、諸平の歌を通じての一大特質である。

第二に古語を襲用する事も又諸平の歌に見る特色で、これ又詠歌大概に所謂「情は新しきを尊び、言葉はふるきを尊ぶ」旨趣を忠実に実践して居るのであつて、ことばの事であるから古き歌のみならず、俗間に遺存することばでも苟も歌に通ずる雅言ならば、採つて以て之を襲用して居る。之も漢詩にわよく行われる所であつて、諸平の此態度わ幼児の師の中山美石が孝和漢に亘つて居た、その漢學教養が影響を及ぼしているののでわあるまいか、とも思われるのである。尚此行き方わ師匠の藤垣内ゆづりの形式で、諸平の創意でわないけれども、諸平の天稟の穎才が之を端的に応用した。其手腕が物を云つて居る次第であつて、此点も是非の議論が存するとして、諸平の歌の特色を

なして居り、ここに諸平の歌の今一つ円滑ならざる姿を却ってギコチなく見せる場合があるのである。

一、此点について伴林光平の『稻木抄』に曰く

吾師柿園翁の秋雲といへる題にて

背の山や西吹送る秋の雲大和にしては誰ながむらむ

と詠まれたる此歌の四句は、『万葉集』一卷なる阿閉皇女の越勢能山時詠給ひし御歌

これやこの大和にしてはわく永の云々

の二の句なれとも 斯くよみなしたる上にては 借用ひたる差別少しも見えわかず 斯く古語と雖もよく詠み得る時は 我物となりて其語却て新奇なり

一、尚諸平が其用語を重んじたる例として掲ぐる所、『稻木抄』に左の如く出て居る。

今は八年ばかりの昔 柿園先生の御許に候ひし時 先生の語りたまわく先頃 吾友山田久秋が

吾妹子が折りてかつらく青柳の糸のしなひに春風ぞ吹く

と云ふ歌をよみ出て 人々に語り出しを 友垣 みなめでたく くつがへりて 心悪く思居りしを程経て 又例の友許ゆきて 先頃の柳の歌の四句 柳にまつらはれて気概弱しかれ 「小枝に風の吹かぬ日もなし」と 改めたるはいかがあらんと語りければ 皆人其精鍊の程を感じあへりし 今は早むかしになりぬ 歌はかくこそあらまほしけれと 懇に語り出て教へ給ひき縁説 配当を嫌ひし例 古今皆かくの如し

諸平の表現技巧察すべきである。

一、茲に瀬見善水宛の諸平の書簡集に、香川景樹の歌を風雅ならずとして、自作をなした実例の説明がある。之わ偶々諸平の歌見を伺う一小資料たるを失うまい。

春 来

末かすみ小松が原の夕月夜千代の春までわけみてしかな

香川景樹の歌にゆけとく かきりなきよそおもしろし 小松が原のおぼろ月夜はといふ歌景色はよろしけれと 上句甚俗にて 詞つかひに風流ともきこゑねば 同じ趣にてよみ試候 猶いかかあらん高評承度候 諸平がいかに表現の技巧、殊に詞づかいを重んじたか知り得る一つの小資料である。

一、安田長穂が文覺上人を詠じて

大瀧の氷柱の中的那智こもりきく人さへに身は氷甕

と詠み、之で十分と自信たつぷりで之を諸平に見せた所、諸平再三打ち誦してきて云う、上の句大きく強く目方あり、文覺上人の題と云ひ・那智の瀧といい、誠にかくわあるべし。但上句あまりに大きく強きにより、下句まけて弱きこゆ、今少しあらまほし。試みに云はば「神も驚く祈りならまし」などやあるべきとあつたので、流石の長穂も諸平の精妙に推服したと云う。

一、歌に本歌取り云う事が重んぜられた。是わ『万葉』・『古今』其古い歌集に収載せられて居る歌の意を取り・姿を取り・ことばをとつて、新一首を作ること、漢詩にあつては懊骨脱胎と称せられて行われて来た。現代のわれわれから見れば、何を好んでそんな粹狂な眞似をしなければいけないのかとも思われる事だが、そこは万事に古例が尊重され、傳來がやかましくいわれ、格式の重んじられた時代の事である。又自ら経験しめせぬ恋の歌なども盛に製作して、こうもあろうかと事に徒なる技巧を弄して、之を當然歌人のなす一つの場合と心得て居たのである。かかる時代の中にあつてわ、本歌取りと云う事も又まじ免に考えられた。

一、諸平にあつてわ人一倍尚古思想が強い故に、本歌を重んずるの傾向が中々つよかつた。今其詠歌について適切な例証をあぐるに苦しむ。左の例わ諸平自身の説明によつて、その基く所が瞭にされてゐる。之わ必ずしも本歌取の純粹な場合でわないが、其の純粹な場合を聯想する便として掲出する。此本歌の事わ必ずしも諸平に限つた事なく一般にも行われた事で、敢えて諸平の歌の特色と云う事わできないけれども、諸平に此傾向のつよかつた事わ指摘しておきたいのである。

むかしあへる人

ほしもあへず朽ちていくらの夜をか経し曉露にぬれし袂は

本歌(万葉)

わがせこをやまとへやるとさよふけて曉露にわれ立ぬれし

野若竹

浦かせは春をそかいのさひか野もややなみよする草の色かな

本歌 赤人の長歌

雑賀野ゆそかひに見ゆる沖つしましかしかの言葉によれり

以上『歌人書簡集』

水辺螢

こなきさく田中の井戸にとぶ螢つゝむあこめの袖やまつらん

(本歌)

コレハ催馬樂に 田中の井戸にひかれる こなきつめ あこめあこめ 田中のこあこめ とあるによれり
本歌のあこめは童女なり 拙歌は夏の衣のあこめにとりなしたる也 されとあまりに事おほくて優美な
らず 残念に存候え共 よみかへ様無之残念く御一笑可被下候 (諸平)

以上瀬見善水宛書簡

一、最後に一つ私見を加えて、諸平の歌についての態度を評釈するの結語としよう。

諸平の歌の大方わ題詠であるが、中に其幾割かにあたる非題詠の歌がある。諸平の歌の佳歌を見るにわ、此非題詠の歌を見るべく、諸平の眞面目わ叙情の歌に非ずして叙景の歌にある。諸平の力量手腕わその短歌に存せずして長歌に存するを知る。題詠に非ざる諸平の歌にわ其取材着想に清新な歌を見る。又その風景についてわ、万葉以来の歌枕そんなものに一つもこだわつてゐない。見た目に感じた所わどんな処でも歌にしてゐる。諸平の歌の表現技巧が寸分の隙がなくて理知的であるが、相當に強靱であり有勁である。此点決して凡手の企及しがたきものがある。

一、諸平の歌見を知るものに『古今集序』についての註説がある。諸平より瀬見善水や室谷賀親宛の書簡によれば、之わ大分力瘤を入れた雄編らしく、藩侯にも聞こえあげ大いに気焰をあげて居るが、今其稿本は見る由もないのわ甚だ遺憾である。

一、千廣が其歌集の自己の詠についての評語中に、諸平わ石原正明の説に左坦して、或詠の風調をうべなわざる旨を記して居るが、唯一首に関するのみであるから、諸平の歌見を伺う資料としてわ簡單すぎて採用しかねる。

諸平の歌合批判

一、二首の歌を比較してその優劣を批判する方法わ短歌に限るようで、俳諧に句相撲などと称し、二句の句を比較して其優劣を判ずることなきに非る様にでもあるが、あまり目にとまらない。漢詩にわ其うした例を見ない。方面わ異なる香道にわ香合せとして、之わ二種以上について行われ、又闘茶と称して茶道についても類似の事が行われて居るが、歌合せの如くに純粹なものでわない。

一、歌合せわ普通にわ同題二首を拉し来つて、其優劣を批判判定するものであるから、その判定は厳正であり・その判定は正確であつて、何人も首肯するものでなければならぬ。故に歌合せの判定わ一定の見識ある權威者でなければならぬ。

一、諸平が室谷賀親に送つた書簡の中にわ、賀親から送つた歌合せの稿わ、或わ勿論賀親の手で歌合せの形に一題二首、又わ一物二首・又わ類似二首・又対照(松と竹と牛と馬と並ぶるが如く)二首と言つた風に纏めたものでないか。賀親が右歌合せのうち、然るべき歌を別に撰出してほしい旨の注文に対して諸平が

且 右歌合之内可然歌別に撰候様との事承知致候へ共歌合は左右之勝劣が第一故別に又撰歌致候事わ元来古例にては無之候故さし上申不候

と記して居る。

一、諸平が判者となつた歌合せわ、弘化三年丙午二月発行秋二百二十番歌合せの巻首に、「立秋」に諸平が判者となつてゐる。此集わ倭文舎眞佐木廣蔭の集成元之興上梓となつて居り、出家したものの八十七名中にわ万林光平の名も見えて居る。歌題わ立秋・萩・螢・虫・月・秋祝の五題で、判者わ諸平・中村良臣・西村直義・萩原廣道・村田嘉言の五名である。

一、右の内諸平の判した歌題わて五十二番、今其内三五拔萃して諸平の評言をきいて見る。

一番 左 勝

(松下出雲守) 隆和

涼しさをまちつる夏もくれ竹にはや吹きわかる秋の初風

右

(佐藤) 美平

たにこそ昨日は見しを秋来ぬと今朝おく露におどろかれけり

諸平判

左 秋と吹きかはる初風身にしてみてこそされど猶いは音づれそむる窓の秋風なと三句のよせあらまほし

右 風の音ならで驚きたる一ふしあれと 昨日まてたにみしを 今朝は殊更に置そひをやうに驚く心を 今少しつよくいはまほしたるならず 昨日も見てし露ながら秋立つ今朝はさらに驚くなとあらまほしくや

四 左

宮部 美臣

難波かた秋風立ちぬ神風の伊勢の濱萩いかに吹らむ

右 勝

福原 泰世

風の音に今日より秋のたつた姫山の錦をいつか織らまし

諸平判

左 あしと濱萩との諺は五條三位のすみよし歌合跋にも見えてをかしきふしなれと猶あしの事たしかにあらは
さすはもの遠かるべし

右 山のにしきのおれはかつちるといへる古歌も思ひ出てられてをかしされど錦はとをはるべくや 勝

九 左 持

石田 直愛

みそきせし昨日の夏の朝の葉の流れもあえす秋や立つらむ

右

橋瓜 正修

今朝ははや身にしむばかり鴨川の瀬の音涼し秋や来ぬらむ

諸平判

左 なかれてもあえすといふ詞よりおもへば萩川とあらまほし

右 瀬の音もあしからねとも清き瀬の音とこく強めればせの音すゞしも秋や立つらむといわん方たけ高くや
持

十四 左 勝

赤松 春雄

此ゆふべ秋立ぬらし白露のひかりほのめく庭の月草

右

十輪寺 師雲

今日よりは秋立らしも難波江のあしの上葉に風わたるなり

諸平判

左右とも難なきものから円位上人のかれ葉に汀のあし色なれば夕かげにほのめく月草に心うつしぬ

三十一 左 勝

松本 寧道

秋きぬときゝつるからにあやしきは袖にも露の結ぶなりけり

右

十輪寺 臥雲

いせの海今朝はうす霧たな引きて遠の波ぢゆ秋立つらしも

諸平判

左 『三代集』頃のなりなるべし

右 下句『萬葉集』などの同格なるへし されと三句で文字下にうちあひかたし 又二三のつゝきも古雅なら
ず 左勝

一、歌合の批判の如きわ誰が見ても一通の見當わつく事と思われるが、併し何分二つのものゝ優劣を定めると云う事わ、
相當の研究を積んだ研究者ならでわ、万人の仰いで成る程と云ふ評わ出来ない。今此秋二百六十番歌合わ弘化二年(二八四五年)の
冬諸平四十歳の時であるから、其孝問も作歌も己に成熟の域に達した時代であつて見れば、其判の意見も又一々尊敬
にするに足るものと云わなければならない。

此書諸平の判を巻頭におくわ、當時に於ける諸平の有名を裏書してゐるものと思われる。

一、歌合わせについてわ歌會の席上の座興として行われたと見えて、諸平より瀨見善水宛の手紙の中に

四日歌會 左寄島恋 幸年 此分忘れ申候 右羈中眺望 年平 日ころへて山路になれし心こそ見てゆく海に
まつ浮びけれ 幸平 さんさんになけつけれ申候 十二月十一日
などある。又例の歌合わせ、又外の歌合色々に出来候て、評にいとまなく御座候

昨日評致し候歌合之内

朝時雨

千廣

まなく散る軒のはゝそを朝戸出の袖に残してゆく時雨かな

老秋

やとりつる雲のゆくへを朝妻のかた山しくれかきくらしつゝ

樵夫

尚忠

朝夕のけふりは斧にまかせても尚たちかたき世をなけくらん

是などををしく覺候也

先日千廣の歌合

暮秋

失名

はれくもる時雨の空にきのうけふいくたひ秋のくれんとすらん

幸年

そめそめしかたみはかりを山柿の枝にのこして暮る秋哉

平

千代こめて咲くとはすれと白菊の露にも秋はやとらさりけり

一、當時歌合わ相當盛んに行われたものと見ゆる事で、歌合わ歌の批判にわまことに好都合の故である。

諸平の長歌

一、加納諸平は長歌において万葉以来の第一人者と称さるべしとわ、現在万葉研究の第一人者であり、歌學の秦斗[?]たる文學博士佐々木信綱博士が折紙をつけられてゐる所、今更兎角論議の余地なく、諸平の眞骨頂を知るもの、まことに博士の言をありがたく感ずるのである。わたくしどもここに諸平の研究の稿を起こすにあたり、大いに諸平の長歌を宣揚すべく、茲に特に諸平の長歌の一項を設け、若干の蛇足を附加しておく事となつたのである。

二、徳川末期から明治にかけてわ、まことにあはたゞしい世の中であつて、文學の普及と云う事わ素晴らしく、歌・俳諧を作つて樂しみとする風流が、平民層えぐんぐと浸潤していったが、わりにむづかしい面倒なことわ悉く高架につねてかへりみられない事になり、通俗平易が羽根をきかす事になつた故に、たとへば漢詩にあつても、七言絶句の如き作りやすい詩形が最も流行し、古詩の如く學問素養の入るものわかへり見られなくなつた。俳諧にあつても美濃派の如き大衆向きのものが、羽振りをきかして全盛を極めた。和歌の方面に在つても、長歌わ全然高架におかれて、短歌全盛の流行の傾向であつた。

一、諸平わ此下れる世をなげき、長歌をつくる人のなくなりし事を悲しむで、自ら務めて長歌を作つた事、並に門人に長歌を作る事をすゝめた事わ、諸平より室谷賀親に宛てたる書簡集等に見えて居る。以下諸平より室谷賀親に宛てたる書簡より抄出

(一)(前略) 長歌ことさらをかしく承候 當時長歌よみ候人絶々にてくちおしく存居候事いよるこばしく御座候
(下畧) 二十二日 朝

(二)(前略) 萬燈會長歌 いとをかしく覺候 此御詠を見れば 隆正とかの歌わ数にもあらず(下畧) 二月一日
(三)(前略) 別紙長歌は此ほど五十瀬命の御墓へ詣り候時の也 御覽後御かへし下被可候又外へも見せたく候 長歌
よみ少くなり申候間 をりにつけてよめるをあつめ度候也

(四)(前略) 此ほど堺人尾崎正明 虫の行列讀の長歌さしこしおかしく覺候(下畧)

一、斯様にして諸平わ尚古の志を厚くする爲に、つとめて長歌をつくる事を心掛け、門下の長歌集をも撰して上梓せんとする考のあつた事わ、『鯁玉集』撰修の経画を、室谷賀親に告げて居ることである。但し諸平がこの長歌を作るのにあつて彫骨練心した事わ、諸平の室谷賀室へ宛てた書簡の中に

尚々先年吉野川・伊勢の宮川・熊野川と三大川の水源の巴嶽といふ山へ登りし時の長歌 やうくよみとゝの
ゑ申候 其内御覧に入れ候

とあるによりてわかる。此作わ少く共、巴嶽登山後十数年後の作と推定さるる。

一、又茲に諸平より瀨見善水におくつた書簡に記した長歌で、『柿園詠草』に出て居る一首わ、殆んど半ば以上加削されて居る。之によつて諸平が苦心推敲の跡を察する事が出来ると思ふのである。今此の二つを対照すべく、ここに抄出する事にする。

山莊眺望

空かそふ大巖谷を檜の葉の眞広に占めて露しけき竹叢生て雲かゝる松垣こもり高山の峯も平にををしくも造れる殿かはしけやし此なり所のほりたちふりさけ見れば横ほれるそこの山は此園生の籬なしたり棹鹿の根来の寺は垣もとに薨かくさひ海をなす長穂堤は里の子が普く行きかひ木の川の清き河原は並立てる松原越しに引のほる舟の帆白し初雁のなきてわたらふ五百代の穂田のをちには家むらの烟きらひて這ふ葛のうたゝねしもよ今日の比のいく日のたり日うちなひく竹むらなしてとこしえにくれ春をあれまつ垣の青垣なして千代も見るかね五百代の千代の穂の上霧こめて秋の日はやく傾にけり

以上わ諸平が九月八日附善水への手紙の中に認めて送つた所であるが、『柿園詠草』にわ左の如く直つて出て居るのである。

清酒舎君 安藤君の山齊神秀峯に遊び給へる時よみて奉りける歌並にみしか歌

岩がねのはしきたちはやわけ登る山路のそひにいくみ草よたけ植おほし朝の雨夕の露むす苔むしろにたゝみ青垣を四方にめぐらし高山の峯も平にならの葉の眞平にしめてまぐわしきたちにもあるかもやなりさけて国かたみれば横ほれる外面の山は秋山と紅葉かさせり棹鹿の根来の寺は薄霧に薨隠さひ八束穂のなが穂の田居は堤なく風にあらばえ引のぼる木の川舟は松原の緑に隔て初雁のわたらふ空は雄の山の雲につらねて歌思ふ心たぬしも今日の比のいく日たり日うちなひくたかむらなしてとこしゑにくれすてをあれ青垣の玉まつなして千代もみるがね

五百代や十代の穂上霧こめて秋の月はやく傾きにけり

以て其推敲のあと如何にふかきか知るべきである。

一、諸平の長歌わ大抵『柿園詠草』、及び『拾遺』に収められてゐるようであるが、さきにあげた室谷賀親書簡中にある竈山神社の詠などわ見當らず、又左の一首の如きも掲げられてない。之は門人瀬見善水に書きおくれた書簡中にあるものである。かような次第で諸平の長歌で尚散逸したものも相當ある筈である。但し量の多きわ要せず、其すぐれたる作品ののこされてゐる事がうれしい。

寢覺鹿声 殿村茂樹が歌會兼題

をがやはら風を時しみふせ鹿にねざめて見れば秋の夜の暁月や大空にいてりみたらひ萩の花散りてながるる走り出の谷川へだておほとしき外山の峽にはし妻や今別るらし棹鹿の詫び鳴きすれば射目たてん心もしらにうらぶれをらん

一、諸平の長歌は萬葉以来の第一人者あると云う。之わ諸平の深き思想と・孝問と・其の一字一句も苟もせざる手堅い技巧が物を云つて、歌調が引きしまつてたるみがなく、其用語章節が古學歌學の聡明なる照射をうけて輝いて居る爲めである。諸平と雖も努力の結果ここに到つたもので、彼が藤垣内によつての學問時代の作と覺しき一首、大平撰る処の『八十浦の玉集』などに出てゐるものなどわ、未だ以て完璧と稱しがたく、其品後年の作に批して一段の遜色あるを、免れない処と思われるのである。

一、試に之を引用して、読者の批判に委ねる事としたい。

詠 紀伊国長歌

菅原 諸平

御とらしの眞弓のゆづらつらつらにしぬびまつれば大やまと国内ことごと八十木種まきほとこらしから山を青すが山とさかえしめいそしみましし五十猛の神の命はうべしこそいさをの神と雲井こそ遠つ神代ゆ語りつぎ云ひつがひけれ此神の鎮まりませば木の国と名にたゞへとる此国はゆたけき国此国の此みしづめとたふときや殿の命の高しかすわか山の御城この御城のたけたけまもりと武士のますら武男ら千萬のますらたけをら朝さらすきよりさもらひ夕さらすつとひさもらひうら安の御城にしあればたぐひなき国にしあればかきかぞふ七の郡にみちたれる大御たからの御民らもいけるしありと八重山のあら草木の根ふみならしいやふみならしなこなすしたひまつろひ天の原あふぎたふとみ五十猛の神のまかせる八十木種生みたてること民草ののいやさかえゆくうまし国ゆたけき国をほきせさらめやしぬばざらめや

一、『八十浦の玉集』わすべて六巻、本居大平の編する所で、上の二巻わ加茂眞淵以下一般著名人の長短歌、中の二巻わ鈴屋門人の作、下の二巻が藤垣内門人の作。上梓が天保七年六月(一八二四年)であり、その以前に撰集ありたるものである。此諸平の歌わ下の後巻に出て居る。甚だ僭越な言葉であるが、歌の構成にむだ見え、技巧に中たるみが見えて、全体がはりきつて居ないと思われるのである。

二、諸平わ長歌凡五十首、何れも間然する所なき完作のみと思わるるが、中にも其古学思想の十分な浸透してゐる歌、勤皇精神の含蓄深き歌に、其歌調の強靱さ・其歌詞の崇高さが、横溢する事が感じられるまでである。元来長編わ詩に在っても・歌にあつても、相當孝問の根柢がなくてわ、其出来た作品が何としても、羸弱たるを免れないものである。詩歌わ別才なりと云わるるも決して左にあらざ、孝問の根柢の上に築かれた思想によつて支配され、綴られた詞章でなければ、その作品に輝きがなく・艶がなく、余韻が生まれて来ないものである。

一、故に数ある諸平の長歌のうち、私共が第一にあげたいのわ

『詠眞孀山歌』「木の川にみそぎすといふを」・「小浦広名が熊野へゆく馬のはなむけに」・『詠史』「大社の上宮島重老に送りし五首」・『登山巴嶽時作歌』「菊池保定が家にうえたる吉野之櫻の歌」・『楠贈三位のおくつきに詣でて』・『十二月ばかり魯西亜の船伊豆の海に沈みける時の作歌』の如きわ何れも秀逸の作。又地方色の実によく現れてゐる『橘薫風』・『鮎瀧』の歌の如きも傑作である。唯諸平の理智・聡明が、叙情の歌に秀逸を見る能わざる事、長歌にありても短歌の場合と同様であると思われる。随つて恋の歌又わ人の死を悼む歌のごとくに至つてわ、感情の流れが理智的技巧に抑制されて、甚だ物足りなさ即ち弱さを感じる。夫わ二物を與へざるかと思う。

一、諸平の長歌についてわ、短歌の或作に見るが如きぎこちさがなく、又『古今集』調のぬめりともいうべき低調がなく、流石に至れりつくせりの詞章に却つて平易さを見せ、其間に理智の光が宿つて聡明間然する所なく、金篇ピンと張りきつて風潮高邁であり、朗々誦するに足るのである。因に記す諸平わ、此等の長歌の外に、施頭歌若干首・今様貳首(内一首は瀬見善水宛書簡中に見ゆ)つらね、歌一聯等の作があり又萬歳詞の戯作があるも、しばらく解説を省く事とする。

評釈『柿園詠草』粗抄

一、諸平わ一生涯を通じて、一千五百首以上の短歌・五十首以上の長歌の外に、若干の施頭歌及今様並びに萬歳までをつくり、外に一連のつらね歌までを作つて居る。五十二年を一期とする生涯を通じて決して寡作の方でわなない。此内長歌わ、万葉以来の第一人者と定評あるとの故に、別に項を設けて之を記述したが、其他も各項それぞれに十分煩に亘る程度に歌を引いて記述した。故に今更改めて諸平の歌を論ずる事わ、重複煩鎖を読者に感ぜしむるかも知れないが、茲に諸平の歌十数首を抄出して、之に評釈を加えて見度いと思ふのである。

一、良知良能と云う。自ら爲し得るに非れば知れりと云へないと云う。唯自己の好みによつて他の詩歌を採否する事わ一つの冒流である。故に評釈は嚴正公平でなければならぬ。自己の嗜好趣味を用てわならない。ここに評釈^{？評釈}のむづかしさがある。私が自ら敢てはからず諸平の如き大歌人の歌を評釈するなどと云う事わ、まことに大胆な話であるが、諸平の歌わむづかしくて稍もすると正解から遠ざかり易く、諸平の歌の妙所にふるる事が出来ない。敢て自ら憚らず五・七の歌を抄出して諸平の用心の処をさぐり、其本領を明かにしておきたい心から、この項を執筆したのである。

一、その前に歌の歌暦を申し上げておきたい。之わ世に名わきこゑずとも、私も歌人の一人であると云う事を申しおきたいからである。私わ十七・八の少青年時代落合直文の弟子の金子薫園について三・五年の間歌を學び、爾来一生間歌をすてない人間である。『伊勢物語』の歌・源左大臣の歌・西行法師の歌をよむべしと教へられたものであった。故に現代萬葉調全盛時代に、万葉調になり切れないので苦しんで居る男である。

一、諸平の歌わそうした私共にわ実によくわかるのであり、諸平の歌風わ私共にわ全く好きな歌ひぶりであるのである。それに尚古勤皇的であり・郷土的であり、取材を紀州に採る事多き故に、諸平わまことに忠実なるわれ／＼の先人なりとの、親みを感じて居るのである。

一、諸平の歌に就いて私わ己に十年昔に別著において、詠『眞婦山の歌』のほか短歌十数首を評釈しておいた(拙著『紀伊郷土文献拾遺』参照)。又全日本文學報國會選定の『遭太平御代一首』わ、當初私が朝日新聞社の希望により、私が紀藩勤皇家と云う断片を、大阪朝日新聞和歌山版に掲載した時に抄出しておいた一首であつたのである。

一、今『諸平の研究』をまとめて書いて見るにあたり、世の人達に諸平を眞面^{まへ}に見て頂いて、其批判をやる事にして頂きたく「群盲象を摩する」が如く、囁り散らしてもらいたくなく、茲に一片の蛇足を添えて見る心になつたのである。

嶋の崎あだ波ふるる巖すら君御楯とつかえまつれり

評釈

「楯が御崎は増基法師が楯をつきたらむがごとしと云へるにたがはずいと神々しき巖なり」

との詞書きのついた一首で、今わ三重縣南牟婁郡に存する、昔紀伊国奥熊野に属する楯が崎で歌であり、『柿園詠草』の二に出てゐるのである。歌詞わ平明で殆ど解説を要しない。今増基法師の『奄主紀行』について見ると、左の如くに記されてゐる。

楯が崎 楯が崎と云ふ所あり 神の戦したる所とて楯を突いたるやうなる巖どもあり

歌

打つ浪に満ち来る汐のたたかふにたてが崎と云ふぞありける

諸平が勤皇歌人たる事を知るにわ、大日本文學報國會があげた一首

君がため花とちりにしますらに見せばやなと思ふ御代の春かな

などよりも、此歌の方が平易で、俚耳に入り易いであらうと思われるのである。

那木の葉をかざしてかへる人もかな世々の御幸のあとかたりせん

評釈

次の一首と共に諸平の勤皇思想の片鱗を伺ふべき一首。那木の葉と熊野神事との関係を胸にたたんで考ゆべきである。那木の葉以外の草木であつてわ意味をなさぬ。齋明天皇わ牟婁の湯に御幸あり、花山法王わ熊野那智に参籠あり、爾来幾世をかけて熊野御幸の事歴史に著しい。この歴史を語り共に皇室のありがたき昔の御代のゆたかさをしのぶ。共に語り・共にしのぶ人わぬないかと云う、皇室欣募の民草の至情を叙したる歌であつて、歌詞わ平明何人にもわかる余情に富んだ歌である。

むろの江をつらねてわたるかりがねにたえし御幸のかげをしぞ思ふ

評釈

雁わ棹なして連れてわたると云う。かりかりとなき乍らわたる、雲井はるかにわたるのわ、たしかに詩歌になるであらう。今わめつたに見られないが、諸平の頃にわまだ月夜に雲井をかけてわたる雁の列が見えた事であろう。雲居をわたると此方から聯想し、その列を見て、主上の熊野御幸の御姿を聯想し奉つたのであり、今わ杜だえて仰ぐ事の叶わぬ御幸のかげを思うと云うのである。用語に無理がなく・手法に技巧のあとなく・なめらかにして、自然に出て来た一首であらう。

湊川底の埋木得てしがなつかふる道の葉にはせん

忠臣

評釋

嗚呼中心大楠公の一代の行藏わ、まさに臣民の範とすべきものである。即ち仕なる道の葉にわせん、湊川の

底ひに若し埋れた木があるならば、之の一片を得て葉をつくりたいと云う意を、道の枝折即ちしるべにする事にかけて云ったのであり、大楠公の盡忠の志の世に埋もれてゐる事をなげき、その効績を顯揚して大いに世に彰し、臣子の龜鑑たらしめ度いというのであり、百世至論である。

行きかえり見れどかなしき花の上に霞む春日も傾きにけり 芳野 懷古

評釈

南朝三代の衰史をとどむる吉野の櫻を眺めて、ありし御代を偲び涙せきあえざる憂国の歌人、諸平の心をさへざるものわ、五百年の昔であつたであらう。歌わ平凡、諸平の歌としてわ技巧の見えぬ、それだけに弱い歌である。併しその弱々しいあとに無限の余情が、南朝思慕の情けが犇々とせまるものがある。

敷島のやまとの人は神代より神のはじめし古の跡ふまましをこもりつの夷さびして横さらふ蟹のあとをし人の踏めらく 書

評釈

珍しく短い、諸平の長歌としてわ凡作中の凡作であらう。けれどもそれだけにわかり易い文字通りの歌だ。こもりつわ夷^{えみし}にかゝる冠詞、夷さびわ夷狭らしくなつての意。夷人らしくなつて横文字など尊んで、蟹の如くに横に書くと云うのである。平凡な歌たる事云うまでないが、其前半に諸平の尚古思想を見るのである。『拾遺』に収められて居る

五百代のわせ穂波よる徳勒津を月に見つつや神代しのばん

評釈

八月十四日 和夫・正紹と共に中之島の里輪をそぞろありきした時の歌である。徳勒津（ところつ）『日本書紀』に記されてゐる。ところつ^{（徳勒津）}の宮わ、今和歌山市秋月辺にあつたことと思われる。仲哀天皇わこの宮から熊襲征伐に赴かれて居る。五百代わ古語、この辺一帯水田となつて居る。その水田をたゝむ稲の穂波の月かげをながめて神代をしのぶと云うのである。之も亦諸平の古孝思想の歌の一つと云う可きである。

有馬の海浪のゆふ花をりかけて神をまつらぬ時も日もなし

評釈

有馬わ今三重縣北牟婁郡有馬村で當時紀州奥熊野、ここに花の窟があり、大きな巖が海に面して、大壁の如く立ち海も程近い。神代の折い^{（伊勢中津）}ぎなみの尊を葬りし処と伝えられ、注連を張り・年々花を捧げて祭る花祭がある。諸平にわこの花の窟の歌が六首もある。此歌わ花の窟の花祭の事を思ひうかべ、程近き熊野灘の波が、いつもいつも花の窟にむけて打ち上げてゐるのを見て、毎日毎夜常時に波の花を奉つて、此神を祭つてゐると、こう歌つたのである。浪のゆふ花わ、白ゆふ・浜ゆふのゆふと同じく綿の意だが、白ゆふ花浪にかけての常用である

玉津島きよき渚にまどゐして神代のまゝの月を見てまし

評釈

年々の仲秋明月に月見して若浦にてよめる歌の一首。まことにありのままの歌であるが、処が和歌の浦であり、目標が月である。作りようのない場合である。無技巧ありのまゝの歌である。唯神代のまゝの月と、神代の二字をおいた所に、諸平の尚古思想が働いてをり、主観が動いてゐるのであるが、何人にも受入らるる主観である。

はつ雪の朝宮つかへいちしろき跡こそ神の道にはありけり

社頭 雪

評釈

題詠の歌で、現代のわれわれの歌とわ全く世介(世界)であり、何処に歌としての感事を見出してゆく可きか、殆んど困惑するのであるけれども、その趣旨いかにも此歌の通りである。此わ一つの道歌で、觀念の表現として受取る外はない。併しここに諸平の尚古思想を見出す可きであるのである。

天草や空より遠の唐山も雲になびきて日は暮れにけり

海上眺望

評釈

題詠であるけれども、題詠もここまでこなせばもう題詠の眞味わない。元より遠とおいた所わ、いさゝか説明に陥つて居るが、雲か・山か、呉か・越かの頼山陽の詩境に同じい相當雄大さが、歌の上にも見うと思われる技巧を感じない所がよい。

雲かゝるわだみの中にあらしほを雨とうかべて鯨うかべり

評釈

正岡子規わ此歌を批難して技巧にすぐと云つたが、私を以てすれば子規の批難は悉くあたらぬ。此歌位迫眞力のこもつた歌があるだろうか。夏日太地岬方面(和歌山縣西牟婁郡太地町・捕鯨の本場)の何処にでも立つて、あの熊野灘の眞景に接するがよい。だまってゐてこの歌のよさが了解出来よう。川田順氏の如き又実地を知らずして、徒に子規の名に迎合するなど、其輕薄笑ふ可きである。

ひし投げて鯨つくゆみ逸鳥の翅の上にたれか立つらむ

評釈

逸鳥の翅 逸鳥捕鯨船の名であり、逸鳥と云う故に、翅と云つたのである。船のみよしに立つ一番鎗をつける男を見立てての詠である。ひしわ魚をつく鎗である。此歌の妙味わ昔風の鯨取を知るものにわ、すぐになぜかれる歌であるが、鯨取の眞景を知らない者にあつてわ、此歌の妙趣わわかりえないであらう。

水無月の日のまさかりに咲きにけり眞砂が上の浜木綿の花

評釈

浜木綿わ紀州の海をはじめ暖国の浜辺の名物、元来わ熱帶植物である。その種子が波にのつて来り、日本の南岸に生ひ茂つた。それを古への都人が熊野まいりの序に見て珍しく旅情をなぐさめた。そこで紀州の浜木

綿が有名になったのである。浜木綿わ月に見るのが美しく、同じくわ千株もつゞて生え並んで、波が磯に同じ色を見せてゐる所などよいと思ふが、此の草木位ひでりに勁い花わないと云う。熱帯植物の故であろう。此一首理詰めに出て居り、歌の手法も上乘ならずである。併し浜木綿の歌としてわ、まことに此通りの事である。別段余剰も無い歌と思うが、捨てがたい寫実の強味である。

やまゆりの露はなか／＼照りそひて傾く月に螢とぶなり

評釈

新古今調と云う所。山百合と螢と露を取合せた処、いかにも綺麗であり、その上に月をあしらつて傾く月とある。何処かごく／＼して居るようであるがさて実景である。ここにも寫生の妙が物を云つて居る。俳句に於て寫生を信条として、蕪村の句に傾倒した正岡子規が、何う云う風の吹きまわしで、まことに寫眞味の甚だつよい諸平の歌を、一つでも批難する氣になつたか、子規の霸氣がそうしたのであるかとも思われるが、子規に諸平を研究する事浅かりし譏りは免れないであらう。

山がつが煙吹きけん跡ならし椿の葉卷霜に氷れり

評釈

諸平の歌にわ、こうした先人未到の処を開拓した歌がかなりある。取材が清新なわけである。椿の葉をとつて、これに刻煙草をつめて煙管代りにして吸う、実にうまいと云う。伊豆や熊野の暖い海辺にわ、椿の葉の大きい柔いのが沢山あつて好都合だとある。今日でも此辺の老人で頬被りをして、椿の葉卷を横ぐわえにしたのに出てわす事が珍しくない。之を歌にしたのわ諸平がはじめてであらう。

靜川の奥にありてう釣橋は唯玉の緒をかくるなりけり

評釈

今の針金橋もわれわれ山なれぬものにわ渡りきれない、人に背負つて貰つてわたる場合が多い。私共わ大きな竹の棒を手すりから手すりにかけ、その中につかまつて押して辛うじて渡る。昔わ針金などない。谷が深くて支柱がたため故に両側に藤を植え、その大なるを他の藤蔓の補助にして編み渡して、その上に丸太と細い板を綴り合わせたものであつたと思われる。人がわたれば上下左右にうごく、先づ都人わわたる事叶わぬ、唯命がけのつなわたりで壽命がちぢむばかりである。之もこの釣橋を歌にしたのわ、諸平が嚆矢と思うので抜いたのである。

ただきに杣板のせてくだる子のうしろ手さむし那智の山かぜ

評釈

今でも木本辺(三重縣北牟婁郡)に行くと、頭の上に物をのせてゆく人が多い。この風俗わ伊豆でも、其他でも見る処、紀州に限らぬ。頭の上に綿を包んだ丸とよぶ丸布をいたゞき、其上に十貫や十五・六貫の木材な

どををのせて運ぶのは平気である。此れも熊野風俗の一つ。

あうらつく新藁沓の荒作りいかかはふまん岩のかけ道

評釈

角結びの鼻緒をつけた厚い藁草履わ、足のうらにささり相であり、豆をつくるに妙である。それをはいて岩ひだのとげくした山路を行くときに、山なれぬ都人わ大抵怖毛をふるふであろう。藁草履を歌にしたところも又諸平のするどい観察である。あうら 足の裏の事。あらづくり 少しこけおどしの用字に見ゆるが、荒作りと云う文字適正であろう。

山がつが餅飯にせむと木の実つきひたす小川をまたやわたらん

評釈

樫の実・椎の実などを採りて澁をぬきて、ゆで、搗きたてて団子にして食べる。その木の実の澁をぬく爲に、之を谷川の流に浸してゐる。それを珍らしんで歌にした所に郷土色が出て居る。「搗き」だけは余計な云ひすぎである。

水かれし田の面を見れば里の子が井筒にくみて晩稻干すなり

評釈

稲架^{ほだ}を井桁の如く四角に立てまわして、稲を架けて干すのを珍らしく思うてよんだと云う。遠州辺にてわ仕ないと云う。稲架の事わ処によりて仕ない処もある。別段珍しい事とも思わぬが、之を歌とした所わ、當時としてわ目新しい事であつたろう。

よみがえる魂こそしらめおうばこの露の言葉も世々にとめては 草

評釈

車前草^(おぼこ)の葉を氣絶した蛙の鼻面にさしおくと、程なくその蛙がよみがえる。私共子供の時の遊びに、蛙をなぐつて氣絶せしめ、車前草の葉をもんで蛙の口に入れておくと、程なく氣絶した蛙が蘇生する。死んだ蛙が蘇生する事が面白くて樂んだものである。諸平にも此うした思出があつたのであろう。そこを歌にしたのである。

世もつらしひともうらめし大方わ世にも人にもあはてやみなむ

評釈

「世をもうし人もうらめし」と云う古歌の言葉を転用してゐる。而も恋の歌である。昔の人がさまぐの題をおいて、恋の歌をまじめくさつてよんでゐる事が、現代のわれぐにわ殆んど了解に苦しむ処で、こうもあろうかと想像して歌を製造する。之でわ歌わ全くの遊戲である。自ら経験するに非ずして歌を作る、ロクな歌のできる筈わなく、又如何に眞に近くとも意義わない。さしも諸平にも恋の歌にわ、一首も之わと思ふものわ見出せない。此歌一首をひいたのわ、其手法を一寸批評して見たからである。此世もつらし人

も、うらめしの筆法が、何度か諸平の歌に出て来る悪い技巧だと思わるのである。例えば那智の瀧の歌「富士も見き 近江の湖もわたりきて 今もと思ひし瀧にやはあらぬ」、又被書知古「かりそめにふみ見る可くも思ほえず 鳴門の若布 撫養の浜栗」上己「年月を疾しと 遅しと 何か云わん 今日こそ桃のさかりなりけり」等に見る技法で、わざとらしくて面白くない。

杖さしし江川の丹生の柳かげ水葉もわか
に春風ぞふく 水辺柳 「丹生告門」による

評釈
別項にも引用したが、諸平の歌にこの種の古語を転用した場合が中々ある。「丹生告門」によると、こう断つてある場合、明らかに断つてない場合でも中々に其例が多い。かような古語をそのまゝ転用して何になる。そんな下らない事をしなくてもよいでわいか。随分まわりくどい話でわいかと、われわれ現代人わ思う。何故昔々男もチョン髷を結うたのか、結わなければならなかったのか、わからないのと同じである。

「丹生告門」 丹生神事と数ヶ所に出てゐるから、之を解いておくことにしたく、この歌を引いた。和歌山縣伊都郡天野村に、今官幣大社丹生津姫神社がある。此神社わ古い式内大社で、ここに壱千年以上も前の祝詞の文がのこつてゐる。之が「丹生告門」で（にゅうのり）とよむ。此祝詞の中に「くだりまして江川の丹生に忌杖さし給ひ」と云う言葉があり、即ち丹生津姫の命が、江川の丹生に天下りました事実を語つて居る。此句を転用して「杖さし」・「江川の丹生」と云つたのである。歌としてわ一寸解しがたい事となる。此江川の丹生にわ沢山綺麗な谿谷がある。その辺に柳も生ひて居ようと云うものであり、实景に副うた詠でわあるのだ（拙著『丹生津大神』参照）

掛川の里はの眞葛くりかへし問へど語れど
うらぶれにけり

評釈
嘉永二年九月弟のとひ来て、掛川の会的事どもこまやかに語りければと詞書がある。諸平にわ所謂叙情の歌のすぐれたるを見ない。當然ある可き筈と思われる。生まれ故郷への思慕・生みの母親への思慕と云うものが殆んどない。歌の上にわ表れてない。わが愛児の死にあつた時の歌でさへ、理屈めいて少しも迫力がな
い。師の大平の師について痛んだ歌も切実でない。そうした家庭的な叙情歌が一つもなく、偶然幾年振りか
で尋ねて来た弟と語り明かした時の歌にしても斯くの如き歌で、読者をして涙をさそわしむるものがない
であつた。

年波の早瀬も淀む心地して秋の水穂を待ちわふるかな

評釈
諸平わ性多病であつた。父も酒好き・己も酒好きで終始溜酒に悩まされ、門人瀬見善水に頼んで麥をしぼし

ば送ってもらって、麥飯を食べて溜酒の治療をした。之わ善水に送った書簡中に、麥のおくられてくるのを待ちわびて居る歌である。技巧を弄する処なくして、切実なひびがこもって居ると思われる。

つれづれを誰なぐさめん雨つゆに菊の色香もうつろひにけり

大方はとはずなりにし吾門を守る犬の声ぞかなしき

評釈

諸平(一八四五年)わ弘化四年十二月發狂して、靜まった翌年七月雜賀町近くの丘から、久保町の河岸に移って隱居し、靜養して居ていたわび住みの頃に、瀨見善水に送った一首と外一首である。哀切なる情味が言外に溢れて居ると信ぜらるる。

諸平の『蒙求』の歌

一、諸平に『蒙求』の歌二百五十八首があり、『柿園詠草拾遺』の巻末に収載せられて居る。此蒙求の歌についてわ、『柿園詠草拾遺』の編者飯田年平・瀨見善水、其巻頭の端書に左の如くに記して居る。

末にあけたる蒙求の歌二百五十八首あり (一八五二四年) これはいつはかりよりよみてられけむ 題の半に至らずして歿られたる事と見えたり さて大かたはかの癸丑甲寅の巻の中に書きそえたるが いかなる故にか はしめのかた五十二首かけたらしを 善水からくしてもとめいでて補へり

一、斯様な史上の人物の或行状を記した、その書的文章を題として詠じた歌わ、結局詠史の部類に属すると云う可きであらう。詠史の歌わ古来あまり秀歌の例をきかない。之わ史実を主題とする題詠であり、題そのものが己に複雑多端の史実である爲めに、之を歌にする場合わ、勢ひ観念的となり・説明となり、そこに自由なる感覺・感情の躍動を見得する事が甚だ覺束なく、随つて秀歌の生れる事が少いものと思われる。殊に短歌に於てわ尚更その度が深いものと云わなければならない。

一、諸平の二百五十八首を数ゆる蒙求の歌も右の例に洩れず、諸平の歌して他の詠に比し、之なくとも格別其淋しさを感ぜない。それ程平凡な歌が多いと思われるが、併し国孝者であり・歌人である諸平が、此蒙求についての歌をよんで居ると云う事が、頗る珍しい事である故に、茲に此の詠について若干の言葉を費して見度い。

一、『蒙求』わ漢籍してわ、別段深味のある書物でわない。併し童蒙の間に広く読まれたる書物である事わ、我国でも

数多くの孝者によつて註釈せられてゐる事によつても察せられる。歴史上の人物の行状を記事して、其故事来歴を知るに頗る便利であり、文章平易で入門の歴史書として、頗る手頃の書と云ひ得る。之を我國の書物に比すれば大槻盤溪の『近古史談』の如き、稍其体裁に似たものを感じる。もとより『近古史談』の方が撰述としてわ精確であり深みもあるが、支那上代の史実を知り・人物を知る上に於てわ、『蒙求』わまことに恰好の書と云う可く、この書を諸平が読んで居ると云う事わ、別段諸平の孝問を誇示するに足る事でも何でもない。けれども前陳の如くに、国孝者であり歌人である諸平が、此支那の人物行藏につき、二百五十余首の歌を詠んで居ると云う事が、己に珍しい事であり、諸平の詠歌の程度をさぐる、一つの拠点を示す材料とすべき事なりと思われるのである。此点についてわ別項で若干意見を陳べて見る考であるが、一言にして掩えば、諸平の詠わすべて學問史実が、その歌の裏打ちをして居ると云ふ事実を表明して居る。その事の証左として、此の『蒙求』の歌を擧ぐ可きであると信ずるのである。

一、『蒙求』わ唐の玄宗皇帝の天寶五年八月、前信州司馬倉參軍李瀚(安平之人)の著す所で、書中約五百九十五人の事蹟を編輯したる書であり、其記事頗る要領を得て居る。當時司封員外郎季華の序文によれば

安平季瀚著蒙求一篇列古人言行美惡參之聲律以投幼童隨而積之比其終始則經史百家之要十得其四五矣推而引之源而流之易於諷誦形於章句不出卷知天下家求哉周易有童蒙求我之義李公子以其文碎不散輕傳達識者所務訓蒙而已故以蒙求爲名題其首亦每行注兩句人名外傳中有別事可記者亦此附叙之雖不配上文所思広博從切韻東安起每韻四字凡五百九十六句云爾

とあつて、此書の大畧を叙して余す所がない。

一、諸平の『蒙求』の歌わ二百五十八首である。故に其歌わ「蒙求の記事」の半にみたないわけであるが、諸平の聰明なる批判が隨所に詠出されて、所謂詠史の歌としてわ、小氣味よきまでにテキハキと、其人・其事の全貌が描き出されていて、余蘊がないのである。則ちこの二百五十八首わ、諸平の詠の全体の上から云へば、さして出色の詠なりと云うに及ばぬ部分なりとすべけんも、他の多くの歌人の詠史に比すれば、そこに格段の差異を発見する次第であつて、本来詠史の歌わ如何にしても、実に流れて華美を忘れ記事に落ちて、詠嘆の情に遠ざかりやすいものである。そこを巧に技巧して忠実に叛かずして、而も歌としての情味をもたしむる所に、歌の巧拙が存する所と云う可く、巨匠諸平の手腕が巧にこの難關を克服して、余裕綽々たるものあるを思わしむるのである。今試にその二・三を引用すれば

孔明臥龍

影かくす月のをち水おちかへり汲めばくまれて世をぞてらしし

漢祖龍顏

夢のあひはまさしきものかいかつちの音せし雲に龍ののぼれる

孫楚漱石

たまやなにかけたがへたることばすらみがく巖のある世なりけり

猛軻養素

ひこばえも花こそさかめもとあらの萩のふる根に水そそがまし

泊牙絶絃

わたり川まさりて人のかへりこば緒たえの琴をつぎ橋にせん

李廣成蹊

咲きぬとはいはねど花をとふ人のあとよりしげくあとをこそとへ

註 大槻磐溪 仙台藩儒者 『大言海』著者大槻文彦博士は其後なるべし 数々の著書あり

『山菅』と『悵翠琴房記』

一、諸平の純文学作品としての文章わ、残存頗る乏しく、僅かに別項『櫟亭之記』と、紀行歌文の『山菅』と『悵翠琴房記』等が残って居るばかりで、文章家としての諸平を語る上に不便を感じる。尤も此他にも、純文孝的作品文章かと想像される、『摘草』・『紀伊之国日記』等の名が見ゆるが、刊本となって居らない故に、之を見る事が出来ない。『櫟亭記』わ別項に解説を試みたから、ここでわ『山菅』と『悵翠琴房記』の二編について、畧解を試むる事とする。

一、『山菅』わ諸平廿五歳の時の根来寺花見の紀行文であつて、初々しい若い気分のもられて居る筈の作品である。此作品わ諸平としてわ相當得意の作品だったと見えて、はじめに友人伊達千広の序文をそえ、後に原田霞裳の跋文（漢文）を添えてある。本文わ半紙六七枚の分量である。伊達千廣は序文に於て

又

吾友諸平が根来寺の花見の記を『山菅』とかしも名づけてもてるをみるに　そのつねにうれたみえる　眞心は
みやびたる花の下の碎のまぎれにもまぎれず　詞のはしに打ち出たるよと思わるるに　云々

千廣常にしか思ひをりしに　はやく諸平も同じ思ひにうれたみたる志は　かの（一五八五年）天正の軍ならねど　押立てたる
旗すすき穂にあらはれたる詞はいとも雄々しく　吾友垣結べるかひはありけりと　深くもこれをめづるになむ
と称揚して居り、又原田霞裳わ

嗚呼君游斯山而有此文則君之筆豈又不靈半哉

と称揚して居る。此原田霞裳わ日高郡古井村の出身で醫を業とし、菊池海莊のすすめによりて有田郡湯浅町に住し
た人で、其伝わ『霞裳遺稿』によりて、極めてうるほいのある佳品に富めりと云われて居る人で、詩書豊かなる人
であつた（拙著『紀藩詩史』参照）

一、左に本文の一節を引用しておく事にする。

前略

目路のかきり菜の花の莚敷きわたしたるは心ある人のすさびにや宝の国とこそ思はるれ

立ちめぐる青垣山をかぎりにて黄金をしける御代の春かな　此花よ一本二本道のへに立てるは何となくさうざ
うしげなるを　かう小島にあまるばかりに咲きみちたるは　香りさへいとなつかしく　はてくはおほとなぶ
らにしぼりいでて　やむごとなき窓さへ照らすらんことあはれなり

麥の浪もたかからねど　色はえておかしく行きかよう　賤の女のあやしき姿なるも　花に埋るばかりにて　牛
ひくをのこの声ほのかにきこえたり　ほどもなく田井の瀬の河原にいづるにいとさむし　よそめには舟まねく
と思ふらん　川原のあるじ袖かへすなり　筏のいとく流れくだりたるを見て

筏士よいでさかさまにさしのぼる　よしののさくらのかかりて見てこむと戯るをききて　島の松原の楼にかはり筏
士のさかしまにさしのぼせば　根来の山には思ひたたじとなめり　かの花いかにうらみましとかたへより笑ふ
もおかし　（下畧）

以て其全貌を察すべく、中々よきよみ者である。

一、『悵翠琴房記』わ僧幽眞が「古岳庵」の楣間に掲ぐ可く記したもので、諸平一家を成して後の執筆なる可く想像さ
るるものである。幽眞わ眞言宗の僧で、紀の川のほとり藤崎の幽雅な風光が氣に入つて、ここに「古岳庵」を営み、

自らわ普く行脚の旅を重ねて、諸方の文人墨客を訪うて詩歌をもとめ、又七絃琴の小さきものを得て、之が奏法にくわしく、到る所之を友として一生を風雅の裡におくった人で和歌をよくした。和歌わきわめてやさしい弱々しい風調であるが、そこに又自ら別なる幽情が漂うて居る。歌集を『室谷伝声集』と云う。

一、左に『惺翠琴房記』の全文を掲げる。

『惺翠琴房記』

加納 諸平

不二崎いと景色ある所なり月雪花は更にもいはず 古巢を出づる鶯をちかへる時鳥の声さへ乏しからず まして巖のたたづまひ松風の響など世に似るものあらずかし 塵の外なる「古岳大徳」も此岸はなほ捨てがたしとして 松の葉ごもりにささやかなる庵を結びて 七弦の琴を友として下行く水にかきならし やがて『惺翠琴房』と名づけ給へるはいと心あるすさびなりかし いでやえきたるものの音ははやくの世より誠めあれど 此一くさしも漏れたるはかゝる みやび法師のあればなるべし 今は五とせばかりの遠方にやありけん 川上より下るとてかの巖蔭にさおさしよせかゝるあたりにあらまおしき庵をむすびて住まましければ 世に思ふ事なからましと思ひしを 我に先たち給へるぞ すこしにくきや

一、藤崎わ粉河と名手との間にある一部落で、那賀郡王子村に属する。その紀の川に臨て當みし古岳庵わ古松数十株生ひ茂る巖つゞきの処で、四時の眺望甚だ佳なる所であつた。今は河川改修等の犠牲となり、當時の風光全く失はれたとか云う事である。諸平の此文巧まずして意を盡して居る。辞得意達してやむべしとわ此謂であらう。古岳の事についてわ、別項で一言費す考へなる故に、くわしき事わ茲に畧する。

櫟亭之記

一、諸平わ呑氣坊主であつたと云つてわ當らぬかも知れないが、一面に天才肌で目から鼻へぬけると俗に云われて居る程の聡明さがあり、又極めて潔癖に近いかと思われる程の周到さと神經の細い所があるが、一面ズボラと云おうか無頓着と云おうか、一向物に拘泥しない無頓着さがあつた。此無頓着さの故に、自分が心血をそゝいだであらうと察せらるる考証の稿本を左右なく散逸させたり、又或時わ弟子から送られた歌稿を紛失したりしたこともあつた。そんな調子で其唯一の詠歌の集である『柿園詠草』でも、之わ弟子達が其散逸を惜しんで集めて出来たと云つても

よいものであり、諸平自身わ自分の詠歌をまとめて集にしておくとか、文章を集めて一卷にしておくとかの意圖が更になく、全く散逸にまかせて分意しなかったと見るより外なく、其れに一時發狂の事などもあり、まとまつて遺された遺稿等と云うものが殆ど現存しない。之を諸平が家庭的の不幸にも原因して居よう。即ち子供が早世したと云うような事にも原因して居ようし、又或わ諸平に余生を樂しむと云う閑日月がなく、紀藩国孝総裁と云う公職についた忽々の中に死と云う事も原因して居よう。斯る次第で其歌稿についてさへ散逸のまゝに任せた程であるから、其文章の稿に至つてわ、更に甚だしいと見なければならぬ。

之を生前随分波瀾重疊の俗世活を送り乍ら、幾多の遺稿を残して居る伊達千廣や長沢伴雄に比べて、諸平わ實にわびしく、其研究についても其資料の蒐集に困難を感じる次第でもある。

一、其内諸平に『櫟亭之記』があり、『山菅』あり、又『恒翠琴房記』がある。『山菅』は根来寺花見の時の紀行歌文であり、『櫟亭記』わ小池矩平のりへいと云う門人(瀬見善水の弟)の家についての記である。諸平にわ此外に攘夷祈禱の際認めた『熊野三山告奏の祝詞』の文がある筈である。之が全文わ羽山大學筆記の明治維新記録『彗星夢雜誌』の中に寫し取られて残つて居ると云うが未見の一篇、是等が諸平の所謂純文學として今日に残存したる遺篇である。『山菅』わ昭和十一年一九三六年諸平の後裔齋加納録輔氏の手によつて、『柿園雜考』の一部と共に活版本となつて頒布され、又『櫟亭記』わ今私の手許にある。よりて茲でわ『櫟亭之記』を引いて、之について諸平と善水との間に往復された書簡をも併シ其解説をも併記して、その大畧を解説する事にする。

一、まづ本文の記事を引く。私の手許にわ半紙に記された此記の寫と、條幅に書かれて表装された諸平の自筆の一軸と、此わともに小池家整理の爲に道具屋(骨董商)の手に渡つたものを、私がゆづり受けて所藏するに至つたものであるが、私の死後わ何れに流れゆくやら、思へば慌しい世の中であり、もつと古典を尊重さるる世の中であらう。

小池氏櫟亭記

いにしえ神祭の場には常磐木を植て神かかりし給ふ咄とし 近きあたりにこといひて堪へたる水ありけんとおぼしく思ひめぐらせる頃 此家のあるし矩平が本よむ窓の名にかけたる櫟亭の大樹 はた家の後に小池の跡とて円らかなる形ありて 氏をさへしかよぶと聞つるは いといと尊くいいと あてこちの證にもあるかな 櫟はかつ多許にも立のぼりて もとの程二間ばかりありとか 百年近き世よりも同じさまにて かくいともりかに神さびたりとなん 老人かたり出つれば 生そめてよりはいく代をか重ねけん 大かたのことわりもてたせんは中々なり ただ神のめで給ふ御木ともこそたたふべけれ あはれ郡家の前なる槻をつつみに作りて

崇ありし 松尾の故事なども聞ゆるをさはかり 年久しくなれと さ枝にも手たにもふれすと きくは遠つ
祖の高き教によれるなるべし 今より後も家の鎮とあふきまもるべくさてなむ 何事もときはにたらひゆくへ
くこそ

柿園 諸平

一、此『櫟亭記』わ諸平の門人として、もつともよく柿園の歌風の衣鉢を伝えたと思われる、瀬見善水の弟に小池矩平のりへいと云うひとがある。矩平わ善水の実弟で、出でて小池家をついだもので、其小池家わ和歌山縣日高郡藤田村大字藤井に在り、藤井わ日高川に臨んだ一小都邑で人家百五十戸、其小池家わこの邑の名門、其家の前に櫟(團栗)の木があり、矩平よりて之を書齋の名とし「櫟亭」と名づけた。矩平わ善水の弟であるが、偶に二詠を見た事があつたと記憶するが、余り歌わ作らず専ら俳諧に趣味を有し、松尾塊亭の指導を受けた俳人であつた。矩平が兄善水を通じて諸平に依頼し、諸平が其依頼に応じて作成したものである。

因に記す名門小池家も、矩平の嗣甚一郎氏の代にわ郡内の教育會長もつとめ、道成寺境内に彰徳碑まで建立されて居るが、其孫の代に至り不幸が重なり家運傾き、整理の際心なき人達によつて遂に『櫟亭記』まで人に委するに至つた事わまことに惜しむ可き次第である。幸いに之わ私の手に入る事を得たので、茲に諸平資料として解説収録する事としたのである。

一、諸平の『櫟亭記』わ格別大した文章とも云いがたいが、併し諸平が此一文を草する前にどれ程の事を調査し、どれだけの事を考慮して筆を執つたかわ、左の書翰によつて之を知る可く、其真摯な研究的態度に、われわれは大いに敬意を払わねばならないと信ずるのである。

『櫟亭記』起草に関する諸平より善水宛書簡

先達は枉駕之处御免被下候 暑中愈々御壯健賀上候 扱先達御頼之櫟亭儀に付誠に希代之考を思より申候 依之櫟樹のあり所並に日高川の圖藤井村大抵之圖をしらまほしく御座候 但日高川世々の流さまのかはりもわかり候たけ御知らせ可被下候 次に小池氏之小池と称する姓のはしめ承度候 此家今の地に住候はいつころより
の事と申伝御座候哉 上古よりの事にていつとも相分からず候筈ますます妙なり 抑櫟樹は先達も申述候 神靈を祀る木にてコと申池澤川等の傍に植候事 神代よりの事と追々考居候処 不圖只今櫟亭小池氏の事を思ひ出し 誠に奇とも妙ともたとへん方なく尊く思ひ申候 尤もコの傍に植候は櫟に限らず楠にても檜ひのき二而も槻け二而もすべて常磐木に而御座候 本朝月令(古書二而見本やうく)一冊世に伝つり『群書類從』中にあり 「松尾

祭」の条に 国史云承和十四年（八四七年）六月霖雨止息先是左ノ相模司伐葛野郡家前槻樹作太鼓有崇由由是奉幣及鼓ヲ於松尾大神以祈謝畧口傳ニ明神忿怒記宣之此樹者我時々來遊之木也而伐取不可然云々……と長し 此郡家（クウケ）の前の槻も 小池氏の櫟も同じ神木ニ而 神代よりの樹なる事疑なし 故に随分大切に被致候様御傳可被下候 コ池のありけん跡は御座候哉 川辺故土地は返しても可致し候へば難斗候へどももし相分候へば妙々也 扱其家東向敷南向ニ而は無之候哉 川わ木より南か東敷 御きかせ可被下候 もし川より西にあたらば其木の東か南の方に池の跡は無之候哉 小池氏の宅上古日高の郡家にて郡領ならんも知るべからず おもへば尊き事に而尚春よりの考は 小子等が人智を以て考得たる事とはおもわれず候 又『櫟亭の記』をたのまれる事もふしきの事也 とく与其他の様を知りて神代の考の助にて致度 且櫟樹のいともいとも尊き事をも御心得置被成候様仕度 御賢父君へも御はなし被下 数千載の古伝書によらずして 今現に見る事尊き限りならずや 是にて思ひいづれば寺領鎌八幡の櫟も是なりけり 故に祈願のもの鎌を打候処 打に従ひて栄ゆく事人智のはかりかたき事にあらずや たゞ世上神国神国と称候へとも 其神国の神国たる故を知らず 大樹等もたゞ人智を以て伐倒し纔の利にかり候而 遂に其身を亡し其里を哀？衰へさせ害を子孫に残し候事可恐可謹 大庄屋・庄屋たらん者第一心得置而 御代官等の心得違にて 漫に国益をいはんをもあくまでいさめ可申 さても君命にて詮方なくは其木の代に社を建 里民万世罪を謝すべき事 かの承和十四年（八四七年）「松尾祭」にても知るべし 朝廷すら奉幣使あり 土農工商の如きもの漢流の見識也 そして算盤の上の論や書籍の上の鼻の先論もて疎略にすへきにあらずと存候 幾千年とも幾万年ともしらず神靈を坐せたる木を 纔に百年許の人命にかへても伐るへき事にあらずと存じ候 此愚論如何 うもれ木の御考を補ふに足り 治国平天下の一助とも存候は小子が迷敷からは漢・日本は日本也 日本の古言雅言を伝へておもひを辿るは歌也 日本の古伝説をしるは古書也 人と生まれたらんもの家業のいとまには此二事を學ぶべし 此二事を捨んものは国恩を知らずともいふへし 大丈夫たらんもの片時も忘る可き事にあらず

六月十三日

瀬見 めし

諸平 謹申

二白本文 神木の事 西氏始御仲間等へも御話可被成下候
いらぬ世話と申人もあるへけれと決而左にあらずと存じ候

一、右諸平の照會に對し瀨見善水・小池矩平が土地の古老達、瀨戸半助等にたづね合せた處を記して、諸平の方へ返事をした文書の控がある。其控の奥書にわ「右天保十三年子年（一八四二年）『櫟亭之記』加納諸平大人へ相願候品に付調之儀被申越取調申送候扣書、「藤井村郷御老連瀨戸半助方等に所伝」・瀨戸喜助方「慶長六年の大檢地帳」等・「土生村寺社書上」・「旧記」等を以相調、且近村の庄官・老人之口碑をも記し候に而相違有る間敷者也 七月吉日 瀨見善水 小池矩平」と記入して居つて、頗る良心的な取調になつてゐる。其の取調の結果を左の如くである。

藤井村は日高郡矢田庄にして万治元年（一六五八年）に土生五ヶ村に列し申し一子称也 慶長六年大檢打之節 藤井村戸数六十軒斗と見たり 姓氏は七姓といへり 小池・瀨戸・塩路・熊代・野尻・原・中山等也 其余は近年他村より移住もありて今戸数百五十軒はかりもあり 旧姓七姓のうち小池は先祖はいと古より此村に住しよしに而慶長六年調五人組改書にも小池氏の先祖は處と名前有 本村土生村逸見満壽丸之末瀨戸氏と同始なるべし家系のあるよりなれば後年に相成藤井へ来り住けるなるへし 其外道成寺創建之節京師より来候 奎匠の末孫と云ふもあり（野尻） また天正以前龜山城主湯川氏の被官の者も此村に留りたるなど称するもありて 各家系の旧記等も有の候よしなれば ひとり小池氏はかかる申傳えも無之候へ共旧姓の内に而 當御国初御檢地打之節も檢地なし田畑多有 之又分家も有之候へとも其分家はやう纔なる百姓に而屋敷も持満て住めり 今の主小池矩平より四代前の祖地士被仰付候節小池氏と名乗り候は 同人家敷の北にいささかなる小池の跡り 口碑に小池の小池也といひ伝たるによれるなり 又同姓の一家の家敷跡といひて貳丁餘り後の田中に小池塚といひ伝たる小さき塚あり いと古きものなればいつしかかすれて 今は貳坪はかり残れるを古代のものなればとて 近頃矩平より石垣築きて大切にせり

小池氏の小池は貳坪ばかり○楕円形のものにて いと小さき事なれども由緒ある旧地のよしにて 先年其傍へ御納所倉取建候筋も 元埋も果さず其儘残し置けるよりて 今は尚更いふ事なし

矩平書齋前に有之櫟樹根廻二圍許 土際より末まで凡五丈斗り 大樹といふにもあらされとも普通の庭木などにはあらず 矩平親族の内八十才許の老婦人に問に 幼少の頃見たるよりことなる様にも覺えず またいつのころよりありとも不聞 己に古葉など庭へ落て耕作などには便よからねども 何故にや往古より枝打傷くなど家禁にて 隣家より申来候も不許といへり

其木を見るに斧の痕など絶えてなし かゝればいつ頃より生育たりとも知るによしなし 此櫟樹のあたりより小池の跡のあたり迄には むかし尚同様の大樹ありけれども 天変歳霜を経て朽倒れて 其跡は屋敷畑などに

なりしよし 郷の老人等幼少の頃むかし語に聞覚えしものあり

藤井村は今土生村の子称なれども 此藤井といへるはいと古き地名のよしにて むかし此村今宮の森に藤樹多くありしよりいひつかひたる名のよし 一村の口碑に残れり 今の今宮の社の後専念寺境内に楠の一大樹あり 根廻丈は十一・二丈許 専念寺靜土宗にてあるか 中にも新なる寺にて草創より百五十年許といへり 境内の楠も今宮の垣内の御木なること一見すれば疑なし

矩平宅地の前は直に日高川なり 此辺古は宅前迄田畑にてありしを 寛永(1600年頃)の頃洪水に而川流貳丁許も藤井領へよりけるよし 矩平宅前も其頃川になりて今に川成荒にてあり 思ふに寛永の頃住家の旧宅は今の宅地より少し東南にありて 今の本宅の辺りは旧宅地の後の端なりしなるべし 今の宅地西北の端々は近代外より買取たるものにて估巻あり 本宅地は古券なし 御檢地の昔より相伝の地なり

一、之によつて諸平わ『櫟亭記』を認めたわけであるが、此草稿が出来て内見の爲めに送付してきた書簡を、念爲左に掲ぐる事にしよう。

諸平より瀬見善水に宛てたる『櫟亭記』についての書簡(第二信)

賜書拝見 風雨にて而冷氣生し筆硯いたしく相成申候弥 御健奉賀候 陳は櫟亭之事先便御頼申上候事とも委細御しらべ被下奉万謝候 就中小池氏之小池奇々妙々愚考の明證にも相成雀躍致候 千年以上の故事と存候へ共今世迄吃としたる口碑伝はるべきよしなし 名と実とこそ記文には勝る證には侍れ 扱別紙記文取あへず認申候 委細認めんとすれば余長文に相成却而わつらはしく候間先大意を述候 是に而宜敷候はば清書可被候間御覽後御かへし可被下候 尤わろき所無隔意高評希郡家の跡ならんと存候考等は一朝一夕に而は難盡候 日高川変遷も詳圖にてよくわかりうれしく奉存候 土生村に飛鳥明神を祀れる事考あり 『靈異記』に日高潮と云う文あり 潮を湖と古く通はし用る 湖は湊にて日高湊の所なれば何ぞよしあるべく存候へ共 此書只今手許になし 近日圖に合せて考可申候 道成寺の事等少しわかり可申哉と存候 依て御記文とも留置申候 以上

七月二十日 夜

諸平

瀬見 兄

尚々 先便わすれ候 天地歌さし上げ候

一、かくして諸平の『櫟亭之記』が成り、即ち唐紙全紙大の紙へ諸平自身の筆で書かれた『櫟亭記』が出来たのである。

右一幅にわ奥に、右小池氏『櫟亭記』(一八四二年)天保十三年九月柿園諸平しるすと認められてあつて、此書の出来た時が判然として居るのであつて、此一文決して等閑視しがたき諸平の深い思索が盛られて居る事が知られるのである。

註1 諸平が弟子の歌稿紛失の事 諸平が善水の子元武の歌稿紛失につき、再提出の事を申送った事。善水宛の書簡中に見えて居る。尚『柿園詠草』奥書参照の事。

2 諸平発狂の事 善水宛諸平の書簡にて知りうる。

3 諸平が子供夭折の事 『鰻玉集』に悼歌が載つて居る。

4 羽山大學 和歌山縣日高郡塩屋村の人 醫 有名な華岡隨賢門

5 小池矩平と俳諧 拙著『紀藩俳諧史』記事参照

6 松尾塊亭 拙著『紀藩俳諧史』記事参照

7 道成寺 和歌山縣日高郡矢田村鐘巻 詳細拙著『道成寺の研究』参照の事

8 鎌八幡 伊都郡河根村丹生酒殿神社境内に在り 元高野山寺領の地詳細の事

『紀伊国名所圖會』参照の事

9 『埋木考』 瀨見善水父善隣(本居門)に『埋れ木考』の著あり 諸平の添削あり 別項記事参照の事

10 西氏 西元知 大庄屋にして歌人 善水の歌友なり 其詠『鰻玉集』にも出づ

11 慶長六年檢地 豊臣秀吉統一の後檢地の事あり

12 龜山城主湯川氏 和歌山縣日高郡湯川村大字丸山に在り 近郷一円を領す 甲斐源氏の末流 豊臣氏に攻亡

ぼさる 七八代の系譜あり

諸平の『埋れ木考』添削

一、文人・歌人が一篇・一章・歌句を作つて、之でよしとして世に送る迄に、其着想を練り・其技巧を鍛え、如何に苦心鏤骨するかは、苟も筆をとつて一行の文章を記し、一首の和歌を詠じたる経験ある人ならば、何人も説明をまたずして直に首肯さるゝ所である。唐の詩人靈島が兩句三年にして得、一吟双淚流ると云つた語わ、詩人の眞骨頂から出た眞実の叫びである。

一、然るに古来文事歌人の草稿を起こしてより、出来上がる迄の経過を知る稿本などを知る稿本などを傳ゆるもの少く、



明治七・八年頃の藤井村地図(小池氏藤井村戸長) 『櫟亭』と一二七八番地(?)今宮神社・専念寺の位置

唯其完稿について之を注釈し、之を鑑賞するばかりである。幸茲に瀬見善隣が稿する所の『埋木考』の一文に対し、諸平が加筆したるものが残存して居る。之わ頗る珍とするに足る資料と存ずるを以て、之を畧解して掲出する事にする。亦以て諸平の考証態度を明にする一資料たるを失わずと思ふし、左様に深く考えずとも、之は之自体として面白いものだと思うるのである。

一、瀬見善隣わ瀬見善水の父で本居大平の門人、歌を作つて居る人である。詳しくわ拙著『天誅組紀州落顛末』中の「瀬見善水畧傳」を参照され度い。其頃日高川の底に大樹の埋れ木が発見された。此埋木わ最近年幾つかに折れて流れて、一部わ誰か財利の爲に採掘したときいた事がある。因に「記事富士山麓」などにわ今も杉の埋れ木が多く、之を採掘する事を業とするものがあると聞く。採掘した林は其名もゆかしく神代杉と称せられ、花卉や茶器に造られる。又仙台の埋れ木細工わ古来有名である。古来此日高川の底に発見された埋れ木についての考を、善隣が書いて諸平の添削を受けたのである。

一、原文と添作とを全時に掲げないと意味をなさないので、添加した文字を右側に加へ、削除した文字わ一線を加へて削除の意を示すことにする。

埋れ木考

紀伊国日高郡矢田ノ莊(子称)藤井村に今宮牛頭天皇と祝ひ(崇め)奉る御神は かけまくもあやに恐き素戔鳴尊の御名にして 此地に久しく鎮りいます(ある)とそ 抑この御神のここに(到)りたまふ初はいつのころといふ事はきこえされとも 昔熊野より大なる木に乗りて来りたまふなん いひつたえたり(この)日高川乃流この里の下つかた吉田村の界近きわたり 今は河原となりて白浪さ(らす)浅瀬のみなれとも 七八十年の昔はいとふかき淵にて 夏の日水あみする里の童ら かきつきて水底に入るに 淵の底に樟とおほ(え)て色くろく 長さは見(分ら)れと横經り三丈より四丈もあるらんとおほゆる大木 その両の端は淵の浅くなるに随ひ 小石に埋もれて見(へ)す 頭しほとにはくほみし所も丸き形も見(へ)す たた平におもほゆるがありとそ この埋木は(命)の熊野よし御て来りたまふ木なりしに しつまりましての後 ここに(泊)ととまりて在りけるが 幾千年 径(つ)て 土砂に埋れしものなりと いひ伝ける(か)

諸平此所に附箋して左の如く朱書す

諸平云 熊野新宮ノ祭ニ諸手船ニ神輿ヲ乗セ奉リテ御船島ニ御幸ノ事ナリ 『夫木抄』ニ御熊野ノ浦ニワ見ユ

ル御舟島神ノミユキニ傍メクルナリトモ見エタリ 社家ノ伝ニ上古大神此処ニ鎮座セル時諸手島ニ垂テオハシマシケルヨリ 其ヲリノ土人歛ビヲモ伝ヘントテ祭ヲナストイヘリ 熊野諸手船ノ事古書ニ多ク見エ 且船ハ此大神ノ始テ造ラセタマエルモノナレバ 日高ニ鎮坐ノ時モ同ジサマナリシナルヘシ

さて今の吉田村八幡山の麓は汐海よりの入江にて この地より見たさるる道成寺の本尊黄金仏の薩埵といふも 延喜年間（九〇一〜三三年）にこの入江より出たまふと彼寺の記に有り 吉田は芦田の儀義にて時移り世の下るにつれて

て 自ら（ら）（渦となりしころ）草の生て有しにつきての名なるへし （また）又今の藤井の里わたり川のすかた霖雨の後水の高く溢るる日（はいはず）にそあらめ 今の流の形をみて はかはかりの大木川下より浜る事難かるへし こは（この）此わたりに大樹の有て 根か翰のたふれし（にもあるらめといはす）つへきにあらさる）ともいふへけれども 吉田も海にて有りつらん 千年余り昔の延喜よりなほ上れる世には いよく潮の通し事は今もみるかことくにおもほゆるなり （古典にも見たる） 夫（そも）石楠樟船の古事は妙にくすしき神爲なれば

その船に御し（たまふきて夫より来たりたまふともまた）大海に浮（してその）ひたまひ入江の（戸）門なれば こに泊たまふへりといはんは由あるかな かつむかし扶葉木てふ大樹の有しといひ伝ふるも（それも）神（の）御代よりの（の）古事ならんかし 下りて人の世となりては都金閣寺の天井二作りたる楠板すら 世にはかゝる大樹なる樹もあるかなとめてはやすめ（るも）れと この埋木（競）に較て認思てはかれば大樹とひふにも足らず 諸平云 上古皇国ニ大樹多カリシ事ハタ皇国ヲ扶桑国トイヒシモ 其木トモニヨリテイヘル事トモ『扶桑国考』

ニクハシク云へり

（是によりて是を思へば『日本書紀』蛭児命の条に載之於天磐櫟樟船而順風放葉云々と見たり 尊の御り来り給ふといふこの木は天岩樟船といふものの類にても有らめともおもほゆるなり）

諸平云 コレハ蛭子尊ノ事ノミナラス石船ノ事 古典ニ多ケレバ始ニ石樟船ノ古事ハ …… ニテ事足レリ除ク

ヘシ

己年ころこの埋木を見まくほりすれとも 八十年余（り）こなたに塘にみてる高水も有つれとも とことは川中は浅瀬にてかたへも高き川原のみなれば 自測とかはりなん世に値（は）では見事かたらんかし嚮にもいふ彼埋木の大きを古き人にきき伝へて想像に 横縦三丈有る樹を遠より見れば 枝葉茂りて一ツの木にて一つの山をなすへし されは（さすかに）神代のものならて下りし世にわ かはかりの大樹この地ニ有らんとはお（も）ほ（へ）す 『古事記』に鳥の石楠船神とみ（へ）えて 伊邪那岐・伊邪那美の二神の生せる御子のうちに有（りて）

るは船を守護り給ふ御靈なるべくやならん愚かなる身にては、あげつらひいふべき事にあらす(つきていはん)此神のみしわさをさらにいはんもいとく、恐こけれと、此里は雷(神)墮すと(そ)いひ伝ふる事ありそは、いつのころにかありけん、(むかし)雷(神)墜ちけるか、御社の前少し西に一囲余の榎の木、北へ斜めにたちて有し(か)に、雷(公)獸(敷)の爪あとして長一寸五分より三寸(にいたる)許さけつ痕、根より末まですきまなく志(か有り(て)しとそ、(里人のいふ此木ならん雷公のつたひ上りし木なりと)、今はた(ふ)えてなし、かく(し)ていくほとなく霹靂^{ハツタキ}き墜て、同じく榎の木をつたひ天にかへりのほし、二度ならず三度ならず六度に(副)さへ(を)およひけ(り)かく轟きて墜ちるにぞ(れば、里人(を)はそれかなしひける、(加)に七度に至りて社頭より神人出て雷(公)をとりて御足にふみいかなれば、汝きたなくもわか社の辺へ、かく墜る事のかすかさなる(や)は甚(不礼なり)なめし、今より後は意して此里へ墜る事勿れ、尚かからんにはまさにふみつふすへしと、いかりてのりたへば雷かしこみにかしこみてま(ふ)うすすへなし、神人雷か手を把りてもみたまへれば、御手の内に潜りて鞠のことくになり(て)にけるを、神人なけうちたまへは、辛(ふ)うして雷は天にかへりけ(る)となん、己総角のころかく聞きての後も、いくその年は径れとも、この里へ今に雷の墜ちたる事なく、己が父・祖父もかくはいへりき

善水讒入、むかし津軽といひし人、皇との勅乎うけて雷乎とらへしと、古典に見えたるを思へは、此鄙言もさらにうきたる事とも思はれず

なを云はんには有るとき、此藤井村と異むらとの界をかけて、一きたの田細き畔をへたてゝ、あしをその畔へ雷の墜ちかゝりしに、ことむらの田は悪き臭いたちて稲毛を傷めけれとも、こなたはいささかもさ(わ)はる事なし、又昔より此里人まむしに噛まれたる事なしとぞ、年々正・五・九の三月、十三日の夜は御湯あけ、家々よりともしひをさゝけ、みけそなへまつりなとして、つとひぬかつき奉る、遠のさと人までも御食の余を、反鼻除の(守)神符^{マモリ}とてき(そ)ほひ戴きかへるなり、(反鼻除の守につきてはなにたるみなし爲も聞へ侍らねともこは)この神符は八俣遠呂智をきりたまひし古事をききて、しかもするにそ有(な)らん(いでや)、此さと人にかきりて昔より蛇傷の慮なしとぞ

かく尊き神の御爲を、己かことき(加)ものの、筆もてものせんは、悲き(爲)業なれとも(さきにいふ)かの埋木を、己か父苗元は目に見て、己等に聞しのみこの里人たにも、年若きはいまた聴もおよはすといふをききて、古今のかくたかひめあらんには、なを下らん世にはいかにかはりなんとくすしく、妙なる古き物語の絶えなん

(すら)をかしきに 己かききつるままに 彼埋木のあらはれし世に 値ふ人とても木の性を見んなどとい
ささかも削りとする事なかれとの意を いかてつきくの子等に いひのこさまほしさに かくはものするなん
ありける

天保十三年寅年正月三日

瀬見 善隣 白

一、此文わ格別大した文字でなく、今日われわれが見ても、今宮中頭天王などと云う、佛教の中から生れてくる、牛頭天王の名を冠した事などは、神代の祭祀とはいはず、又今宮ともあり、後年の祝たる事一見して知る可く、考証の土台己に浅いわけで、左程感服しないが、其事を別として、此文に対し諸平が丹念に校正して、天甬遠波用字の誤を正し、文章の添削をなして居るあとを見て、獅子わ兔を打つに其全力をあげてするが如くに、諸平も常に真摯なる其孝者的態度を失わず、常に細心周到の注意をもって文を作り、歌を詠じた事を知る事が出来、此天才児又何処までも、自由奔放なる自縦の跡なかりし事を知るに足るのである。

一、而も諸平わ此文の事を忘れず、かの『櫟亭記』撰文の場合にも、其書簡中にもこれにふれて、又善隣が死亡したる時の悼詞中に、左の如くこの考の事を述べて居るのである。

呈瀬見翁靈前講

天傳布日高の川の水底に よこほりふせるくすの木の 久しき埋木年を経て 斯留なけとかけまくも かしこ
支御木曾いはまくも 尊き木そと美つけさに をしへおかしてうみの子に つたへたまひし清瀧の 瀬見の翁
は何事か世にあかして 川水のはにはすますうもれ木の かく利ましけむ曾乎きけば 心そいた木うみの
子や いかに啼らむ里人やいかにしぬばむ 此おちかたみの書を 朝宵に手にとり見つ眞乎うかなし母

埋木はあらはれぬとも世の中乎うつてし遠ちにあふ時あらめや

菅原 諸平

一、私共わ諸平を唯單に、一個の歌人として見る事の誤りなるを知る。諸平わ孝問なくして、唯一時の與に任せて詠ずる歌詠みを、天甬遠波家と罵つて居る(瀬見善水宛書管参照)。諸平わ本居學の嫡流として、その古學思想に徹した人であり、又実に造詣の深い国孝者である。歌はむしろ諸平にとってわ其華に過ぎない。其实わ彼の国孝にある。而も諸平が人を導くの親切周到なる事、師大平におさく劣らぬものと云う可く、之當時諸平が紀藩の人氣を一身に背負つて、肝心の本居家の存在が世間から忘れられんとし、其の名の近通遠隔にひゞぎわにたった所以であると

信ずるのである。

因みに云う 右善隣の『埋木考』及諸平の『善隣の埋木考』及び諸平の『善隣を弔ふ歌』、共に私の所蔵に版して居る。何れも『櫟亭記』と同じく小池家より出でたものである。尚此諸平の書入を見れば、諸平が『扶桑国考』一篇を物し居りたるが如くに考らるるが未見の書である。私共わ之に對して、實に之ある哉と思はるるのである。

勤皇家としての諸平

一、大東亜戦争になりて国民の士氣高揚の爲めに、かねて結成されて居た文章報国の使命を負荷して起つた、日本文學報国会が新たに「愛国百人一首」を撰出し、昭和十七年十一月二十七日情報局から發表された。其百人の内に加納諸平も加わつて居つて、諸平の幸遇泰平世二首中の一首

君がため花とちりにしますらをにみせばやと思ふ御代の春かな

と採録された。それ以来諸平も勤皇家の一人として、俗世にもてはやされる傾きが多くなつた。これより大分前に私共わ紀藩勤皇家の一人として、新聞紙上に紹介した事があつた。元來勤皇家と云ふ事自体が相當複雑な事で、その顯著な顯現わ、明治維新前後の勤皇佐幕の態度の岐れで、其点で紀藩の如きわ尤も徳川幕府の親近者である爲めに、本當の勤皇家は此際に現われて居らなく、僅に陸奥宗光・菊池海莊が傑出して居る位のもので、其他里見龜夫（岩橋徹三郎）外二三名を数ゆるにすぎなく、それらの人の行動も嚴密に云へば、明確を欠く所がある。有名な本居宣長がはじめて紀藩に召し出された時に、之を祝賀する爲めに一門の人々を集めて歌會を催した。其時の兼題が『君恩如海』と云ふのであるが、此「君恩」の君が果して大君の事を指したのか、但しわ藩公をさしたのか、嚴密に云つて判然志ない所があるのでないかとさえ、窃に思われてならない程のことである。

一、勤皇家などと云ふ事わ、一つの実践的な政治運動である。故に或一つの藩の祿を食んで居つてわ、其藩が全体そう云ふ行動を是認した場合わ、格別然らざる限りそれわ到底出来うる事でわない。諸平にわ勤皇について格別の実践わない。唯彼の門下から畔林光平の如き実践家を出して居るのは、其鼓吹の結果と見れば見えぬ事もない。此外に諸平が攘夷祈禱の際に、熊野三山の社司から頼まれて、夷狄打攘祈願の祝詞を認めた事位が、諸平の勤皇実践の顯著な事例に過ぎない。

之を同門の伊達千廣などに比べると、藩に於ける其地位・其閥が元来低く、格式の上から政治的に何等勢力を有しない諸平のこと、そこに格段の差を見る次第であり、諸平の勤皇鼓吹わ純粹の思想上の鼓吹にとゞまる次第で、此点わ頗る精採^{？精細}を欠くものがあるけれども、反面に又その心胸が純粹で、何等私的の野心のない点が尊まれてよいわけである。

一、尚古思想と云わうか、報本反始の思想と云わうか、今日の言葉で云わば、神ながらの道と云わうか、我国最古の神代の姿を正視して、誠の道を宣揚しよう云ふ本居系統の孝問を、其天才に享けて尤も深き所に詣り、之を熱心周到に常に其門に集う人達に宣揚したのは、諸平を於て他に之を比すべき人を見出すことは出来ない。

本来本居宣長の孝問わ其門人の多く広きに亘って、王政復古の思想と運動を助くるに最も有力なりし事わ、説明するまでもなき所であるが、之が其嗣大平を経、諸平に至って最も大いなる華と咲き、畔林光平の如きに至つてわ、実践に入つたと云い得る。故に諸平自身佐幕の随一なる紀藩の祿を喰んで、直接何等実践にうつす事なかりしと雖も、尚諸平を當時の意味に於ける勤皇家の一人に、加えて差支なしと信ずるのである。

一、諸平に『扶桑国考』の著ありし事わ、別項『うもれ木考』添削の章に述べたが、不幸にして傳わらず、今若し此稿本を発見する事を得ば、諸平の勤皇思想がもつとも的確明瞭に闡明された事と信ずるも、之わ望んで得がたき事、今わ残存する文献中、就中其詠歌について之を窺知するより外わないと思う。今文献より諸平の勤皇思想をさぐり、之をまとめる事わ事頗る煩雜、よりて卒直無雜作にその詠歌について、之が姿をもとめて諸平の思想をさぐつて見よう。

一、唯ここに諸平の勤皇思想の端的に表現されて居る文句が、諸平より室谷賀親宛の書簡中に或る。今之ををひいてをく。

(前略) 尤今年は禁裏御會無御沙汰 御願有之御社へ御法樂之由に付野生等も御国風の最第一治国平天下の大道をますく万世に伝ふる爲 御世壽の会致候筈に御座候 俗人或は文治以降^(一八五年以降)の武器等のみを国家の用に心得居候輩御国風の第一の歌道をたゞなくさみの觀に存候輩もあらむかとて 禁裏にても右の通之御事誠に難有事に御座候 我天皇は所謂五大州かけての天皇なる事 年々夷類等もわきま候様に 相成可申愛度御世に御座候

(歌人書簡集)

一、「わが天皇わ所謂五大州かけての天皇なる事年々夷類等もわきま候様に相成可申めだき御代に御座候」、これ程はつきり當時に於て云ひ切りたる人、諸平の外に幾人居つたであらうか。眞に痛烈を極めたる勤皇思想であるまい

か。

一、諸平の歌集を通じて感ずる印象の第一、神と云う事又わ神代と云う事の匂ひが、著しいと云う事である。何でもないと思われる所にも神を感じて、それを率直に表現して居る。之わまことに著しい諸平の歌の特異例と思われるのである。例えば

神ならば岩おしわけてかへらまし山路のくれは家そこひしき

神あれし五十年の秋の一つふていつまで瀧をさへんとはする

わたつみの宮路のかよひ中たえて巖となれる橋はしらかも

諸平の頭の中にわ、こうして神と云う事が常にこびりついてゐたと見ゆるのであつて、之によつて諸平の思想の根底が築きあげられて居ると云つてよく、随つて又こうした神・神代についての歌と云うものが力強く生れているのである。

楯ヶ崎

島ヶ崎仇浪ふるる巖すら君が御楯とかかえまつれり

名所市

人待ちて三輪の市女のうる酒のすむもにこるも神のまにまに

熊野の歌

み熊野の神の御田屋の花すすき穂に出るまであれにけるかな

有馬の海浪のゆふ花をりかけて神もまつらぬ時も日もなし

かり宮のにしきの御旗立かえりしのぶ昔の夢にそ見ゆる

やととへば木柴をりさす熊野人あたわの神の道やつたえし

あふきみるおろちかくらの松かけはいかなる神かきり立たすらん

有馬窟花祭

神まつる有馬の浦による浪の音やつつみのなごりなむらむ

初冬山

神無月立にし日よりあし曳きの山さえもろき色に見へつゝ

社頭雪

はつ雪の朝宮つかへいちしろき跡こそ神の道にわありけれ

玉津島奉納

ねきことをうけてふたたひよの中にかへしし神の道はわすれし

詠眞孀山歌

此山日高郡の高山にして丹生津比売大神の天降りましし山と云ひ伝ふ 丹生告門に江川の丹生に忌杖さし給ふと見えたる時の事とおひよせて 郷長瀬見善水にあたへる歌なり

かけまくもかしこけれとも丹生津姫神の命から国をことむけまして朝もよし木の此国に齋^{イハヒ}状をささせたまへる宮所さはにあれとも日高のや江川の丹生ハ溪川の清き瀬の音と御心をよせ給へはかり々にここたまつれるけたしくも故かもあると郷長にわか問きけば郷長のわれにかたく古の事はしらねと天とふや鳶の翅に其神ののらし給ひてかを見ゆるい豆の高山はしつるの眞妻の山にくすしくも天降まししゆつかの木の継きてもろく齋くとしききつたへぬとかつくも我にかたりき眞妻はやはしき山かも青雲にそはたつ峯はをとこさひ巖たたなみよちのぼる麓の小野はをとめさひ秋萩しなひ朝よひに見かほし山そすもしかにあれこそことむけし神の命の奇しくも天降ましけめはしき神山

神風歌

あなたうと風の尊さ神風といひ継来たる中津世のいつのかせは耶宇さへくきの古にけしきからしらに皇国せめむと百千船あるみに出し大旗に小旗立並つくし瀉博多の海の沖さけて責くるはしに辺つきていむかふ時に神風のあからしま風いや吹くにふきさびてわだつみのそこ吹かへし荒潮を空にみたしめ列ふれる船のことくひたくたきくたきうつれば石弓は浪にはしか衣広梓はいくりをれて千萬のたふれ奴らせむすへのたときをしらに沖にへにおほれたたよひ玉藻なすうけるかはねは荒金の土にふみなし天雲のそきへのきはみはるくにくくへくなしぬその風の音をかしこみ其風の闇を高みて心さへ身さへをののき神かせのくすしき国と世々久につかふるもへは神風の風の尊さあはれ神風

一、かくして諸平の思想にわ、神代の事・上代の事が根基をなして、必然的に尚古思想となり、御代の泰平も神の恵と感じ、ここより出でて一天万乗の神孫神裔の国柄の尊嚴を知り、ここに皇室尊崇の有かたき信念が生れ、之が泰平謳歌神思奉讃の歌となりて、尊皇攘夷の歌ともなったのである。

家會はじめに立春の題にて 年々詠める歌の中に

淡路島霞そめけり木の海の沖は神代の春や立らむ

おもふとち梅の初花折かざし御代の盛にまとひしてまし

田家春雨

ゆたねまく苗代小田に降雨のしつけき御代と仰く春かな

山家花

うつりゆく世さえへたてし松かきにましりて咲る山さくらかな

花窟のかなたに

咲く花のいはやのみしめうちはえて風たたぬ世をいはぬ春かな

八月十四日の夜和夫・正紹とともに中の島の里わをそそろありきして
五百代のわさ穂波よるところ津を月にみつつや神世しのはん

天

思ふ空やすの川原もありときく雲の上こそこひしかりけれ

日

天つ日のかけのまにく世の中の人の心もはれくもるらむ

風

世をいのるぬさの追風はやければあたをし船はかけもとめす

熊野の歌

那木の葉をかさしてかへる人もかなよのみゆきのあとかたりせん
牟婁の江をつらねてわたるかりかねにたえしみゆきのかけをしぞ思ふ

那智の瀧

世の塵にまよふふけきはききとめぬ神の御声や瀧にそふらん

祝

君が代の恵の露にぬれてこそ中々民の袖はほしけれ
八尺瓊の光をきよみ天地のそこひのうらは浪風もなし

東尾村の榎へ延元のみかとの神輿よせ給へる蔭とて 伯耆人の歌

天津日のかけさすかたにうちむれて榎の実もりはむ鳥も鳴らむ

浦

よもの海の静けき御代にきてみればにしきの浦はあた波もなし

一、かくして中臣鎌足公を詠じ、楠正成公を詠じて、金玉の歌となつて居るのである。

大中臣右大臣のかた

心さへ身さへ清くやつかへん神と君とのまけのまにまに

楠増三位

みなと川底の埋木得てしかなつかふる道の葉にはせん

楠増正三位のおくつきに詣でて

武庫の海の沖津大灘船はあれと船ゆはゆかす生田すきかちより来つ大御田の秋田の穂向君かまになひき
よりけるますら雄の心のをうをさぬさはふいわほに彫りて白玉と照りとほりたるおくつきをいはひおうか
み七かへりゆきくと見れば玉梓の道ゆく人の櫟の木のいやつきく／＼に古を偲へる涙みなと川みを泣きほし
武庫山はなきからしたり心なき身にはあれともよそのみになけきありえねはともり火の明石の大門に月見
んと人には云ひてまみ来し吾を

反歌

湊川水こそたえめ蔭ふかき千枝のしづくはかはく世もなし

湊川そひの巖は玉なれや萬代かけてひかりさすなり

一、かくして又當時外夷の艦船の近海を窺うものに対する憤りは、石火と迸しつて外夷攘ふべし、神国けがすへからすの気概を見るのである。

嘉永七年^(八五四年)

(此年改元・安政元年)九月十六日の暁 日高郡浜の瀬わたりに夷が乗れる いと長き船一ついかり卸

して またの日こなた様にく／＼とかしこよりはせつかひ来しかは 人々海つらのまもりにとて出立けるに 又
の日暁浪の音高きこえければ たちまひもしらぬ夷が船の上に波の鼓を風のうつらん

その船難波近くかゝれとききて

おしてるや難波の海のあら潮にみそきすらしも仇まもる子等

嘉永七年冬十二月閏當月二日魯西亜国賊鑑

遇大風而沈没于伊豆国海作歌一首並短歌

足引の山川とよみくぬちみなふるひし時押照難波に來入り東に伊豆に回らし冬草の下田の浦に月まねくかゝれる船しれ人のおろかさ共のおろせりし碇の緒たえ浪きりひれさへ失せて八月の船かたふけは船つくりひれとりつくと百船の中に挟みてたたみこも戸田の干瀉につたかつらひきもあへねば沖つ風ふき流しうち日さすこや島かくりかたよりによりつたよひてまちまちし朝もよしとさはさはいやひこつらひ水鴨なすうかへるはしにむかさくる日の眞盛りにあやしくもくしひなるかも八隅知わか大君の天津神国津社に古のあとのまにまにさきかせるとよみてくらの木綿花のをゝりにをゝりおろさへか掲はらふらし天雲をちわきにわきて稜威乃風伊豆の海ふき玉櫛笥ふたよりみより沖つ浪辺つなみうち入りてわた中に沈みうせぬれ神風とたゝへさらめやそよしときかすてあらめやしかれとも八十の国辺のえみしらはいまたさやけり秋津島四方の国人きみか爲め神をいはいてときまちをらむ

反歌

岬守る神をいははなたはれ人のおろかさのことはしらずともよし

大宮所あらたになりて　かつらの宮より入ませたまふ　大御ともの列しるせるまきとて　十一月
はしめつかた　都人のまたきみせ待けてかへりことに　いともいともかしこけれと

御鳳輦　みこしの丁よぼろかきかそへ日もたかたかに仰きてそまつ

一、右の一首わ西田惟恒の撰したる安政二年百首に載する所で、此安政二年百首集にわ、全年十二月諸平の序文が掲げられて居る。此序文わ別項記事に引用するかもしれない。諸平わ此一首の下に兄瓶とも柿園とも兵部とも記さず、又姓を加納とせず、特に菅原と記したる所わ、注意すべき事なりと信ずる。即ち諸平が皇室の事を詠じ奉った場合の敬虔な心持が、其長い詞書と此菅原の姓を記した辺に溢れて居ると思ひて、決して間違なしと思はるのである。かくして歌人勤皇家諸平にわ又諸平の特別なる立場があつて、実践を伴わざる諸平の思想の上に、溢るる勤皇思想を掩ふことはできないのである。

註　夷船の事わ『異船記(紀藩記録)』参照の事

楠贈三位の　おくつきに詣でたる長歌及反歌二首わ、『柿園詠草拾遺』に一首だけ出て居る。之を寫本によりて補す。又伊豆の海に沈没露艦の歌、全じく『拾遺』に短歌なし。今諸平自筆の掛物に記せる処によりて、又この二首共原萬葉仮名にて認められある。

郷土歌人としての諸平

一、歌人わ坐なからにして名所を知ると云ひ、旅わ風雅のやつれなりとも云ひ、風雅の道わ名所旧蹟につながり、山川風物にちなんである故に、西行法師の如きも尚東西に漂泊し、宗祇法師の如きわ時恰も戦国の中に在り乍ら、尚九州不知火の果てから、鳥がなく東路にまで漂泊の旅をつづけて旅路に客死して居る。俳聖芭蕉が『奥の細道』を辿つて北陸を跋涉して其奇景に面前し、さきに往返したる東海・中仙道の旅を合して、全日本の中圓をあるいて居る。文人雅客の多くわ、一度この山紫水明の境に彷徨して、はじめて其雄篇大作を後世に遺して居るのある。

二、歌人諸平の足跡わ、こうした人達に比してわ頗る貧弱で、其山川風物に接する旅わ殆んど局言されて居る。諸平の足跡をかの『柿園詠草』などについて見るに、彼わ不幸にして當時孝問の瀏叢たりし、江戸にも出て居らぬかに見ゆる。彼の旅として擧げ得る所わ一旦紀州に入り、加納伊竹の養子となりその娘小里と結婚して後、年廿歳の頃に一度遠州の生まれ故郷に立返つて居る。其の他、此の往復の旅行が前後二度、花の吉野山に遊んだ事彦度、京・大阪に遊びし事数度、須磨・明石・兵庫・中国・四国の旅が二度、それ程の事で、それでもその度毎に、いくつかの歌詠は遺して居つて、其処に山水風物の所縁を物語つて居る。

三、諸平の紀伊国内に於ける足跡に至つてわ、之わ又格別『續風土記』・『名勝圖繪』等の編纂の爲めに、在々隅々まで晋く跋涉して居る。尤も其のもっとも親しく巡回したのわ、紀州の南部である。『柿園詠草』中の詞書によれば、有田・日高の両郡わ二回、熊野四郡わ四回も巡回して居るのである。

かくの如くにして、其名所旧跡わ云うに及ばず、名もなき山間溪谷に至る迄晋く足跡を印する処、実に雄渾壯重なる歌詠を生み來つて居るのである。

四、此点に在つて、南画に有名なる野呂介石が奥熊野、殊に現在三重縣南牟婁郡の山水に私淑して、あの海内無双の山水画が渾成された如くに、諸平の雄渾無比の風光歌も又此の奥熊野を背景として出来上つたのである。故に諸平のこれ等の所詠わ、この山水に親しみたる後に、之を味ひ之を批判すべく徒なる机上の批判わ、決して正鵠なる結果を齎さないものである。

此の意味に於て諸平わ、正しく郷土歌人であると云わなければならない。此点に於て私共が諸平に感謝し・尊敬し、

之に傾倒する所以でもある。

一、唯此処に一事注意すべき事がある。此点わ諸平を清新なる歌人なりしとの評を與えて、よい事であると思わるるのであり、諸平の態度を枯揚してよいと思うのである。それわ諸平が眞景の雄を見て、從來歌人のながめて名所とした所に、少しも泥んで居らぬと云う事である。之わ諸平が歌作に於て題詠を少しも意とせず、常に題詠によつて作歌したる旧套黒守の態度に対比して、まことに興ふかき事である。普通の歌人ならば恐らく萬葉の足跡をふんで、その歌枕を辿つて、そこを詠じていったであらうに、諸平わ一向そうした事に頓着せず、実地の景色の雄大なる所をどしどし歌にして居る。之わまことに特筆すべき態度であると称すべきである。故に諸平の諸作わ此点に於て、眞景の眞にふれて、生命の永遠なるものの、存する事を感じるのである。

一、諸平の作歌の主要部分わ、実に紀州南部・熊野方面の詠にある。兎角の批評をなすものがあつても、あの熊野七十二連峰の山々、谿々と青一髪怒濤逆巻く熊野洋との眞景に接して、諸平ほどの作品を何人が遺し得るかを思へば、私共わ却つて驚異を以て其作品に接するのである。

一、今諸平が如何に忠実なる郷土歌人なりしかを證する爲めに、煩をいとわず其所詠を引いて見るであらう。

秋田

かま垣のむかしの舟路隔りて粉川の田居にをしね刈るなり

『柿園詠草』

根来寺にて

大御代のますらたけをはいとまあれや宮人さひて櫻かりせり

田井の瀬川原

よそめには舟まねくとや思ふらむ川原の主袖かえはなり

中島並木の松原

行かへり春はここにやあひばまし島の並松櫻なりせば

以上三首『山菅』

阿弥陀寺にしばくあそびて(中之島なるべし)

もろくのみなかめしものを萩の(花)露三度までこそちらで侍けれ

木川春望(紀ノ川なるべし)

胡蝶とぶ堤の草のめもはるに霞をくだす花筏かな

春川

木川や小田の大堰春の水霞みながらに誰か引くらむ

鳴瀧の山寺に宿りて

たくへこし風をたとへて瀧の糸に結ほゝれたる鹿の声かな

八月十一日楠見の寺よりかへるさに

薄墨の雲の一村立ちわかれ暮るるもまたで月は出にけり

年々の八月十四日夜若浦にてよめる歌の中に

玉津島清き渚にまゐりて神代のまゝの月を見てまし

十七日夜玉津島山にのぼりて

一むらの州先の松にかけわけて内外の海の月を見るかな

年々七月十五日夜湊川に遊びて（此湊川わ若山市の湊 即紀之川口なるべし）

水門川小舟の水棹さしわけてあしまにもらす月のかけかな

九月はかり実裕法師の藤代の奄をとふらひける時

とりふねは一葉とうきて磐楠の十枝のこからし浪にふくなり

七月十五日藤代の何かしの奄にて

藤代の小峽の棚田あなちにつくろひ立てぬ庵はめ安し

『歌人書簡集』

名草山の花見にゆきて

名草山ふもとの里もおほふまで咲けん花のかげぞこひしき

『柿園詠草拾遺』

卯月ばかり在田郡にて

心なくあではすきし橋の下吹風に若鮎ひれふる

五月のはじめつ方日くらしの芝といふ山より海原を見わたして（広村陶器山（男山辺）にあるはず）

波たえし沖は夕日に雨かけて湊田遠く早苗とるなり

山田原（保田村大字山田原なるべし）

してかくる山田の原のま白ゆふなびきつかへぬ賤も男もなし

零余子

いとか山つもる落葉に風ふけばそよいもが子のをひかくれたる

秋人事 丹生告門による

あて人は夏瀬の丹生に杖さすともみじをわけて櫛とるらし

湯浅の浦より船にのりて

島のさきあけはなれゆく月かけをいつの夜船の思出にせん

崎浪 あしか島・白崎に向へり

嶋の上に今日もあしかは眠れるを何さわぐらむ浪の白崎

千鳥（初句海部郡の村名今日日高郡由良町）

えのくまにかさかくれせし芦の穂の花をきそひてたつ千鳥かな

夏の頃藤井よりかへるさ鹿背山をこゆとて

いくはくのほくしさせとか郭公ししのせ山に夕さらずなく

建仁の『熊野御幸記』に見えたるさまを絵にかける中に萩原のわたり

打なびく小野の萩原風こえて鹿の背山は露はれにけり

氷室

岩代の松をためしに結ばねととけかたきむろの氷や

旅の五月雨 道成寺縁起による

旅人のふくだ養ふ風たえて日高のわたり五月雨ぞふる

日高の枝谷なるわしの川の瀧見まかりけるととき

龍田義陳雨乞のことなど語りて歌すすめければ

あらわしの雨雲はふく風はやみ岩きる瀧の音どよむなり

三月朔日 道成寺の花を見て

雨はるる大樹の花の衣笠に玉ぬきたれて夕日さすなり

四日祓戸（今日高郡名田村大字野島）と云ふ所の花を見て

沖つ風なぎにけらしも祓戸の花より花にかゝるいらゆふ

海辺に遊びて日の御岬など見わたしつゝ

釣舟の針に見えしかけもなく春日の岬くれはてにけり

（以上二首『柿園詠草拾遺』）

『歌人書簡集』

『歌人書簡集』

『歌人書簡集』

浦つつき上も富島鯉島野島か崎のさまわびにけり

『歌人書簡集』

切目山を越ゆとて大塔宮を

うちわびて越ゆるなげきの切目山晴れなん空はいつか見るべき

紅葉

切部山柳の木の間のおすもみぢかさしそへては色もそはまし

熊野紀行の中

錦をも織や出つらん麻衣人目間遠の山蔭にして

(以上『拾遺』)

田所顯周がもとにて水辺螢をよめる 『建仁御幸記』による

田辺川あせにし澁やたつぬらむ岸の芝生に螢飛ぶなり

秋津川中

立並ぶ巖が中の秋津川あく世もあらしをちかへりみむ

牟婁の津の千畳敷といふ巖を見て

牟婁の津の出湯の上の石たたみ千重さへしけり御幸まつらむ

浜木綿

水無月の日の眞盛に咲きにけり眞砂が上の浜木綿の花

(短冊)

橋杭

わたつみの宮路の通ひ中たえて巖となれる橋柱かな

古坐川の虫喰岩・一枚岩などを見て

雲間洩る秋の月影もむらさきの苔の巖に傾きにけり

那智瀧

壁たてる巖とをりて天地にとろきわたる瀧の音かな

浦

よもの浦の静けき御代に来て見ればにしきの浦にあだ浪もなし

熊野のむら山の中に大塔の森と云ふ山あり 神代よりわけのぼりし人なくいとゞ神さひたり 此山よりやゝ隔れる所々より見ゆれと さたかにそれとも定めかたきを法師か嶽といふ高山 其あたり

に天そそりたちたるを見て　その山とはしるべく人々云ひあへるをさきて戯る
大たわをいつれと問へばかたはらに立てる法師ぞ教へ顔なる

熊野川

熊野川巖の中をゆく船の隔るものはものは浮世なりけり

花の窟の方に

咲く花の窟のみしめ打はえて風たゝぬ世を祝ふ春かな

十月二日花の窟の祭すときゝ有馬村の旅宿りより

人々とともに手毎に菊鶏頭華などを携へてまうづ

注連はえて結べる菊のひまことに扇もひらく花祭りかな

鬼が窟にのぼる里人田村將軍の故事などを語るをききて

あら波の立はなれたる岩屋戸にこもりし鬼もやはれにけれ

二木島にて

二木の海人はくしげの鏡とりも見ず窓ながらこそ朝魚釣りけり

安虞の二本松は紀伊志摩二国の堺なりしなこりなり

あこ崎の二木の松を今日見ればむかしの色もさたかなりけり

楯カ崎は増基法師が楯をつきたらむが如しといへるにたかはず　いと神々しき巖なり

嶋か崎あた波ふるる巖すら君が御楯とつかへまつれり

曾根浦より船に乗りて加太浦につきてやとる　海部郡加太をおもひ出て

語り合ふ友か嶋をも見てしかな隔たる方の泊り乍らに

十月十六日巴嶽に登るとて　多宇具良といふ谷の雪の上に

假奄作らすとて大木を伐らせけるに　臥るる音山にどよみぬ

深山木のもと伐りたつと斧とれば空もととろに嵐吹くなり

夜半過る比より起き出て松ともして日本か原といふまで登らんとす

さるはそこより朝日のかけに富士の山見ゆと里人云ひ伝へけるによりてなりけれ

小笹原夜こもる雪をわけすてて不二の嶺なから日の光みむ

遠姿が峰の堂を朝とく立出て高瀬の里寺のかたはらなる自天皇の御墓といひ伝へたる

御墓を伏し拜むに 里人赤松が族の災せし 尊義王忠義王(南朝の後)などの

御上を語るをききつゝ 泊もととまらす かしこけれと菊を折りて奉るとて

君まさば八重の白菊今ひとへにははん秋もあらましきものを

本宮にやとりける夜

七越の峯の夕暮る秋の雲一なびきして月はのぼれり

湯の峯にやとれるあした雨ふりていと晴し

「瀧津瀬のあたりの雨やいかならん出湯の煙晴るる間もなし」

近露の里に寝さめして

駅^{うまやおき}長竹の小筒を吹くからに山の峽こそ声あはせけれ

九月廿一日あをと坂を雨にこゆとて

たか中の秋の別れにならふらん女坂男坂もしくれふるなり

一、諸平にわ此外に在田・日高を二度巡廻したる時によめる歌拾数首、熊野を三度巡ける時の歌三十首等をはじめ、前掲同題の歌十数首等があり、又長歌に鮎瀧の歌・檜^{ひの}薫風眞婦山の歌・登巴嶽時作歌・那賀郡鎌倉谷の雌雄の桂をみてよめる歌等あつて、何れも皆特色があり、諸平の秀歌も又郷土歌中に存する事わ、己に定評と称してよい。

一、諸平の歌わ精神の歌であり、思想の歌であり、尚古頌古の歌であり、決して自由奔放に感情を放出した歌でわなく、技巧の極致を通り越した通り越して居る歌であり、故に歴史を持つ熊野の山河わ、諸平の歌に採り入るるに打ってつけの適切さを以て居るのである。^{つ持}われわれわよく諸平の郷土歌人たる所以を検討しなければならぬ。

師家としての諸平

一、加納諸平わ當時其歌名があまりに有名だったにかゝわらず、其孝問の問人^{うた}わ師の太平に比して甚だ少なく、太平の門人一千有余人と称せらるるに比し、其一割 即ち百人内外にすぎなかつたのであるまいかと云われる。私共の思うに、若し諸平に歌を見て貰ひ直してもらいたる人を、悉く其門人と見れば、其数或は千人を下らないかも知れな

いと思われるが、諸平わ『紀伊続風土記』の纂修・『紀伊国名所圖絵』の撰修・『鯁玉集』の編集、「紀藩国孝所」の創設と、順次に相當忙しい仕事に従事して居り、其師家として立つ可き五十歳をこゆる僅に二年にして死亡して居る。而も時代わ師大平全盛、當時わ泰平の時代であり、徳川時代の文化の頂点を行く時代で、その文化が普遍して平民層に浸潤したる時代なるに比し、諸平中年期以後わ鎖国泰平の夢己に破れ、外夷辺海をうかがぶ国難時代に這入らんとして居って、人心の安定を欠き、士民ともに落ちついて孝問に身を入る人が漸く少く、志ある者わ一步進んで実践に潜思し、挺身せんとする気構へを見せかけた時である。故に假に諸平が師大平ほどの長壽を保ちたりとしても、諸平の孝問わ或わさほどひろく伝播を見なかつたかもしれないのである。

一、諸平の師家としての態度わ師大平ゆずりの親切叮嚀と、加ふるに諸平の孝問の深さが、何をたづねて行つても実にかゆい処え手の届くほどに解説を與へられて満足する、至つて親切であつて・決して骨惜しみもせず・高ぶりもせず・學者ぶりもせず教へて・厭わざる態度が一度其門に入りたる人、終生忘るる能わざる慈恩を感銘して居る。故に諸平が狂疾を發し、数年に亘りて門人との間の連絡が杜絶^{？途絶}でも、門人わ決して離散しなかつたのである。ここに諸平の人徳が思われるのである。

一、所謂師家として諸平がいかに親切であつたかわ、諸平の門人瀨見善水や室谷賀親にあてた書簡を見れば判然する事であるが、且つ諸平の室谷賀親・其の他に対する解答わ常に新見がある。決して古人の糟粕を嘗めてわ居らない。ここに師家としての頼母しさが存し、諸平の師大平に比し、出藍の譽れある事をゆるさるる次第である。

一、聡明理智わ時に冷淡に見え、時に獨断に見ゆる事がある。情熱に乏しい故に、情熱を媒介とする師弟の關係わ認められない。ここに紀州人の特色がある。諸平わ遠州の生れなれども、其性格最も紀州人的であり、獨立獨歩的である。故にそこに余り團結的な事をお互ひに欲しない傾向があつた事と思われ、柿園社中が柿園一門の人として、團結的存在を誇示せざるが故に、其門人の如きも一体どの程度の事に判断してよいのか、今日でわ確然たりがたしと云う外ないのである。

一、凡そ師家たる人わ己に一家の見をなし、悟道の境に達した人でなければならぬ。此点に於て諸平の師匠大平わ、実に偉大なる人であつたと思われる。諸平も又古孝にあつてわ之を父に享け、大平に受けて嚴平たる信仰の上に端然として坐して居り、門人をして信頼せしむるに足る事であつたと信ぜらるる。

一、今左に其言説をあげて、之等の点を例証して見よう。

其一 諸平の師大平の信念の偉大なりと思はるる事わ、彼が後藤夷臣に答ふる詞の中に見出す事が出来る。

大平が曰く

(前略)天は天・日は日・月は月・国は国・海神官は海神官・黄泉は黄泉・風雨のふりき・潮汐の満干・火のいできえ・水のわきかわき・木草の生立ち・五穀のみのり・人の生死にいたるまで盡く、神の所行にして、その古典のあるがまゝに心得て、何の足らぬ事がある可き、知れぬ事はしらずであらむと思ひ定むれば、三大考靈の御柱は、無用長物たるべし云々

私共此泰然自若たる信念に左袒するものであり、其態度に敬意を表するものである。諸平にわ師大平ほどの大信念・悟道が見出したいが、それでも尚『攘夷神奈備と心得居』と云ひ、『神に祈れ』と云ふ態度わ、古孝思想に徹したる証拠であり、其詠に

神ならば岩おしわけてかえらまし山路のくれは家ぞこひしき

などと用ひてあるのも、平素心のおく処が察せられて、頼母しいのである。

一、諸平が常に新意見を持して居った事わ其枕詞において、加茂眞淵の説を排斥して居る事によつても察せらるるが、尚例証として室谷賀親宛書簡中の左の一つを引いておこう。

(前略)夕納涼 假名の文字 濃は古くぬに用ひたり のは乃廼等多し 後世ぶりにともかくも有つけれど

古風の長歌には正すべき事にて 先便此事申上ざりし己が誤也 すみぞめの夕 是も古くは玉限又は玉極ともかけり 又玉極入の方と存候 「冠字考」「古事記伝」等の説は從ひがたし 万葉にある文字の通り認候方なり 別に考御座候 是も見おとしたる也 依而別紙直しさし上候(下畧)

又 此節も「古事記」を講じ少々親説も御座候 云々

一、諸平より室谷賀親にあてたる書簡中抄

(一) 土筆はつくくしが正しき名にて つくしは畧名と覺居候 「かな題集」にもつくくしと出したり 故萩園翁

の歌にも「若草のみとりあらそふ春の野にひとりやすけつくくしかな」と有之候 云々

(二) ししせしはすると話て かたはせしせぬはししと先大方におぼえ置候 渡ししといふ詞をわたするとは云はずやどりすると云ふ詞をやどりししとは云はず 此渡しし宿りせしにて御熟考あらまほし

(三) 扱相馬廢宮の古瓦之儀承知漸ひねり出候間別紙認差上申候

「將門記」に

爰 新皇着甲冑疾駿馬而彫自相戰于時現有天罰馬忘風飛歩人失梨壺之術新皇暗中神鏑終戰於託鹿之野獨滅豈

尤之地

と見之候「扶桑畧記」之趣も大抵同じ

一、諸平より瀬見善水にあてたる書簡抄

(一) (前略) 建曆四基葵柱は倉柱の誤と相見へ申候也 倉柱は財部・小松原境の「セキワク」之事と相見候「セキワク」は小熊の井手のくらはしら 暗かりし名もしられるかな

(二) しなたゆふ山路けはしきさとしもぞ人の心は平なりける
しなたゆうは上ったり下ったりする事にて『古事記』中嘗て相見え申し候も ぞは下に切添と見る格に御座候

第六編 加納諸平周辺の人々

加納諸平周辺の人々

一、加納諸平をめぐる人々について、若し『鯉玉集』に原稿を送った人人の悉皆を含めて円周を描けば、五畿七道、残る限なき大衆となる故に、其記事も勢ひ膨大なものとなり浩瀚なものとなる。之を今本著の目的とする所でなく、茲でわ諸平昵懇の人々のみをあげて、其畧歴並に諸平との関係を知るの便宜とする。而已

一、此意味に於ける諸平をめぐる人々わ、之を大別して三つとする事が出来る。

其一わ 諸平の先輩格で本居門について云わば、諸平が宣長の門人たりし時代、たとえば石川依平の如きわ、即ち其一人で、諸平の父甕麿の同参の列に在る底の人であり。

其二わ 大平門人で諸平とわ同門の誼ある人、伊達千廣・安田長穂・長沢伴雄の如き人人。

其三わ 即ち諸平の門人、即ち諸平の門弟の人人である。

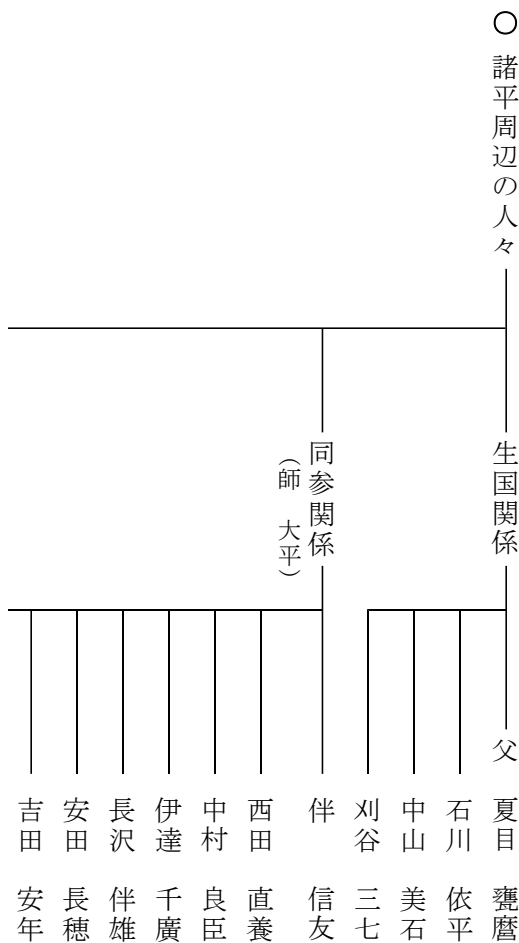
一、當時和歌山に在ってわ、古孝・国學わ本居門に學ぶべき事わ、藩公の仰渡もあつて、藩士子弟及び神官等わ大抵本居大平の門に學んで居る。大平わ随分長壽を保ちたる故に、師家として其性格の重厚と共に何人も推重して居る。宣長に師事した人で、尚大平に師事した人も百数十人に及ぶといふ。因幡の飯田秀雄の如きわ其人で、而も其一門の人々をして、大平の門に學ばしめて居る。秀男の子飯田年平の如きはじめ大平につき、大平歿後諸平について學んで居る。こう云う人もある、大抵當時學問は本居門に入り、歌わ諸平に雌黄を受くると云つた塩梅になつて居た。何分大平わ年輩から申しても師家としての貫禄十分、又本居門に入る事の名譽も考えられる。諸平わ甕麿と云う父を持つ歴々とした家筋に生れて居るが、若山でわ養子部屋住の身分、年も若いしと云う次第、それに歌よみ上手である。此歌よみ上手が却つて諸平の孝問を掩うて、諸平を歌よみにしてしまつた。然るに歌わ古學國學を一通り心得たものわ誰でもよむが、熱心者わそう沢山居ない。古孝で『古事記』の一通り・「祝詞」の一通りわ、何処の神官でも學ぶ。又藩士にしても『古今集』や『百人首』の講義などは誰でもきくと云うもの、殊に諸平わ藩の撰修などで忙しい上に、自己の撰修事業があり・歌の會があり・握を下して子弟を教ゆる暇は乏しい。此故に其弟子の数

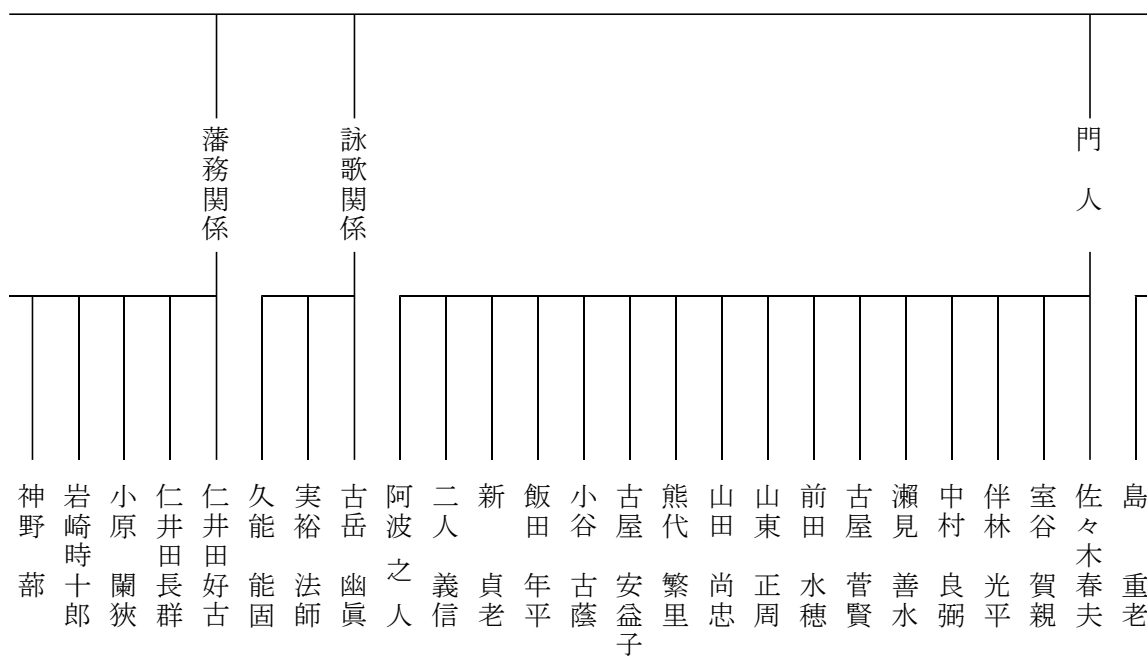
わ多からぬ、併し大平死後円遠わ居っても歌に新味わなく、學わ考証に過ぎて居る。本居の古學わ己に其流がひろ
 まったけれども、其神髓にふれて居るのわ諸平である。ここに諸平について學問せんとする人が段々出て来た。但
 し其経路わ大抵父祖が宣長なり・大平なりに學んで、其子や孫が諸平に孝ぶと云った人が中々多い。前記飯田年平
 の如き・伊丹の中村長弼の如き、又瀬見善水の如き父善隣わ元來後諸平に歌の添削をうけて居るが、本來わ大平の
 門人である。而して善水の子元武わ夭折したが、之も諸平に歌を見てもらって居るから、まづ親子三代の于係があ
 る。又伴林光平の如くに其先輩格の飯田秀雄翁の推晩によって諸平の門に入った人もある。當時諸平の學問も知る
 人は、其深さを知って居ったと云う可きである。

諸平の門人わ、紀伊本国方面から大阪方面にのび、阿波の人も入門と室谷賀親宛諸平の手紙に在り、因幡方面は師
 の大平の學問、即ち鈴屋系の孝問流行の土地柄だけに、諸平の門人も此方面に有力者が輩出して居る。

一、著名な文人わ誰でもそうであるが、諸平に若狹小浜藩の伴信友が本居門とわ、浅き縁にもかゝわらず文通して、其
 孝問上の交友わ深かつたらしい。

一、今之等の人を表示して見ると左の様な事になる。





菊池 海莊

孝問関係

黒川善右衛門

一、茲に一部の人に諸平を批判して、諸平を表面ズボラに見せて居て、其实中々伶俐に立ちまわつて居て、世渡りも上手であつた。証拠に権門富豪ばかりを撰つてつき合つて居る云うのである。なるほど熊代繁里にしても・瀬見善水にしても地方の門閥、吉田安年の如き・安田長穂の如きわ素封家、又大阪の佐々木春夫にしても室谷賀親にしても屈指の富豪である。如何にも諸平が権門富豪におもねつてゐるが如く見れば見えない事わない。然れどもかゝる見方わ諸平を誣ゆるの甚だしきものと云わねばならない。元来和歌わ俳諧と異なり、俳諧の平民的なるに反し、著しく貴族的であり大宮人的である。公郷衆的であり御殿風である。之をして遊ぶものわ、大抵豪農・紳商・郷士・御家中の歴々、神官・僧侶・医師などの上流階級人で、下層の人わ稀々である。此故に其之が指導の立場にある人わ、外見より見れば富豪・権門に附して居る如くに見ゆるのである。故に諸平に対する右の批難の如きわ、其形の上を見て、其ふところを見ざる短見と許すべきである。

紀藩主第十代治宝侯と諸平

一、紀藩第十代の藩主治宝侯わ、其位從一位にのぼつたので俗に一位様と称した。之わ国主大名で、たとひ徳川の御連枝・御三家の随一であつても、結局わ陪臣の次第故に、生前に從一位の位階にのぼる事わ例がなかつたのを、前例を破つて、治宝侯が從一位權大納言に昇叙された。その榮譽を賛美しての事である。

一、當時我国の文物制度わ泰平の余沢漸く爛熟の域に達し、所謂徳川時代文化が庶民階級に非常な勢力を以て浸潤して行つて居る時であり、官民共に風流文雅の風潮に浸り、華美文弱の風習自ら生じ来る事わ、まことに止むを得ざる所で、一代の風流殿様治宝侯も此風潮に乗じて、さまざまの文化事業を試み、ここに紀藩史上空前絶後の大風雅時代を生ずる事となつたのである。

一、而して其最も代表的な事業わ、藩の學校の整備・次に御庭焼の製造・御庭織の製造・茶道・書畫の如き・音樂・藝術の如きに至るまで頗る絢爛を極めた。又社寺に対してわ篇額等の御親筆、実わ祐筆の書に御落款の書を下し賜る

の類枚舉にいとまなく、まことに風雅此上なき御殿様で、藩の財政わ之が爲めに後年の過限がこの時代に生じた事になるであろうが、文化部面に在つてわこの一位侯ありし故に、多く後世にのこる事業が出来たのである。

一、撰修の事業としての『紀伊国續風土記』の如き、又『紀伊国名所圖繪』の如き其の撰修の事わ、皆此殿様の意圖に出た事である。故にもの此風流殿様なかりせば、紀藩三百年に何等高き文化が生まれてゐなかつたであろうし、又『紀伊国續風土記』や『紀伊國名所圖繪』の如き事業の大半も、結局出来てゐなかつたであろう。随つて又諸平の名も『鰻玉集』一本に局限されたことであろう。

一、尚又國學所の創設わ一位侯の歿後に創設されたものであり、之わ時代の流れのしからしめたものでもあろうけれども、又この一位様時代が其温床となつて出来しものと云つて毫も差問なく、又左様に解すべきである。

一、かく論じ來つて考察すると、諸平の名を不朽ならしめ、其業種を多く残さしめた事わ、時の藩侯一位様の意慾に負ふ処多しと云わねばならない。故に諸平の文孝史上にのこしたる事蹟をかたる時にわ、其之をなさしめた藩侯の風雅を閑却する事わ許されない。

一、又紀藩わ徳川幕府の御連枝御三家の随一で、吉宗公わ出でて幕府の將軍職について居り、面目上すべての点で体面上の矜持があり、孝者も集まつて來、射利に抜け目のない人々が、各種の書物出版なども経営した。之の事わ又大変に書物の上梓を容易ならしめるに効果があつた。諸平が『鰻玉集』の上梓を七編までも難なく継続出来た事わ、半面紀藩が御親藩で面目上文化を誇る故に、要求に應じてひらけた印刷製本を包含する出版業者が、此城下に幾軒も存在したなど、どれ程利便を供與する事になつたか許りがたいものがある。紀藩わ諸平をして名をなさしむるに絶好の所であつたのである。

久野丹波守純固と諸平

一、久野丹波守純固わ紀藩重臣の家柄で、田辺の安藤家・新宮の水野家に次ぐ陪臣で、勢州田丸の城主一万石加判の列であるが、純固は幼少にして父親に死別し、母親の手一つで育てられた風流殿様で、明治維新の際にわ年輩も五十幾歳、折悪しく安藤家の當主も幼主で、水野家も同然で、當時難局の紀藩を背負つて立つ可き責任ある地位におかれたが、勿論立場の困難な紀藩を背負つて、之をめでたく処理する程の政治的手腕認見などわ、藥にしたくも持合

わさぬ弱々しい貴公子であった。その反面にわ風流の道にわふかき趣味を有し、俳諧に相當に勉強されて、當時若山方面わ元藩臣松尾塙亭が文化の頃極諫致仕の後、美濃派の宗匠となりて以来、すべて美濃派であるが、兎も角宗匠の文台を授かり、町民の宗匠に對し殿様宗匠として、一般の町民百姓にも交られて、一座の俳諧をたのしまれて居る。勿論参堂の町民百姓と云つても、大抵わ苗字帶刀を許されて居る郷土地地の類で、町年寄とか庄屋とか云う地位について居る人達であり、これ等の人々がお殿様の威嚴を損じる様な振舞にわ出でなかつた事勿論であろうが、それでも兎に角庶民と一坐して風流を娛しむと云うことわ、相當碎けた平民的態度だつたと評してよい。此風流殿様が又和歌を作つて居り、その會にてわいつも諸平が召されて参加し、その都度沢山の歌をつくつて居る事、『柿園詠草』によつて知る事が出来る。

一、諸平より石川依平宛の手紙で、其文言によつて天保十二年と推定さるる一通の中に、「久野丹波守が歌道出精致され時々召され候 随分よき歌も中にわ出来て喜び居り候」とあり、又諸平の室谷賀親にあてた手紙の一通の中にも、いつの年か年は判然しないが、「拙も昨年蒙命候以来専ら引立候事にかゝり云々」とあり、「藩命を蒙りし」とあるから、多分国孝所取立の藩命かと察せられる。故に安政四年かと思われる。正月廿四日付の手紙に「去十八日湊御殿前にて具足首用の騎戰調諫有之美々しき事之旨承申候 其節国老 久野丹州候之歌

駒なへて朝日にむかふ小紫にほふすたこに春風ぞ吹く

等、其の他にもよみ申候 當国武侍中にも歌盛にて 国老達をはじめてよみ候人多く御座候」とありて、久野純固の歌道精進を報じて居る。

一、久野純固わ明治六年五十九歳で歿したとつたえられるから、若し前記諸平から石川依平の処へあつた手紙の推定の年、天保十二年頃からはじめて歌道に精進しはじめたとすると、諸平が三十五・六歳、丹波守が二十七・八歳の時代になる。元來が風雅を好める殿様であつて、其作わ素人ばなれのした優雅な作品が多く、歌の如きも十数首『鰻玉集』に選拔されて居つて、何れも中々面白い。

一、久野丹波守わ其屋敷内にも西行奄をつくり、「憐霞楼」と名づくる高館をしつらえ、又和歌浦にわ「詠確楼」と名づくる別殿をつくり、又清の舎の号を用ひて和歌の号となし、さまざまに風雅をたのしまれ、ひとり和歌のみならず句も又漢詩をもたのしみとた。故に漢詩人なども屢々伺候して、作つた歌を『柿園詠草』に拾つて見ると中々多い。

華檣君のしめ給へる圖に芳野の西行奄のかたうつしたる奄なり

二月ばかりそのあたりをすゝろありきして 二首

華檣君暁ふかくより花の宴し給ひける時 一首

この華檣の君わ即ち丹波守と云う 但し依拠文献わまだ見ない

憐霞楼の新室壽に花の宴し給へる時 一首

其ころよみて奉りける 一首

八月十五日憐霞楼にて 二首

憐霞楼賞月 五首

九月十五日清舎君月を見かてら鹿の声もきかまほしきをと消息し給へるまゝ

北山なる何かしのなりところにまかりて 二首

九月十三日憐霞楼北宴にさぶらひて 十五首

九月十三日夜半天楼にてさぶらひて 二首

八月十五日夜月 くなれハとて十三夜に宴し給へる年 憐霞楼にて一首

八月十六日清迺舎君楠見の何かしの院にて萩の宴し給へるとき 二首

半天楼の菊の宴にさぶらひて 三首

半天楼下の西行庵にて 一首

半天楼にさぶらひて雪見し時々之歌の中に雪晴 一首

清迺舎君神秀筆なる安藤君のなりところに遊び給へるときさぶらひてよめる歌の中に 八首

四月はかり清舎君のみもとにて丹後のかうの殿の出水のなりところにて歌よみける中に 五首

清迺君湯崎のいてゆあみにものし給ふとき 一首

詠鶴楼の月の宴に玉津島の釣笛音きこえければ 一首

九月十七日詠鶴楼にさぶらひて長歌及短歌 一首

清舎君安藤君の山齊神秀峯のあそび給へる時よみて奉りける歌並に短か歌 各一首

清迺舎君根来山狩獵の時の歌 八首

しめて六十七首中、内長歌二首・短歌六十一首となつて、相當の分量と云う事が出来る。この華檣君・清迺舎の君が久野丹波守であり、憐霞楼・半天楼・詠鶴楼が丹波守のお屋敷内の高樓、又わ別殿なる事についてわ、一応依拠

を要するわけであるが、之わ紀藩士の家筋の人々の説明、並に諸平の詞書の次第、又丹波守自身の詠歌、或わ諸平の善水苑の書簡、漢詩人達の詩、俳諧人の記事等、いろ／＼の書き物を綜合して自ら判断するが、大して必要の事でもないから省略に従ふ事とする。

一、丹波守の歌わ『鰻玉集』に出て居る。今其二三を抜いて見る。

む月初つかた正雄か高野山に詣てかへりけるに

立ち出し袖にしめつる春風も深の雪にささかへりけん

御位すすませ給へる御よろこびに猿樂催されて八十の殿人御あへ賜れることありころは正月の十三
日朝月夜さしわたれるに雪俄にふり出てて薨も木立も白妙なせるるをしも翁千歳など 出たるおも
しろしなと云わんも中々也 千廣

萬代の鼓の音に誘はれて雪も臺の松にちるらん

かへし

舞すさふ臺に松のなかりせば今日ふる雪の色を添へめや

春月

さくら人うたふ声さえ匂ふなりをすの戸かすむ夜半の月影

紅葉

秋山をわかるる雲のひま毎に匂ふ朝日はもみぢなりけり

憐霞楼にて

飛雁のおほひ羽もるる月影に木の川くまは秋ふけにけり

憐霞楼晚を

鷺の居る瀬たえの水は暮そめてみの毛にあまる風の色かな

憐霞楼にて人々と花見しけるととき

燈火のかけおほひつる松雲のひまなつかしき花の色かな

柿園のあるしが熊野へ行 馬のはなむけに二月ばかり

熊野浦みなぎる瀧の奥までも岩ふみならし桜かりせよ

伊勢に物しける時(二首の内一首)

(菅原朝臣久野純固)

山鳥のおろのはばたき折しめり栗のかげに春雨ぞふる

田丸の城に着て

世を休みとりはく太刀のくみの緒の心とけぬる今朝にもあるかな

郷財札と云ふをせし時

すみのほる笛の調に玉松のみとりそにほふ夕ぐれの空

長保寺にて

夏山のしけき思にこむるらん梢の蟬もなへてなくなり

紀国造俊和祭忌に

哀とは神もうけなんさくら鯛あかぬかたみに今日そさゝぐる

御即位の御よろこび申させ給ふ御使にたちて参内し侍る時心の中に思ひつゞけるころは

(一八四七年)
弘化四年九月はかり

高御倉かけあらたまる長月に千とせをかねて匂ふ菊かな

(以上『鯁玉集』五・六編収載抄)

古岳庵幽眞と諸平

一、古岳庵幽眞を諸平の諸人なりと記して居る。『諸平畧伝』を見るが思わざるの甚だしきもの。之を幽眞の歌調と比較して見れば直ちに判然する事であろう。流石に木村成蔭翁わ自ら歌人であるだけに、其著『木国歌人伝』中に於て、幽眞の歌系を不明として居り、幽眞を諸平の門人なりとわ云つて居らない。今大阪の小野利教(明治年代大阪在住歌人)撰する処の『和歌流式便覧』の中に、古岳庵幽眞の歌系を左の如くに掲げて居る。若し之がそうであるとすれば、幽眞わ歌を馬場信意にうけた事になる。

○馬場派 馬場信武——信意——僧幽眞

私わ未熟にして、未だこの馬場派なる歌系について多く知る所なく、又古岳庵幽眞わ紀伊国海草郡加茂郷の人とあるが、俗姓が如何の家のなるかも十分調査していない始末で、全人の伝を記すに不十分であり、後進の研究に任せ

る外わない。

一、唯古岳庵わ紀の川の中程、藤崎の風光明媚の所に構へられた幽眞の住庵であり、幽眞が眞言宗古義派、即高野山の僧なりし事をきくばかりであり、全人に『歌集空谷伝声集』三卷がある。之わ『山彦集』とよぶらしく、小浦広名の序文中に見ゆる。幽眞わ行澄した風流僧であつたと見えて、藤崎に「古岳庵」を構え、之に「古岳庵」又は『挹翠琴房の記』をつくつて居る。『南紀歌人伝』によると、此庵わ天保十年頃^{（一八三九年頃）}に作つたとあるから、幽眞二十六・七の時の事になる。若き頃より風雅の僧だつたと見ゆる。又琴が好きで常に琴を携えて天下を漫遊したとある。この『空谷伝声集』についても、當時の歌人数十人の詠と、詩人数人の詠を附載してをって、大半を網羅して居る処を見れば、足跡至らざる処なしと云う可きである。而して到る処の文人墨客をたづねて、幽居十興の歌を詠ませたと見えて、諸家の歌稿中に散見する。尚「古岳庵」についてわ、諸平の記の外に、森田節斎の『古岳庵記』がある由。

一、幽眞の歌わ淡々水の如き歌で、少しもあくがなく全くあくぬけのして居る所、行ひすました僧の詠なるを思わしめる。由来僧家の詩歌わ総体に覇氣に乏しく、何処かとなく弱々しい感じが多いものなるが、就中幽眞の歌に於て、其の然るを見るのである。其詠が格別取立ててどうと云う事の歌ひぶりで、格別異色あるわけでなく、異色と云わば其一貫した弱々しい淡々ぶりであるが、幽眞自身の行動が実に脱俗風雅の趣に富んで居る。故に又捨てがたく、諸平との関係わ、諸平が『挹翠琴房記』を記して居ると、其詠を『鰻玉集』に撰入して居るだけの事かと思わるるも、敢えて諸平周辺の人人の中の一人に加えたのである。

一、左に『空谷伝声集』から幽眞の歌、数首をぬいて見よう。

述懐

こころより外には山もなかりけり何をもとめて家をいてけむ

無(常)

はかなしと人のうへのみおもふ哉おなし葉末の露の身にして

母妙現尼

春きぬと梅は咲けども故郷の垣根は寒き雪の夕暮れ

一、本居大平の門人一千有余人の中にあつて、最も傑出して其名高き人を求むれば、紀藩にあつてわ加納諸平の外に伊達千廣・長沢伴雄・西田惟恒・塩路有嗣等を数ゆるのみである。伊達千廣わ諸平が石川依平に宛てた手紙の中に、千廣わ律令家にて歌わ諸平が見て居るが、中々の顛才にて他わ遠く及ぶ所にあらずと推服して居り、千廣も又性来利かぬ氣の精悍無比の人で、容易に人に許さぬ剛復の人であつたが、歌に放てわよく師大平の説にきき、又特に諸平にわ及ばざる事を知つて、之に推服し其説をきいて居るのである。この兩人わ藩に在つて地位身分にわ余程の差があつたが、ひとしく藤垣内門人として・文人としてわ全く肝胆相照し、好箇無二の歌敵であり・詞友であつたと信ぜらるのである。此故に諸平の研究中に千廣を取あぐる事わ興ふかく、又千廣を閑却して諸平を語る事わ、甚だその彩りを欠く事になるのである。

一、伊達千廣わ紀藩の社寺奉行及び勘定奉行として、藩政の枢機に參與してゐる故に、其中年わ藩臣として輝しい存在であつた。其後藩臣間の勢力争の犠牲となつて、田辺に塾居十年に及ぶと云ふ波瀾を経て、其人生觀も確立し、畏敬すべき悟道達觀の人格者となり、又其子陸奥宗光及義子龍夫共に權勢を得るに至る迄、相當長壽を保つて居り、晩年悠々の生活又一に精彩を残して居る次第である。故に伊達千廣は純粹の文人としての取扱を受くるべきものでわなく、寧ろ機略縱横の政治家として評論さるべく、又塾居十年佛典に親しみて之に通曉し、坐禪悟道の妙所を体得した居士でもあつた次第で、禪道の人としても又存在を認めらるべきであるが、而も文人として尚輝かしい存在なる事を思へば、文孝の生命の永遠なる事を知るに十分である。

一、千廣についてわ、幸いに其歌文集が沢山に残存して居つて、之を知るに好都合である。今之等の歌文集を通じて知りうる事わ、其文才の顛敏實に諸平に伯仲して居り、假に諸平に一目の長ありとするも、其差幾何もなしと思わるる事であり、其の晩年の作になる『龍神出湯日記』、又わ『三つの山ぶみ』などに記された文章及詠歌わ、流石に朗々誦するに足るものがある。私共が紀藩歌人中に在つて、才氣喚発歌人を求めるに、加納諸平と伊達千廣と瀬見善水の三人であると信じる。其余の人々の詠わ如何に見ても、多くの羸弱さを包藏して居る事を思わしむるが、唯千廣の歌わ相當にはり切つてゐると評しうる。又善水わ元来才思豊麗なる人なる上に、はじめ諸平の中年以後に其教をうけ、諸平歿後千廣に教を受けて居り、兩人の才藻によつて啓発されて、ピンと張り切つた理智的な歌をよみ、諸平及千廣の衣鉢をもつともよくつたえてゐる、と云ひうると信ずる次第である。千廣の詠歌態度も諸平と同じく、其頗る理智的な点に於て、頗る諸平と近似性を持つて居る。これわ他の人々との間に特異を示すものであると云

って差閤なしと信ずる。

一、千廣と諸平わかく相ゆるした間柄であるといつてよく、其年輩も千廣は僅に三つ四つ年上なるにすぎず、思想もともとに、本居の古學の神髓に造詣してゐる事にかわりなく、當時の尊皇派に属する兩人、諸平の歌會にわ必ず出席して、諸平等の説をきいてをり、又自ら判者となつて歌合の批判などもして居る。唯諸平わ『鰻玉集』を撰して以来、自己の詠歌を人に見せて、其批正を受くると云ふ事などわ、先づたえて之なかりしと思わるるに反し、千廣わ紀藩の詞友わ勿論、千種・有功卿などの批正も受け、後にわ三條公より「和歌宿老」の称詞さえいたゞいて居る次第で、晩年「歌憚る一如」の意見を立てて、大に之を鼓吹して居る等、決して平凡な歌人わわなく、而も自ら尻の穴の小さい流派などにこだわつて居らない、闊達明朗なる存在を示してゐるのである。

一、千廣が諸平の根来寺紀行文『山菅』に序文を記している事わ、即ち諸平との交情を見るに十分である。諸平は潔癖家で、同門の長沢伴雄とわ後に相反目して、互に離反したらしいが、千廣と諸平とわ終生そうした葛藤わなかつたものと思われるのである。但し同門であり・同臣であり、その禄高に・權力に格段の差わあつても、諸平としてわ久野丹波守に持つて居るような特別な敬意を、千廣に拂わねばならない程の事わなかつたらしく思われるのである。

一、千廣の畧伝記等わ『伊達自得全集』や、私の手で翻刻した『三つの山ぶみ』又わ拙著『紀伊郷土文献拾遺』等について見れば畧判明するし、伝記を記す事わ本稿の目的でわないので畧するが、千廣わ紀藩勤皇錚々の士であり、荊刀大臣陸奥宗光の父として、其存在が記憶せられる人である。又其筆蹟は実に特色ある筆で、何人も追隨をゆるさず、大阪の門人井上景明のみ之を眞似て殆んど得て居る事、景明の証明(署名)ある短冊について、之を知る事が出来る。左に千廣の晩年の詠をぬいおくことにする。

千曳の山

動きなきわが君が世のためしにわ千曳の山ぞひくべかりける

果無山

空遠く靡きなびきてはてなしの靡のはても峯の白雲

那智三の瀧

風ならぜ間なく木草の揺ぐなる轟きおつる瀧のしぶきに

那智二の瀧

みなそそぐ溪の床磐ふみとめて瀧より奥の瀧を見るかな

那智の瀧

岩裂けてまろびが落つときくばかり空にとどろく瀧の音かな

さくら花もとのねざしをたづねづば唯深山木と見てやすぐらん

吹きはらへ山川清き秋の風こころの塵のあともなきまで

天雲の向伏すをせりても海ははてなきものにぞありける

又も来て都の空に旅寝せよ中山里の月清くとも

御心に安の川原に神集ひ守りますらん国は動かじ

浜木綿

うら清くさくや此花御熊野の神の御幣とさくや此の花

一、伊達千廣についてわ尚多く記すべき事を有するも、其詳細わ之を『紀藩和歌史』にゆずり、茲にわたゞ諸平との干係の一端を記すにとどめた。

長沢伴雄と諸平

一、長沢伴雄と諸平との間わ、はじめ同門として仲善く、中年以後に到つて仲が善くなくなり、互に相離反して行つて居る事、諸平の室谷賀親宛て手紙の中で、「伴雄わ近頃よりつかづ」とか、鹿ヶ谷めきたる事に参加して居て遂に御召取になつたとか、頗に伴雄の事をあしざまに申して居つて、ききたくない文言によつて察せらるるのであるが、文人歌人などわ生れつき偏狭な性格の持ち主が多く、諸平にして見れば當時有名になり、頗る人氣のあつた『鰻玉集』に対し、伴雄が京都にあつて『鴨川集』を撰した。全じ藩・全じ門から邪魔者が出た感事で、一時其袴持にケチをつけられた気分も往來したのであるう。殊に作歌の技倆に到つてわ遙に諸平にわ及ばず、内遠や熊代繁里の如くにコツコツと考証に没頭する方、逕に其性格に適してゐるであらうと思われる。むしろ其性格の上に因循を感じる伴雄が『和歌作例集』までつくり、又別に『詠史歌集』も撰し、身にわ紀藩生えぬきの情愴があり、一位老公の御覽えも極めてめでたく、其御内命を蒙つて京都に上つて勉強し取調に従つて居る。其余暇に此仕事であるから、

諸平^{？伴雄}

諸平に見れば外来人の諸平が、着々其顛才を發揮して當時和歌に在ってわ、まづ宇内屈指のよみ手と評判されてわ聊か面白くない。諸平に負けてたまるか、こう云った感情の往來しないとわ限らない。そこえゆく千廣は役者が一枚上であるが、伴雄わくそまじめな性格の持ち主で元来才物でわない。元々諸平とわ相容れがたき性格の持ち主である。ここに何等かの感情のゆき違ひから、遂に相離反するものと思われるが、諸平にも何を小癪なと云う感情、いわば嫉妬の情がなかったとわ云へまいと思われ、其疎隔わ伴雄が『鴨川集』・『詠史歌集』・『和歌作例集』等を撰修した事に、多分の原因が存在して居る事と思われるのである。

此諸平がかったの同門の友を疎隔したと云う事わ、現代われわれにとってわ格別の事でわなく、偶々諸平の如き天才歌人の生活を見る一つの観点をなすに過ぎざる事であり、その意味に於てわ興味ある一点なりと思うのである。故に唯之を記しておくだけである。

一、伴雄わ文化五年^{（1808年）}の生まれで、諸平よりわ二つ年下であり、當時藩士の家の子として恥かしからぬ文武両道の教育を受けて居り、特に武道軍卒の教育を多分に受けて居り、文の方も大平に學ぶ以前に富樫広蔭や、後鈴之屋に學んで

居り、後大平に學んで大成の域に達したものと見る事が出来、泰平の余沢武臣としてよりも、文事を持つて一位老公に用いられ、一位老公の内命により、京都の公卿衆から有職故実などを伝えられて居る。故に伴雄わ一位老公に重用されたと云ふ可く、此結果一位老公逝去に伴う藩臣の勢力の消長の犠牲となつて、遂に安政六年^{（1859年）}五十二歳を以て牢死された次第で、終を全くしなかつた所、一抹の哀感を伴わざるを得ない。

一、伴雄の作歌技術わ諸平にわ及ばない、又其文章の妙に至つても全じである。私共の見を以てすれば、諸平につぐものわ千廣であると信じる。千廣につぐものわ善水。伴雄の作歌及文章共に平凡他奇なく、清新の味に乏しいと感じ得るのである。故に歌人として到底諸平の敵でなく、文人として文章家としてわ、諸平・千廣の右に出づる事わ出来ないと信ぜらるる。又藩に於る仕事としても諸平の『続風土記』纂修員として、又『紀伊国名所圖繪』撰修の業績に比し、伴雄の『冠位位色便覧』・『官位相當便覧』・『兵器圖考証』貳百廿卷とわ、相拮抗すべき貴重な仕事に相違なかつたが、一方わ仕事の難易にもよるが、免も免^{（角）}まとまつたのに対し、之わ其有識二卷の他『兵器圖考証』のまとまるに至らざりし事業だけに、比較にならないのである。

一、唯其私撰の業たる『鴨川集』五編十卷・『詠史歌集』二卷・『和歌作列集』の上梓事業わ、伴雄の藤垣内門人たる事をはづかしめない事業で、例い一籌^{（論）}わ輪すとしても、諸平の『鰻玉集』七編十四卷の撰歌集に匹敵する事業であると云わねばならない。『鴨川集』わ「太郎集」より「五郎集」まで五編十卷、嘉永元年^{（1848年）}その「太郎集」を上梓、西

(一四四八)五三年

末三四五七と嘉永年間に上梓されて居て、『鰻玉集』に後るる事拾数年、『鰻玉集』六七編上梓の前後となる。此の『鴨川集』わ『鰻玉集』に同型の類題集であるが、其の撰歌中の歌人の顔ぶれの中に若干の差が見え、京都の公卿衆や鈴之屋系以外の人々を見る事が格別である外、まづ同類型の撰歌集と見て差問えない。

一、伴雄の遺著『絡石の落葉』二冊わ伴雄の遺裔の手で上梓されて居る。之わ伴雄の歌文集である故に、伴雄の歌文を知るに便利である。

国のためつくす心の一筋はまもる弓矢の神ぞしるべき

なり出でし神代ぞためし始ありて終なきこそ世の姿なれ

すわといはば神にまかせむ薄氷ふみわたるとも我君のため

天地のわかれしときにわかれける君と臣との道はうごかじ

一、其余わ拙著『紀藩和歌史』にゆずり省略に従う。

安田長穂と諸平

一、安田長穂わ『鰻玉集』第一編に其序文を書いて居り、諸平の『鰻玉集』上梓に最初の資を貢いだものと云われ、諸平とわ同じ大平門で、即ち同門の誼もあり、又諸平わ長穂の住んで居た雑賀屋町の近所に住んで居って、常に相往來して居た。云わば近所のつきあいの間柄であつた故に、或年安田長穂の家が失火によつて焼失した時にわ、着のみの着の儘で安田一家が諸平の家に避難した事が、當時諸平より瀬見善水に宛てた書簡の中に報ぜられて居る。故に安田長穂わ諸平にとつてわ、忘るる事の出来ない雅俗両面の友人と申すべきである。

一、安田長穂は熊野本宮の梅之坊内記の二男で、寛政八年^(一七九六年)に生れて後に安田家の養子になつたと云う。本宮の梅之坊とあるから、之わ本宮の神職の家筋であつたのであらう。長穂が藤垣内の門に入つて古學國學を孝んだのも、まことに争われぬ其氏と育の影響による所が多かつた精であらう。此安田家は廻漕問屋で回船業だつたとも云われ、又金貸しをしたとも云われる。察する所熊野方面の出身者で、今日で云わば海運業で巨富をなしたもののか。但し其屋号を雑賀屋と云うから、雑賀崎方面出身なるか今知るに難い。廻船業なれば爲替の取組など自然金貸業にも縁がある。何れにしても今日雑賀屋町の名が残つて居る程の事で、當時の豪奢が偲ばれる。當時其住宅わもと南龍公の御下屋

敷であつたのを拝領したものであつたと云われ、其一町内わ皆雜賀屋の貸屋であつたとも云われ、実に豊富な骨董道具の所藏家として其名高く、町人なりと雖も苗字帶刀わ勿論・引馬御免とあつて、旅中乗馬帶同する事を許されて居り、當主長穂は藩主一位公から被布を拝領したりして、藩主の御覺もめでたかつたと云う。かくして長穂わ勿論其一家中わ古學國學の香高き人々で、其妻さとの如きも藤垣内問人中に名を列して居り、其子御年(長男)・千顚(二男)・穂末(三男)ともに和歌をよくした。故に安田一家は全く歌人の家と云う可く、長穂わ野際白雪に學んで、南画もよくしたと云う、全く風流な素封家の旦那様であつたと云う可きである。長穂は安政三年二月二十七日卒し、塩屋光明寺に葬つた。生前墓石を予修して佐伯長穂の墓と彫りつけておいたと云う。享年六十一、諸平よりわ十五・六歳の年上であり、大平門に在つてわ先輩であるが、歌わ諸平の雌黄を受けて居るけれども、長穂の歌學問わ決して物特^持方の旦那様の素人藝と云う程度のものでわなく、全く素人ばなれ玄人の域に達して居るものと評すべく、決して諸平の友人として其名を恥かしむるものでわない。

一、長穂と諸平との交友を知るに足る歌の増答^{増答}が『柿園詠草拾遺』に出て居る。長穂の文覺についての一首わ、まことに興ふかい逸話が伝えられて居る。因みに記す、長穂わ通称長兵衛浜木綿屋と称した。

一、それは西行法師の影前會についてである。當時歌人の仲間でわ其年中行事の一つとして、西行法師の影前會なども行つたものと見ゆる。嘉永五年^(一八五二年)の二月十六日に安田長穂の家に差問ゆる事があつて、西行法師の影前會わ今宵諸平の家でやつて貰ひたいと、長穂の方から西行法師の絵像の掛軸を諸平の方へ持たしてよろしたについて、諸平と長穂が増答^{増答}の歌を取交してゐる。其時丁度諸平が西行法師の

つくりおきし梅の衾に驚わ身にしむ花の香やうつすらん

の歌を思い起し、ことばわなくて返事にかゆる歌として

何はかし惜む宿にわあらねども梅の衾のなきぞかなしき
と書きてやるに、之に對し長穂の方より又歌

思へ君梅の衾の香にしまば人やとがめん心づくしを

之に對し諸平の方より又歌

梅がかおりはいとふ浮世の塵ならじ心づくしも折にこそよれ
かくて其宵西行法師の像をかけ、山吹の花蕾なるを生けて又歌

駒とめて見しよの人もしのびつる君にさゝげん山吹の花

(諸平)

山吹の花の露そふ宿なればここにも居てと思ずや君

(長穂)

尚當座の歌なぞを手向けてわかれ、明くる日其の掛軸を返す折りに又歌

根にかえる花もふたたび咲きぬべしさしそう月の昨日ぞまつ

(諸平)

さしそはぬ月こそ物をおもわすれ又しのばしき花のもとかな

(長穂)

此贈答わ此年二月に閏があり、二つ重ねて二月がある故に、又閏の月にもやってわどうかと、諸平が誘ひかけたのに対し、長穂はそれもありくどくて、面白くないであろうと答えた意味である。

一、『鰻玉集』第七編に撰入の長穂の文覺上人の詠わ

大瀧の氷柱が中の那智ごもり神も驚く祈ならまし

の一首ではじめ、長穂の稿わ

大瀧のつららの中の那智ごもりきく人さえに身は氷りけり

と下の句をおいて居たが、折りなし諸平が訪ねて見えたので、之を諸平に示した処、諸平之を兩三回口づさみて、さて云うに此一首上の句余りに調子が高いが、那智の瀧と云い・文覺上人と云ひ、かくあるが本統？本當であろう。それに引きかへ下の句・上の句の強きにまけてよわすぎる、今少し何とかならまほし。試に云わば「神も驚く祈ならまし」などあるべきかと語りし由。之にわ長穂も悉く感服したと云うのである。此話わ中村秋香の『秋香歌話』に出てゐるとて、『木国歌人伝』に収むる所を援用したのであり、誠に興ふかき事である。

一、長穂の歌わ『鰻玉集』・『三熊野集』・『清渚集』・其他の撰集に出て居る。

吉田安年と諸平

一、吉田安年も又藤垣内の同門として、諸平周辺の一人として記録すべき人であると云つてよい。諸平の父龜麿遊歴の際にも、安年の家に杖を留めて碁を打ちなどして居り、又安年わ書画骨董がすきで、佳品があれば世話してくれとの話である旨、郷里えの書簡中に記して居る。又諸平が若年にして郷里へ皈省した際に、採霞吉田勇吉と云う男を同伴して居るが、之わ多分安年の息子と推定される。又諸平の室谷賀親宛の手紙中に、吉田安年わ小生三十年來の友人なる旨を記し、其病中を安年の家にまで見舞に出掛けて居る程で、諸平が相當深く交つた人の一人に見る可き

であろう。尤も諸平よりわ年も上であり、藤垣内の門人としてわ諸平よりも先輩であつた事と思われる。又安田長穂わ吉田安年らと同じく、殊に是わ地方の豪農であつて、當時の国産蠟燭の産地朽蠟で紳商でもあつた。然しタダの旦那様でわなく国語學に興味を有し、ことばの事を研究して『ことばの濔標』十五卷を著したと云う。而も此書わ「和訓栞」・「語林類葉」・「雜言集覽」の三書に「国儒伝」の書五百余部を参照し、助手をおきて書寫を勵みつゝ十五年余の日子を費して成つたと云う。但し上梓わしなかつたと見え、刊本わ見當たらぬ。福羽美靜の筆になる『吉田安年伝』が『木国歌人伝』に収められて居るが、『濔標』を紀伊国より借用し云々と書いてある。安年わ歌も上手であり書も見事に書いた。師の大平の撰した『紀伊国名所百首』の跋文わ、安年の自稿自筆であると云う。ついで見るに、まことにやさしい筆蹟と云ふ可く、なるほど書も上手と云つて差問えがない。其詠歌わ『八十浦の玉集』・『鰻玉集』・『鴨川集』などに出てゐる。

一、左に『紀伊国名所百首』の跋文を引いておく。

朝もよし此紀伊の国はしも遠つ世わ更にもいはず御代／＼のすめら大君の大みゆき又直人の道行ふりの道のゆきかひあまたたひかさなりて三熊野の浦の濱木綿百重にもあまりぬべしさればおのつからにゆえよししるく事のあと正しきところ／＼もいと多かりここに我藤垣内翁そのしるく正しき名ところをよめる古歌の中にも高野山その名高く和歌の浦なみしらへおたやかなる歌ともをかの百重なす百歌に数まへさためて「紀伊国名所百首」となんなつて給ひたりけりかくて和のともとち語らひ合せて受誦この集をしもさておかんわあだらしとて今の本居大人にも乞ねぎ申てかくすり卷とはなしつるになむ

(一八四八年)
嘉永元年十二月

よし田の安年

夜落葉

『鴨川集』

紅葉ばは夢路をさへや埋むらむまなく散る夜の寢覺かちなる

山家

『鰻玉集』

世の中よ月を友なる山すみもとすれはかかる峰の浮雲

一、安年、通称安右衛門 有田郡宮原駅南村の人。寛政貳年生れ、安政二年十月歿六十六 滝川原淨念寺に葬ると云う。
安年囲碁につよく、二段の腕前なりしと云う。安年も資産のあるに任せて、時々わ中々豪遊をやつたらしい。

岩瀬廣隆と諸平

一、岩瀬廣隆わ諸平の『紀伊国名勝圖繪』に挿絵を書いた画家であり、『紀伊国名勝圖繪』の撰集にあたつてわ、諸平と共に有田・日高を巡村して圖繪を作製して居る。廣隆が名所圖繪御用についてわ、京都の町医師小野彦三郎とあるから、之が本統の姓名だったかと思われるが、もと浮世繪系統に属する風俗画に得意で、菱川清春と称し、二・三の書物の挿絵を描いてみると云う。はじめて和歌山に来つたのわ天保四年（一八三三年）の頃であつたとも伝えられ、若山に來つて専ら小野廣隆と称したと云う。晩年にわ沙門鉄翁に私淑し南画をも書いたようであるが、其得意わ即ち『名所圖繪』の時代、即ち廣隆四十前後の頃の作品で、浮世繪の筆致で土佐風を加味した風俗画に其佳品を見るので、南画はとても氣品が劣り、その風俗画に及ばざる事が遠い。

一、書物の挿画わ中々むづかしいもので、即ち木版の版下となるもので、あまり筆致の多いのわ出来上がりがくどくて妙味がなく、省略の妙が中々物を云う。『紀伊国名所圖繪』後編が精彩をはなつわ、諸平が文と調査わ勿論の事であるが、この廣隆の画も中々ものを云つて居る次第である。故その名譽の一端わ廣隆にも販す可きである。之を初編以下の中村中和俊辺玉壹等に比し、遙かに巧者な筆致と申して挿問がない。

一、廣隆わ病弱であり・我儘ものであり、町絵師としての風格を備えて居たらしい事わ、諸平の瀬見善水宛の書簡で察せられるが、生前別に己に一位老公の御用を蒙りて、揮毫料なども可なり高かつたらしい事わ、諸平の長阪九太夫宛の手紙の中に、金五十足でわ横物の外かかず、大幅わ金二百足以上でなければ書かなかつたと云う。尤も之わ嘘か本當か、酒好きで酒一升で原谷の村圖を書いたとも傳えられてゐる。今日でわ南画の野呂介石などよりも、廣隆の方が遙かに人氣があるのわ、南画の型にはまつた絵が時好に遠ざかつた爲めであろう。廣隆の絵一幅三千円乃至五千円と云えば、画技の價値も又相當な評價と云える。

一、廣隆が和歌を作つて居て、それが『鰻玉集』に出て居るのわ一寸面白い。

朝ぼらけ景色にかゝる淡雪もきゆるばかりの鶯のこゑ
正しく諸平の感化であろう。

（『鰻玉』六編 岩瀬廣隆）

一、廣隆についてわ、鈴木雪溪著『岩瀬廣隆傳』あり、ついて其詳を知るべく、茲にわ省畧する。

菊池海莊と諸平

一、菊池海莊は明治維新前後紀藩に於ける輝かしい存在なる事わ、凡そ知る人わ知つて居る。海莊は性高邁剛毅、夙に詩文を大窪詩仏に孝びて、當時我國の孝者の間を風靡した宗孝思想の神髓に徹し、大義名分を弁ゆる事深く、家系が九州勤皇黨として輝かしい存在なる菊池武時の末裔たる事に深き感懷を有し、南朝三代の事に思をよする事深く、悲憤慷慨の士であり、家業を顧みず其巨富を以て天下の志士墨客と交遊した。此故に當時の文人墨客・志士・仁人、苟くも志ある著名の士、紀州に菊池海莊ある事を知らざるなく必ず来り訪うた。海莊又之等の人の来訪をよろこび迎へた。之が爲に海莊は遂に其巨富を蕩盡し去つた次第であるが、其思想行動は燦として後世の人の心を指導し、長く我國の国体思想を涵養して居る。かかる次第で當時の文人墨客にして、著名なる人足を京阪に印する場合、必ず来り訪うを例としたるが故に、之が交友は天下に亘つて多かつた一面、海莊は又地方文化の中心的存在として、地方の文化向上に非常の努力をしめし、後進を導くに親切であつた。故に海莊の門に入つて孝問の教を乞う者甚だ少なくわなかつた。故に苟且も當時此地方の文事を語る者は、海莊の存在を無視する事わない。

一、諸平と海莊との交渉は、諸平が『紀伊続風土記』纂修の一員としての公命を蒙りて地方巡在の時、或わ又『紀伊国名勝圖繪』後編纂集の藩命をうけて、其資料蒐集調査の爲めに巡在して海草を栖原の居に訪ねた事に始まると見てよい。而もそれ以外に多くの交渉は見出されない。菊池海莊は當時地方にかくれなき豪家であり、其家格は極めて高いが、藩でわ一個の地士たるにすぎず、其孝問は漢學であり、諸平は『紀伊続風土記』纂修員としての藩命を蒙る迄は、奥医師何人扶持かの藩士の家の養子で、部屋住みの身であり、国孝歌人の間にわ稍その存在は認められたとしても、世間又其れ以外にわ恐らく存在を認められなかつたに違ひなく、この人の間に他に交渉を持つべき条件もないわけである。

一、この唯わづかなる関係を有するにすぎざる両者の関係につき、諸平研究の一項目として海莊をあぐる所爲は、諸平の記文が海草の研究資料として尊重さる可き事があるからの事で、之は亦翻つて諸平研究の精彩をそゆる所以でもあるからである。

一、極めて僅かなる両者の交渉であり乍ら、それが非常に大きく見通すべからざる資料を、吾々の前に展開して居ると

なす其根元わ、即ちこの二人に共通する勤皇思想の発露であると云いうるのである。

明治維新前後に在って維新の大業を成遂せしめた、その原動力になった勤皇思想わ、先づ形に於て南朝三代の事を悲憤し・慷慨し、北立を擁立したる足利尊氏等、逆賊なりと絡印づけてしまった。この孤城落日の往年の南朝の歴史を追慕し、随つて又吉野山の櫻花を賛美する事によつて、又更に勤皇思想が培われ・養われ、遂に茲を舞台として天誅組の義舉なども行わるるに至つたのであつて、此辺の微妙なる消息わ、潜思熟考するに従うて、その不可思議なる魅力の伝播を、如何とも出来がたいのを感じるのである。

- 一、今諸平の『柿園詠草拾遺』に収載せられたる所を見ると、「菊池海莊が家に植えたる吉野の櫻の歌」があるが、其数首の歌わ兎も角として、諸平がこの吉野の櫻に興を催して詠んで居る歌が、又実に極めてよく諸平自身を語り、菊池海莊を語つて居るものと云わなければならない。此歌わ諸平の歌としてわ必ずしも傑作でないかも知れない、けれども留心の作なる事わ疑われない。

菊池海莊が家にうゑたる吉野桜の歌

菊池のやわがせのもとに書見つゝわがをるときし陶^{すゐ}つ器^{まで}を右手にささげてわがせこが我に語らくこれのこの植木の器に露かかる櫻の葉わさゝやけきこの葉なれども春山の茂みをわけて八重山の岩が根つたひ塔尾の御基^{ごき}おがむと三吉野にわがゆきし時玉殿の御垣が下に生れ出たる種にしあればうつくしみなつかしみて苔ながら衣に包み来土かひて移し植えつつ生さきを待つとし云へばまかなしみわが思へらく名細き祖の名おひて墨縄のたた一筋にみよし野を仰ぎかしこみ歌おもひ事偲びする真心のあつき心ゆ心とく目にわつきけんあわれくわが葉櫻^の年^{ねん}のはに枝さしそひて沼名川の底にしづめけるしら玉のゆらぐが如く久方の月の落水をちかへりそそくがごとく春毎に花咲きををりこのもとにうから集えて遠つ祖の功たたへて三吉野の花と萬代に見つつまもらん家したうとし

- 一、菊池海莊が南朝を思慕し・悲嘆し・悲憤慷慨した事わ、其遺つて居る名詩によつて察せられるが、延元陵下の櫻の小木を遙かに吾庭に移植してまで、其思慕を新にし日夜にしたと云う事わ、諸平の此の歌によつて明にされた所であつて、他の文献にわ見當らない。故に此一首わ海莊^{かいせう}の記伝を語るものにとつてわ無二の資料である。

- 一、諸平わ歌道の天才であるから、様々に歌も作つたであらうと思われるが、長短歌の外に作わ残つて居ない。中に施頭歌が一首、「之が又菊池保定がもとへ五月ばかり」と題するもの、『柿園詠草拾遺』に収められて居る。之も又珍しい事である。

菊池保定がもとへ五月はかり

雨さむきことしの夏かこぞの夏こそ時鳥まつのはやまのかせもまちしか市中わあなかしかましこそその夏こそ池水にひれきる鯉の音もききしかくりかへす書よつかはしこそその夏こそ夕浪の網引きによせしか

一、此外に諸平が海莊を訪うた際の歌五首、『柿園詠草拾遺』に出て居る。其歌が又海莊の家の模様を伝えて、海莊資料を提供して居る。誠に得がたい資料である。

五月ばかり有田郡栖原村の菊池保定が家を訪う客居まかうどゐにかりそめなる門ありて

松声竹色驗声色時更有声色 鳥啼花咲忘文章処則是文章

と云ふ句をふたつに分ちて左右の柱にかけたり門より此方に池を湛へて

山水の下樋もて通はせ岩にふる音最訝やかなり

里人のまちよろこべる雨のうちにひとり園生のみどりをぞ見る

此歌ハ雨乞すとののしれるころふりきぬればよめり

朝なく庭たちならし見る毎にしらぬ木草の数まさりゆく

蚊遣たく宿にわからじ山かげの岩もる水の夜半の響を

葦蟹の夕ありきする苔の庭払はぬ露にさみだれぞ降る

蓬萊使者墓

鶴乃墓なりこの家のうしろの畠中に在りその事わ主人の詩集に悉しく見えたり

あがた見に昔の人の来ましかば常世の使馳せ皈らまし

一、諸平が物を見事に感ずる姿わ頗る異常である。この蓬萊使者墓の如き事に興を感じ、それらを材題にして歌を詠むと云う事から、受くるわれくの諸平観わ、是即ち雅致雅境と云う事に在って存するものと信ずる。雅を求めて俗を拝する、この考を嚴格に実行してゆくきびしい実践が境に従い、材に応じ間断なく行われて居るのだと見度いのである。従つて雅と俗との区別を截然として雅致雅境を追求してゆく、之が諸平の態度である。此の海莊の家で見たままを詠んだ五首の如きわ、諸平の歌としてわ凡作であらうが、併し珍しく無技巧な歌であるとも云いうるであらう。

西田直養・伴信友 其他と諸平

一、西田直養わ京都に住したる国孝者で大平門人、弘化三年春諸平が京都旅行の際わ、同人が主催で送別の歌会を催して居る事、『柿園詠草』の詞書に見えて居る故に、諸平が直養と交友たりし事が知られる。

一、諸平が若狭小浜藩の篤孝者伴信友と交友ふかく、一度わ面談してつくる事なき国孝上の談話を交歓して居る事が、諸平より石川依平宛の手紙の中に記されて居り、紀藩内に残存して居る古文獻たる『丹生告門』、又わ『色川文書』などにつき、兩人の間に文書が往復され、互に研究されて居る事実が、信友の書簡について世に発表された事があつたと記憶する。其交友の深かりし事が察せらるる。信友わ藤垣内の門人である。鈴之屋歿後の門人だと自ら称して居たらしい。

一、此外に諸平が交友ありし人を拾つて見ると

松田 直愛	宮部 美臣	中村 良臣	島 重老	松尾 俊平	山内 敏樹	岩崎 美隆
羽根田良裕	龍田 義陳	大塚 寛制	福田 和夫	井手 正紹	中村 眞貫	大野 守光
山松 俊夫	酒井 一門	実裕 法師	早川 眞孝	檀 崇雄	加納 清雄	長田 比等

之等わ『柿園詠草』のことば書に出た人の名であるが、此外にも数多くの文人・歌人の名を擧ぐることが出来よう。其詳しくわ後人の研究に任せる。

柿園門人総説

一、加納諸平に国孝を學び歌を見てもらつた人、殊に歌を直してもらつた人わ、相當沢山の数に上ると思われる。紀藩人士の間にありても、古學わ藤垣内に又本居三代目に名簿を納めて、形式的に其門人となつても、実わ諸平に學ぶという人もあり、又藤垣内の同門であつても、歌わ諸平に見せて其批評を受くると云う風の人が多く、随つて若し歌の批評を受けた人を悉く門人録に連名すれば、恐らく何千名と云う数に上つた事と思われる。そうした門戸を張る事を意とせず、頗る無頓着にあつた諸平にわ門人録が残つて居らない。残つて居たかも知れないが、上梓されて

居らないから判然とした事わわからない。

一、よりて諸平の門人として掲げる確実なる人物わ、極少数と云う事になる。又諸平の瀬見善水・室谷賀親・其他に宛てた手紙の文言によって、阿波の人が入門したり、又因幡の人が留學して居る事がわかるが、それが誰を指して居るのか判断しない。又御膝元の紀藩の人々のうち、誰々が其門人なるや一向はつきり知る事が出来ない。之諸平謙嘘の致す処で「伝記者」の困る所である。

二、併し諸般の文献を被閲してゆく間に、この人々わたしかに諸平の門人だと推定さるる人々が、拾数わ算出する事が出来る。今之を大別すると左の如くなる。

紀藩内 山田 尚忠 山東 正周 前田 水穂 古屋 菅賢 古屋安益子 瀬見 善水

熊代 繁里

大阪方面 伴林 光平 佐々木春夫 室谷 賀親 中村 良弼 中村 良顯

因幡方面 飯田 年平 小谷 古蔭 新 貞老 二人 義信

其他 海上 胤平 藤原 忠朝

一、右のうち大体畧伝の判明せる分だけ畧伝を簡叙し、其詠歌の一・二を添ゆる事とする。

山田尚忠

一、山田尚忠わ歴とした紀藩士で享和二年生^(一八〇二年)、通称庄左衛門、有田の代官をつとめた後、御広敷御用人祿五百石に至ると云う。家の名を真砂圓と云ひ、はじめ藤垣内に學び、後諸平に學ぶ。明治維新後、日前・國懸両神宮少宮司に任ぜられ、大講議を兼ねたが、三年余にして免ぜられ、退穩して後専ら歌道を以て後進を導きたりと云う。其歌集を『垣のにこ草』と云う万葉集の

芦垣の中のにこ草にこよかに我をゑまして人にしらすな

にとるかと云う。^(一八七九年) 明治十二年八月十二日歿 年七十八

一、尚忠わ諸平の歌の會にわ必ず出て、相當良き歌も出来て居る。

親友

なかなか詞まれなる円居かな思うかぎりわ語りつくして

午睡

橋殿の水を枕のすすしさに夢もいく度結びかへん

鳥

月になく空音も今はにくからす寝覺勝なる身としなるれば

前田水穂

一、前田水穂(一八二三年)文政六年和歌山藩士夏見某の家に生れ、後前田家の養子となった。通称九右衛門。加納諸平の門に入つて歌をよくした。安政四年(一八五七年)紀藩国孝所の開設せらるるや、田渕儀八郎孝修・山東權十郎正岡と共に肝煎仰付られた。即助教師・講師・指導員と云った役目で、総裁の諸平を助けて肝煎の役である。明治維新となりて後専ら歌道教授をなし、明治三十一年(一九一八年)六月二日自宅に歿す。年七十六歳。水穂わ性多趣味で、三味線の如きも頗る妙を得て居たと云う。

一、水穂が明治十九年(一八八六年)の冬、諸平の遺稿『曾丹集摘草』を上梓して、諸平翁の歌学の深妙を知らしむるに、資したる功績わ大きい。水穂社中の撰歌を集めたものを『和歌浦集』と名づけて、明治二十六年(一九一三年)九月十九日出版して居る。この『和歌浦集』わ、旧型の撰歌集としてわ、紀州方面で最後のものでわないかと思われる。

一、水穂の詠を二・三ぬいておく。

名所霞

白鳥のゆくへやいつこ春風にのほ野のみす霞こめつゝ

蛙

玉はつき落るひひきに巨勢川の川隈かくれ蛙なくなり

社頭卯花

呉はとりみそささぐらん卯の花の白ゆう森だにもなし

山東正周

- 一、山東正周（一八五六年）通称權十郎、加納諸平門人の錚々たるもの。安政三年紀藩国孝所開設せらるるや、田渕孝修・前田水穂等と共に肝煎仰付けられた事記録に見え、又其詠数多く『鰻玉集』等に出て居るが、未だその傳をくわしくせぬ。
- 一、左に『鰻玉集』に出た詠二・三首をぬいておく。

社頭松

諸人の祈る千歳をいつ越ていかきの松わ神さびにけん

海上眺望

青海原五百重波立つ沖へにも鷗のあする庭はありけり

山家田

雪白きもみちの後の朝ほらけ跡なつかしき山の奥かな

古屋普見と安益子

- 一、普見（一八一八年）わ文政元年九月若山小野町久保家に生れ、通称を藤之助と云う。後古屋藤右衛門の養子となり普見と称す。紀藩々士大番、後に小姓組の役をつとむ。歌道を諸平に學びてこれをよくす。紀藩国学所の教官に任ぜられた事があると云われるがたしかでない。後明治五年（一八七二年）神職に補せられ、瀬見善水の肝煎により、日高郡吉田八幡社の神官をした事がある。後に和歌山に皈つて専ら歌道教授をなして世を終へた。明治三十九年（一九〇六年）一月四日歿 年九十
- 一、普見の詠歌わ『鰻玉集』・其他に多数出て居り、又『柿園詠草』中に、諸平とそぞろありきをしたり・物見に出かけたりした事の詞書きがある程で、歌道熱心の門人たりし事が窺われる。

歳暮

怠れる我水茎の走り書きとどこほりてもくるる年かな

冬田家

賤かやの新藁垣のかざおもてふせぐとすれは袖やさゆらん

雪見んとて野辺かけ侍りけるかへさに

時とふ夕山鳥かけ見へて雨よりひびく鐘の音かな

一、後に古屋管見の妻となつたあや女わ、那賀郡小倉村の産。〔文政十一年三月の生れで、後に若山の湯川金兵衛の養女〕となり、町藝妓となり可能と名乗つてゐた。或宴會の席上若侍達から侮辱を蒙り、発憤して柿園の門を叩き、特に入門を許されて逸強した。一時有田の吉田安年・菊池海莊の世話を受けた事があると云う。後水商売をやめて某に嫁し死別し、遂に古屋管見に嫁し一生かわる事なく、管見の死後二日後その後を追うた。柿園門人中珍しい存在であり、中々の上手である。

一、かつて中村良顯が柿園をたづねた時、柿園で和歌浦に船遊びの事があり、一門の人々こそぞつて此遊びに参加した。中にわあやもまじつて居た。藝妓の事とて當時小面憎く思つた良顯が、「お前も歌をよむか」とからかへば、女はじらひ乍ら一首書いて差出したのを見れば

哀れしる身かはやさしき人並に待つとは云はじ秋の夜の月

當夜の秀逸と評され、良顯大いに驚き赤面したと云う。之わまことに興ふかき逸話である。

一、あやの歌わ『打聽鶯蛙集』・その他に出て居る。

朝花

おもかけを花に残して有明の月や何処の峯にしらめる

山月

山の端の松をはなれてゆく雲のひま嬉しくも出づる月かな

水辺月

谷川の岩も通れと照る月の光に競ふ瀧の音かな

瀬見善水

一、瀬見善水わ諸平の中年時代に於て歌の指導を受けて、其死後に至つて同門の千廣の指導をも受けて居る。併し、己

に千廣から啓発を受くる事少く、其頃には己に善水の歌も一家をなして居たものと評して差問なく、又千廣との交友については、多分に政治意味が含まれて居ると云つて差支なく、又善水の任侠が千廣十年に及ぶ田辺の悲愁を唯一に慰めてゐる。後年千廣の子宗光が權勢を得て、神奈川縣の令となるに及んで、善水を權大属に推舉したのも、この善水の美しい心に酬ゆる千廣の心づかいのあらわれであつた。故に善水と千廣が普通の師弟関係とわちがうのであつて、善水が組織して居った朝陽舎なる日高の歌人の集りわ、平常善水の指導を受けたものであるが、又実に千廣の批正指導を受けて居るのである。唯善水の歌學の基礎を諸平に學んで成つたものである故に、善水が純粹の柿園門人であると云う可きである。

一、善水は文化十年^{二八三}の生れであるから、諸平よりわ七・八年ばかりも年下であるから、其指導を受くるに丁度よい年輩の差であり、父の善隣が太平門人で和歌をよくして居り、其先源万壽丸に出で、近江源氏の流裔であり、代々大庄屋の家柄であつて、資産もあり酒造を業として居った豪農の若旦那であつた。善水は父に享けて国幸えのあぐがれふかく、後年郷土民政局の参事として敏腕をうたわれる程あつて天性穎悟、而も一家一門あげて詩歌俳諧の趣味に遊び居る、此天才が諸平の天才によつて啓発されたことである。そこに壬戌^五の作品の生れる事當然であり、私共其作品上にあつて、もつともよく柿園の遺風をつたゆるものわ、瀨見善水を第一とすべしと思惟して居るものであるが、つらく見来るに、善水の逸強ぶりも実に熱心、諸平の指導ぶりも又並々ならぬものがあり、其交情のこまやかなりし事わ、今日に遺存したる諸平の善水に宛てたる書簡の記事によつて察せられる所である。

一、善水が家庭的に恵るる所乏しく、二子わ早世し晩年頗る寂寥を感じ、其が爲めに其文稿を歌稿と共に多く散逸したる遺憾があるが、其遺族の手に諸平よりの書簡集数巻が遺存し、又其歌文稿なども流石に郷土の縁故者の手に残りたるものがあつて、そのうち「龍神紀行・谷の朽葉」わ拙著『紀伊郷土文献拾遺』の中に解説してあり、又「軟葉日記」わ、かつて雑誌『南紀藝術』に發表したる事がある。「軟葉日記」の中にわ秀歌が多く、私の書いた善水の歌中に多数利用して居る。善水の歌わもつと研究され、もつと高く評價さる可きものと信ぜらるるものであるが、之等わ後進の研究にまつとする。

一、善水が柿園門人中にあつて錚々たる人であり、又其師をおもふの心ふかりし人なりし事わ、『柿園詠草拾遺』の編者として名を列して居る事によつてもわかる事であり、又数々の詠が『鯉玉集』の撰入になつて居る事によつても察せらるる処である。其同門との交友についても、屢々説明を要しない事と信ずるのである。

尚善水の畧伝に至つてわ、拙著『天誅組紀州落顚末^{？顚末}』の中に収載して居るから、茲でわ省略したいと思う。

一、左に善水の詠二・三をひいてをく。

伊勢大神宮にて

身に浸むも畏こかりけり神路山神代ながらの杉の下風

弟矩平の佩刀に書きつけし歌

かりそめに誰がはなとるぞ武天の佩くや劔も君が代の爲の

天壽丸漂流船夫販還の時

くもりなき日のもと人と生れ来し身の幸を今ぞしるらん

新樹露

夏木立清き瑞枝乃露見れば花紅葉とも思はざりけり

春霞

春霞誰が誠より立ちそめて人の心を花になすらん

熊代繁里

一、繁里わ日高郡南部の人。文政元年^(二八二八年)六月忠栄の男、幼名熊藏、長じて源藏と通称した。家の号を櫻蔭と称す。はじめ本居門人山内繁樹について學び、後柿園門に入りて和歌を學び、本居内遠についても學ぶ所あり、『紀伊国名所圖繪』の撰集を補助す。後田辺藩に召されて国孝教授とあり、諸生を引立つ。田所顕周・島山敬・宇井可道・那須道一・榎本常蔭、等皆其門より出でて名高く、又南部の歌人山内繁憲・岡崎松樹・山崎繁平・池田春尚志・伊豆彦、其他皆繁里の指導を受けたものなる事論なし。明治維新後わ熊野三山の取締、併せて紀伊一国内の神社取締を命ぜられたが、明治九年^(二八七六年)六月五日本宮に於て歿した。五十九歳

一、繁里の撰著に山内繁樹が歌集『常磐集』上下二巻があり、又一般の撰集に『清渚集』がある。此『常磐集』上下二冊と『清渚集』二冊わ、當時上梓されている。繁里自身の歌集『さくらかけ集』わ未だ上梓された事を聞かず、稿本がある。又『詞花集解』を作ったと云う事があるが未見である。

一、繁里わ家庭的にわ恵まれず、幼少より継母に育てられ、長じて妻帯したるも子なくして、屢妻を去ったと云う。其

内須賀女と云うのわ歌をよくした。

- 一、繁里わ柿園門人の中でも純粹の文人である。其歌の技巧わ頗る感心しない、全く平凡多奇なしと思われる。今其二・三を抄しておく。

楠正成主おくつきをおがみて

かぐわしきその名は世々に橘の下照るかげを仰がざらめや

仁徳天皇の毛受の御陵にまいりて

いはとたてかくれましけるいにしへを御墓の松にしのお今日かな

三月ばかり若山にものしけるととき三葛のわたりをゆくほと

若山の御城の高どののほの見えて霞のまより夕日さすなり

伴林光平

- 一、伴林光平わ柿園門人中の異色ある唯一人である。伴林光平わ出生わ攝津伊丹の人で、眞宗の瑠徒で釈名を大雲と号し、河内国志紀郡林村の某寺に住し、復還俗して大和国斑鳩にも住した事があると云う。僧侶の頃に古學の説を中村良臣にきいてゐたが、或時光輪寺の僧無蓋の講筵に侍し、翻然悟る処あり、伴われて因幡に至り、藤垣内門人勝宿の神官飯田秀雄について國學を學び、秀雄の推挽によつて更に柿園の門に入り、國學古學の蘊奥を極め、諸平の病にかゝるや京都に出でて説を伴信友にとい、全人の勸説に従いて皇陵の恢弘に志を致し、後所謂天誅組の義舉に参加、事敗れ捉えられて、文久四年二月十六日京都六角の獄に斬られたとつたえられ、後年從四位をうけて居る。^(二八四年)
- 一、其還俗の際に有名『本是神州清潔民』の一詩を賦して、寺を出でたる^{？願末}願末及義舉参加の^{？願末}願末等わ、其獄中の手記、『南山踏雲録』に記事があるから之を引用する。

(前略) 過し二月廿八日例の南都の神風館(錫屋町伊勢屋宇右エ門ノ別宅)ヨリ駒塚ニ皈リテカノ安堵村今村力家ニ行テ何吳ト物語ラヒ居ケルニ夕方宮ヨリトテ使馳來徳松何事ニカトテ馳皈リテ宮ニ参上リケルニ夫朝ヨリ御沙汰書トテ上嶋掃部淙司トウテキテ見セラル

中宮寺宮内

其文

山陵荒廢之儀年来恐懼憂傷苦心探索之趣達天聽叡感段尚亦出精勵勤可有御沙汰之事

右御沙汰書廿七日中宮寺御里房(寺町通石薬師御門前)留守居田中采女ヲ御召ニテ 日藏人口ニテ 飛鳥井殿ヨリ御手渡ニ相成 扱廿八日別便ニテ此所ノ宮ヘハ来着シ也 早ク議奏伝奏山陵掛リノ堂上方ナドへ御礼申上ヘキ由ニテ 平岡武夫ニ誘ハレテ三月朔日上京シテ有栖川 飛鳥井 野宮 柳原 西三条 徳大寺ナド同月二日參勤ス此御沙汰書広橋殿ノ御筆也 難有賜物ナレバ板挾ニシテ駒塚ノ己ガ文櫃ニ入レオキシヲ子等妻等イカカナシケン知ヨシナシ 己辛酉年二月宮ノ御内人トナリシトキ蒿齊ト云号ヲ賜ヒテ 有栖川宮ヘモ其ヨシキコエ上ツルヲ 此度ノ御書ニ六郎トシモ記サセタマヒシハ 如何ナル神ノ御計ナリケム 抑々己ガ六郎ノ名ハ天保末ツカタ髪ヲ置キテ初メテ古學ノ垣内ニオリ立シコロ 因幡ノ国人飯田七郎 年平私ニ契カシツルコトアリテ号ケシヲ 其後幾程モナクテモトノ形ニナリシカバ 六郎ノ名ハ早ク消果テ 古キ社友トイヘトモ 大方ハシラス勝ニナレリシヲ 此度改リタル御書ニシモ記サセタマヒシハ 実ニメテタキ限ナレハトテ ヤカテ髪ヲ延シテ天保ノ末ツ方ニ立チカヘラントス カクテオモヘバ辛酉二月寺門ワイテテ 大和国ヘ移住ケルトテ 本是神州清潔民謬爲佛奴説同塵如今棄佛佛休恨本是神州清潔民ト作出シハ六郎ノ字(ナ)ヲ賜ラン前夜ナリケリ (下畧) 光平ハミわ文化十年ハミ九月九日の生れであるから瀨見善水と同年、諸平よりわ七・八年の下である。其指導を受くるに好都合の年配である。光平の柿園入門の顚末顚末わ、全人の著『稲木抄』の中に記事があるから、之を抄出しておこう。

(前略)昔とこそ云わば いわめおのれまだ若かりし程 津の国猪名郡にさまよひけること有り 其頃稲葉の国の僧無盡上人が伊丹の里に來居て 語格の事ども何くれと講ぜらるるを聞侍りて ふと歌よままほしう思ひなりて 争で良き師もがなと思つたありしを 其後此上人に誘はれて其国にゆきて 其里近き勝宿の宮の神主飯田樟齊翁の御許に行きかひ 果はひととさもらひて一年ばかり物學びき 其後のすすめによりて本国にも のして柿園先生の弟子となり 国に販りて後も萬またなき御蔭を蒙りつゝ一年二年と打過す程に 今は年十の指も打伏つべし さて此一帖はかの稲葉の国に在りし頃翁の語られし事 柿園にて問參らせし事共を 年経るに随ひて志果てなんもいと可惜らしゆう 且は同志の人人にも見せまほしう思ひなりて 思出る限書いつけたるにて 且は己が思ひよれる説もなきにはあらねど それはた両先生の賜物なれば その先生のおはする国の号を此一帖の名におほせて 限りなき御恩頼弥遠長に忘れじとて 自ら『稲木抄』と名付けたる也 扱此一言よ世の学者達のうけはりて物する跋とか 何とか云ふものに似通ひたれば 何とか人のあざみ云んこともうし

ろめたけれど 是將かの御恩頼を偲びつる一節にて おしこめ難き心のすさびなりけり 似気なのわざやとな
云くだしそ

(一八四八年)
嘉永二年十二月廿七日夜 河内国八尾の旅やどりにしるす

伴林 光平

無垢のやの大徳のもとへ

即ち此の『稲木抄』わ因幡の国(稲)・紀の国の木を合せた名である事が知られる。

一、光平の著述わ此『稲木抄』の外に『月瀬紀行』がある。此『月瀬紀行』わ齊藤拙堂の『梅谿遊記』と双壁をなす名歌文であるといわれて居り、其文中に渡唐天神の事等も記されて居つて面白い。又『南山踏雲録』わ獄中の手記で、さすがに人の情けを引く外に、両尾義樟編の「神樂の舎」(ササノヤトヨム)五百首一卷わ、光平の歌をあつめたものである。光平の詠わ諸平の『鰻玉集』に沢山出て居る。

一、今日本文學報国会撰『百人一首』中にあげた一首をはじめ、三・五抄出して光平の面影をしのぶ事にする。

京都にて誅せらるる時

君が代はいはほとともに動かねばくだけで販れ沖つ白浪

南都への道

闇夜ゆく里の光よおのれだにせめては照らせ武士の道

述懐

くづをれてよしや死すとも御陵の小笹わけつゝ行かんとぞ思ふ

銀峯山にて

身を捨てて千代は祈らぬ大丈夫ますらをもさすがに菊わ折かざしつゝ

南山回顧の一

雲を踏み嵐を攀じて三熊野の果無山の果も見し哉

佐々木春夫

一、佐々木春夫わ其先近江源氏に出で父保良に至る。はじめ青蓮院宮に仕へ、後致仕して紀藩に仕へ、勢州方面年貢米の管理を司り、地土として待遇せられた御用達であつた。大阪玉造なごしの岡に住し、商号を萬屋小兵衛と云うた。又春夫わ通称を源三と称し文化三年^(一八〇六年)に生れたとある。故に諸平より十二歳年下、又伴林光平よりも五・六歳若い事になる。

一、春夫わ少時岡山に遊んで某に教えを受け、後に大塩中齊に漢學を學び、国孝わ幕府の家臣で鈴之屋の門人である小林元雄^(一八六二年)に受け、後専ら加納諸平について學び、国孝者として大成勤皇の志厚く、同じ加納諸平の門人伴林光平等に對し頗る力をそえて居る。大正十三年^(一九二四年)五月朝廷より從五位下を贈られたと云う。春夫を其園の名を「浜木綿園」と称し、又「名越岡隱士」と「萱舎」・「梅垣内」・「槐園」・「鶴室」外二・三の名を有し、読書の處を「雨奇晴好樓」と名づけたという。性風雅を好み俗事をいとひ、嘉永六年^(一八五三年)二月父君の歿するや、家嗣を子にゆずりて自らわ、腹見村に隱退し、終日読書・詠歌に親しみたと云う。

一、安政二年^(一八五五年)紀藩に國學所を設けらるるや、師諸平の推舉により翌年副總裁の命があり、六月十八日若山に趣き本町の旅館藤屋に止宿中、全月二十四日諸平頓死、全月二十七日藩より国孝所總裁を命ぜらる。はじめわ副總裁、即ち助教をも轄する考の處、今わやむなくして總裁拝命、暫時諸生に教授し助教として小谷古蔭を呼びむかえ、専ら講議の任にあたらしむるまで、中々の大任を受けたのであつた。其時の模様わ歌集の詞書及歌等があるから後に抄を出してをく。

春夫翁が紀州国孝所をやめたのわいつの頃か判然せぬが、其後大阪に販りて伏見町に卜居し、一時わ天神橋紀州邸に居りて、又伏見町に住して中風を病みしも天壽を全うし、明治二十一年^(一八八八年)十一月二十七日伏見町の邸に歿した。年七十一歳小橋寺町全慶院に葬る。釈名を樸有院眞譽鶴淨械居士と云う。

一、春夫が丁度藩より君命があつて若山に出でて、旅居の内に諸平の頓死したること、まことに奇なる因縁と云うべく、其頓死の模様わ別項に春夫より畔林光平にあてた手紙によつて、其模様を知る事が出来るが、茲にわその跡始末として諸生取立の命が春夫にくだつた事について、その手記及歌を引いておこう。

家譜(前略) 安政四丁巳年^(一八五七年)奉仕紀伊殿爲同藩国孝所助教 同年六月二十八日四ツ時登城蒙同館書生教授之命 但於殿中岡田主馬・山田庄左衛門尚忠被達 之同日二之丸御殿向可爲拝見有命案内御同明松尾柳河弥平御坊主 衆四人(下畧)

歌集 安政四年の水無月十八日中納言殿にめされて夕月のをかきほと舟より若山にゆきけるに おなし月

の二十四日申過ぐる頃にや有りけむ 諸平頓の病にて身まかりければ
夕月夜かかるなけきの夏陰をはろくとめてわれは来にけり

その夜は翁のかたはらに明して

郭公声なき空のくれやみになきてやひとり山路ゆかまし

明るく二十五日葬わさのまうけすとて誅文をかくく

ふち衣やつるる袖は青雲のたなひく日すら雨みたれつゝ

同じ二十七日大城^{御城}にめされてこの後は諸生取立可き仰せ言ありて

やがて国孝所^所にいてければけふの題 久待恋といふことを

山鳩のくると鳴く音に占^占とひしけふさへ人のあはすもあるかな

柿園翁身まかれし安政四年^(一八五七年)の文月ばかり

わかいつく床辺の露の靈棚に今日とるぬさははちすなりけり

一、佐々木春夫の詞友近樹をはじめ藤垣内柿園門人等、當時京阪神方面及び紀藩の著名歌人、並びに江戸の文人に其名著聞して居る。

一、諸平の遺著・資料わ前記の關係のものが、春夫の手許に多く保存せられる事となつたが、惜しいかな文久三年十一^(一八六三年)月某家火災に会ひ、可惜諸平文献わ春夫自身の著述と共に焼失してしまった。有名でなる『萬葉草木考』すらも依存せざりし事、残念であると云わねばならない。

文久三とせといふ年の霜月ばかり かぐ土の神の御あらびにかかりて
家のやけたりけるころ雪のふりけるあした

野らとのみ荒れにし庭の白雪に木の芽煮るへき松かげもなし

一、尚春夫勤皇の詠を二・三

櫛

石の上ふるのやしろのもと賢木もとの心をゆめな忘れそ

某が出陣の馬のはなけに

海ゆかばみずくかばねと取る銚にくだけぬ波はあらじとぞ思ふ

雨奇晴好楼にて

直越えにたたにむかひて櫃原の日知の宮のむかしをぞおもふ

幸遇泰平世

ますらをも酔ひ泣しけり安御代のけふの足日の花のまどゐに

一、以上本間良三郎編纂春夫孫・佐々木計次郎上梓『菅舎』歌集による。

室谷賀親

一、室谷賀親わ大阪の紳商で、代々御大名の御用達である。賀親(一八二六年)文政九年六月三日生まれで、諸平よりわ二拾年も年若である。はじめ幼名鉄吉・通称仁三郎、賀世二男。雅号をはじめ「梧桐園」と称し、後諸平に學ぶに及び「麻蔭」と云う。之わ多分歌としての号である。其他茶技を本居宗敬・磯村朗應に幸び、禪を紫野の太室に問い、丹青の技を東山に學び、花鳥を好んだと云う。東菴・東翠などわ絵の方に用いた号であろう。国學わはじめ藤垣内門人伊丹住中村良臣に學び、良臣死して後わ加納諸平に學んだ。元來風雅の心ふかく、熱心に歌道にいそしんだ。諸平も又頗る熱心に指導した事、その書簡集によつて知る事が出来る。平素交る處、家業に関する人人を除き、佐々木春夫・中村良頭・山川正宣・有馬長隣・野々口正武・萩原広道・六人部秀香・緒方洪庵などと交友ふかつたと云う。又同族の間に風雅の道を鼓吹し、一門中の歌合せなどを諸平の判を受けてたのしんで居る。

志報恩反思の念に厚く、父祖の年忌に際してわ思を傾けて慈悲善根を施し、又毎冬粥を煮て貧困を賑恤するを例とし、先師良臣の歌集『蓼生園集』並に父賀生の『異泉集』を撰して、先師並に祖考の恩に酬ゆるなど、尋常俗人と撰を異にした風雅心のふかき旦那様であつた。察するに性來虚弱、分家をなして専ら風雅の道をゆく筈、長兄の死に會し煩鎖？煩瑣なる父祖の家業をつぎたるも、素其志にあらざる故に年四十、早く世を長男賀惠にゆづり、自ら剃髪して宗理と号し、時々數田年話講筵に侍し悠々文学に遊ぶ。不幸天壽を假さず明治三年十月二十四日没(一八七〇年) 年四十五 釈名天真宗理居士と云う。

『神代物産考』以下多數の著述がある。大正年間後裔室谷鉄腸が大阪在住の歌人小野利教に囑して、『麻蔭詠草』一卷が上梓されて居る。其巻頭の伝記によつて、此「伝記」をつくる。

一、賀親の歌わ格別取立て云う程特色わない。けれども流石に其人格をしのばる詠が多く、其文章も明亮性がある。今

諸平が大そうほめて、之を見れば野々口隆正の歌など物の数にあらざと評した。北野天神万燈會の長歌一首と、外に一・二首の短歌を抄出してをく。

詠北野万燈會長歌並短歌

掛卷くもゆゆしけれ共いはまくもあやに畏こき菅原の神の命 神かくりかくりたまひて 百年の九辺に百歳
の春もまそ鏡移り来ぬれば 大八洲倭国内に御社のたたせる限 御魂の鎮ます極み御幣とり木綿四年かけて
とりとりに祭るが 中に山城の北野の宮は御社の元つ社と 如月の月立日より廿日余り五日の暮まで
て 広前に新殿建てて千萬の数の燈火絶えずしも捧けまつれば 久方の空も耀き荒金の上さへ照れり 行
く人は油さしそへ販る人揚げそへつつ 朝つく日昇らぬ先ゆ夕つく日入ての後も玉鉾の道も去あへす 諸
平の集ふ御社拝む尊とさ

反歌

ともし火の数にきはひて諸人のうつや平手の音どよむなり
久方の雲路をいつか分けすててほしの林にわれは来にけり

寒き夜毎粥を煮て貧しき人に與ふとて

これとても君がめぐみによるものをわが施すとおもひけるかも

追讎

君が代は安達が原の奥までもなやらふこゑに鬼はこもらし

六月廿四日柿園翁の身まかりたまひければ秋哀愁ということ

たのみつる月のかひなく入はてて花野のやみにまよふ秋かな

萬民歌泰平

かきりなきあを人草のかきりなくあふく御代こそ限知られね

中村良弼

一、ここに中村良弼なる人がある。伊丹の住人で藤垣内の門人中村良臣の子である事、諸平の『柿園詠草』の詞書によ

つて知る事が出来る。

中村良臣が身まかりける年（嘉永三年六月廿六日歿五十一『国孝者伝記集成』）の九月末つ方 秋哀愁とい云へる心をよみて 其子良弼がこひおこせければ

と題する短い長歌一首がある。中村良臣わ赤穂森家の家臣で伊丹に住し、藤垣内の門人で幄をおろして諸生を教授し、室谷賀親の如きも其門人の一人である。「蓼生園」と号した。嘉永三年六月廿六日歿し、年五十一 墓わ金剛院に在り、碑文わ諸平の撰文になると伝えられて居る。

一、諸平の室谷賀親宛の書簡中に、伊丹の良弼来りて『源氏』よみ申候とあり、諸平について『源氏物語』を研究した事がうかがわれる。但此良弼なる人の伝記わ頓とわからない。

一、ここに中村良顕なる人がある。『国孝者伝記集成』によると文政十二年生まれ、明治三十三年九月十二日歿、年七十二とあり、此人わ中村良臣の甥で、良臣嗣子なくして、出でて叔父良臣の家を継げりとある。そこでよくしらべないと分らない事になる。今詳しく調査する邊がないので、此人の傳等わ後進の研究に委ぬるが、此人の歌わ歌集にも散見する所である。

一、諸平の室谷賀親宛書簡によれば、諸平わ伊丹で『古今集』序の講議をして居る。之わ多分中村良臣の家でやったのでわないかと思われるのであるがたしかでない。伊丹と諸平とわもつと深く調査を要する次第であるが、しばらく後進に委ねて簡略に従する事にする。

一、良弼の歌

子之日

平 良弼

中村源四郎

撰津伊丹

子日してふたはの松にゆく末を契るもとほしちよのふる道

（西田惟恒 安政二年 百首）

飯田年平

一、飯田年平わ因幡国気多郡勝宿の勝矢神社の神官飯田秀雄の子である。飯田秀雄わ藤垣内の門人で、老ひて樟齊と称した。藤垣内の門人として有名である。翁が我子の年平を年端もゆかぬに、遙々若山に伴うて藤垣内の門に入らしめたと云う。年平わ文政七年の生れ、大平の死わ天保四年九月で年平僅かに十歳の時である。其頃一度藤垣内へ入

門留幸せしめたのであろうか。然るに藤垣内の死歿に會つて一旦国に皈り、次に年十五位の時伴林光平が紀州に至つて、柿園の門に入るべく樟齊翁の許を立いつる時に同伴でもして、又はるゝと紀州へ来たのでわなないかとも思われる次第で、諸平より石川依平宛手紙の中に此秀才の事が記されて居る。その手紙に年平の年を十五として居る。諸平が口を極めてほめて居る程の秀才であるから、所謂幼にして穎悟と云う可きであつたのであろう。因幡地方にわ此外小谷古蔭・足立正声・新貞老など、何れも立派な人人が柿園門から出て居るが、其中でも年平わ祖考の幸をついで古學に造詣し、維新の後にわ宮内省の史官神祇太史式部寮御用掛等に歴任、從六位に叙し明治十九年六月廿六日歿年六十七。『祝司式』・『石園歌話』外十数の著作がある。一生娶らなかつたと云う。詠歌わ『鯉玉集』等に数多く出て居る。『柿園詠草拾遺』の撰者にもなつて居る。

一、年平が七郎と称したのわ、伴林光平と志を同じくし、肝胆相照して神に誓つて、互に国事につくす可く、蔡起光平を兄と見・年平を弟と見、よりて六郎と七郎と名をつけたと云うのである。此事は光平の『南山踏雲録』に光平が自記して居る。

一、左に年平の歌二・三をぬいておく。

日本橋にて

富士の峯を大城の上に見てくればうべこそくにのしづめなりけり

ゆゑありて山里に住ひける頃

朝なくむすぶ軒端の山清水すめばすむ世のかがみなりけれ

詠史

まかがやくふるのみたまに熊野山夜ふかき空のしらなみけるかな

湊川にて

これやこの人の涙の湊川いくよかなしきわたりなるなん

田をううるをみて

五百代の田の面のかぎりとる苗に青人草のさなえぞ見る

小谷 古蔭

一、小谷古蔭わ通称を浪江、因州鳥取天王社・其他の神官で、今其生・歿明にしないのであるが、柿園門人中の有名な存在で、『柿園詠草』の撰者であり、又『鰻玉集』の板下を書いて居り・中々勉強して居り、又諸平頓死後の国孝所の教授として召されて若山に來たり。暫時教鞭をとった事が全人より瀬見善水宛の手紙で知る事が出来る。其詠わかずく『鰻玉集』・その他に出て居り、又別に瀬見善水方につたわった古蔭の詠草がある。之によると、その住処名を「双松園」・「六松園」などと称した事がうかがわれ、明治十二年（一八七九年）の頃にお病氣だったことがわかるのである。

一、左に其詠二・三を抄出しておく事にする。

明治十二年（一八七九年）ばかり 伯耆国に移り住まんとしける年 久しく病にかかりて有ければ おもふ事とも多かりて有ければおもふ事とも多かり 六月三日「双松園」を出立つとて

父母の其面影も常磐なす二本松をいつかへり見ん

十五日東福原村につきぬ 家は朝日直刺す家にして 松をうゑめぐらしたれば おのつから世の塵を隔たるが如し 西窓の前に松六本ありいとうれしくて 新居の名を「六松園」とす 立川の「双松園」・栗谷の「松園」などおもひ出でたる折にふれて

鳥なく森の梢の有明にふる郷人のねさめをぞ思ふ

不盡山

駿河なるふしの山人こととはん知るやさくらの大刀自の神

赤駒のくら沢つづき折出てあかぎ早くもふじを見しかな

若山に在りける時太刀といふ題にて

紐とかぬ寝の床のまくら太刀遠き夢路のまもりともなれ

新 貞 老

一、新貞老あたらしきだおいも因幡の人であり神官とおもわれ、又宮内省方面に出仕して居ったのでわないかと思われ、正六位を賜つ

て居る。『鰻玉集』を見ると、新貞老がみそぎの事が其詞書に出て居り、又貞老に『柿園詠草』傍註一卷があると伝えらるる。新貞老とわ面白い名である。今『熊野集』の作者姓名録を見ると、貞老印旛藩田中良達とある、全一人かどうか。貞老わ柿園詠平？諸平を柿本人麿・加茂真淵に比し、以て互に匹敵すべき歌文の大家なりと論断して居る。故に貞老わまさしくよく心服したる柿園門人である。柿園門中又諸平をこれだけ高く評價してゐる人わ見當らないのである。

一、新貞老の詠歌も取立てて云ふ程の特色わ見えないが、その二・三を引けば

夕立

夕立はわが里つゞきすぎぬなりこや水分の神の通路

雨の夜虫をききて

しかすがにありとわききし虫の音も千草に満ちて雨晴れにけり

山家

喘ぎつゝのぼるたむけも安御代は築土たかき家づくりして

二人 義信

一、『柿園詠草』の奥書に、『柿園詠草』わ古蔭と義信、とらわれなき後の記念にもと、集めたるもの。然るにそのうち義信が故人になった旨を記している。此義信がわからない。『木国歌人伝』の著者わ、紀藩士の中に山口吉郎兵衛義信と云う人あり、此人かと云つて居る。此外に因幡方面に山中義信なる人の姓名見えて、『鰻玉集』にその歌が見えて居る。又入江義信なる人もある。唯この入江義信なる人わ、明治までも生きた人らしく、随つて諸平の奥書に、己に嘉永六年(一八五三年)に身まかりける人の中に這入らぬ、故に之わ除外するも、尚義信に山口・山中の両義信がある。一人わ紀藩・一人わ因幡、さて何れぞと思う。

一、一体柿園門人についてわ、もつとくわしく評べて記すべきであり、更に後進の研究にまつ事にし度く、因幡・出雲・伯耆方面の人々についてわ、時に今少し調査研究の要あるのを痛感するのである。

完

あとがき

一、本書は井上豊太郎氏の著述にかゝるものである事は、全氏の序文に見えたれば、ここにくりかえさず。原本は四百字原稿紙六百枚に及ぶ大部のものであり、昭和廿八年十二月末に借用廿九年三月二十日漸く寫本を終ゆ。この間一月半頃より専心寫本に従事したが、尚二ヶ月の日子を要した。

二、加納諸平は国孝者として・歌人として、又『名所圖繪』編纂者として、更に『紀伊続風土記』の纂修者として、紀州の郷土研究家としては等閑視し得ざる人物であるが、然も研究書或いは傳記として見る可きものが一つもなかった。今此処に井上豊太郎氏の好著を得た事は、まことに大きな収穫と云わねばならぬ。

三、本書は稿本にして未だ上梓の機を得ず。文章・用語・その他、今少し整理する点なきに非るも、そうした瑕瑾をよそにして、尚われ／＼を感謝せしめづにおかぬ力を持っている。これ実に井上氏の努力・勉強の結実であればこそであつて、恐らく今後これ以上の諸平研究は何人もなし得ないかと思われる。

四、書中諸平の『櫟亭記』關係の項中、「日高川流路の変更」・「藤井部落の畧氏・藤井の八姓の事」・「今宮神社の伝説」等、又別の意味で大いに有益であり面白かつた。

五、井上豊太郎氏の此著あるを知つたのは、今から数年前の事であるが、当時その余りに大部なるに驚き、寫本の勇氣を失つた。其の後昭和廿八年八月私が病を發し、療養生活を余儀なくされるや、此の機を利用して寫本に當たらんと思ひ、井上氏の許に借用方を手紙をもつて依頼した。処が時恰も七・一八水害直後の事であり、井上氏の居宅も泥水に浸され、藏書・家財の一切を泥水に委ねた。そうした折の事とて、私のこの呑氣な申出は井上氏の神経をひどく刺激し、家財道具一切を失いたる今日、お前は水害に逢わずとてその様な氣樂な申出は何事か、稿本は一切貸すことならずとひどく抗議を受けた。考へて見ると是は私も悪かつた。まことに心なき事を申出たものと深謝して、一応そのことを思いとゞまつた。然るに前記の如く廿八年十二月も押しせまつた一日、氏より來書あり、『諸平研究』の稿本泥土中より出でたれば取りに來いとあり、よりて参堂、此の寫本となつた。故に原本は七・一八水害の泥水に浸されたものであるが、幸いインクが良かったのか、文字の滲む処もなく無事であつた。本書寫本にはこの様な因縁ありしことを、ここに附記しておく。

昭和廿九年三月二十日夜

長女美那大成中学校卒業の日

『加納諸平の研究』上・下活字化を終わって

- ◎ 『加納諸平の研究』上・下をやつとパソコン入力し終わった。父の写本の通りに入力した。井上氏独特の送り仮名や難しい表現があり、良い体験をした。
- ◎ 検索の方法が悪いのか、ネットや図書館の蔵書を調べたが、「加納諸平」についてこれだけ詳細な著作は見当たらなかった。
- ◎ 諸平が日高川町江川の瀬見善水父子と親交があり、『紀伊国名所圖絵』後編編纂の折立ち寄ったこと、色々日高の資料の提供受けていることも判る。また川中の龍田家にも立ち寄ったことが知れる。
- ◎ 「櫟亭記」や「今宮神社の伝説」に関連して、明治七・八年頃（戸長時代）の藤井村地図が見付かったので添付した。
- ◎ 諸平が編纂した『紀伊国名所圖絵』後編の挿絵、小竹八幡宮「瓢箪踊」・矢田八幡宮「小熊奴踊」は、今も昔も大差ないのに、丹生神社の「笑い祭」挿絵、『名所圖絵』では「笑い祭」由来と豊作への感謝の気持ち、素朴な本来の祭の姿が表現されていると思うのだが。何時の時代に道化服姿の鈴振りが登場したのか（昭和十年過ぎと聞く）。今ではすっかりショー化し、本来の祭の域を脱してメディア化し（鈴振りが神輿を先導する風景がテレビに報道され）、客寄せして大成功している。然し 反面考え直すと、考案した当時の宮惣代、先見の明あったと思う。此の功績に対し、丹生神社境内に顕彰碑建て貰う価値充分と思う。
- ◎ 横道にそれるが本来の祭は神事が中心であった筈、いつの間にか段々と中心が神事よりも後の余興に重点が移り、それを見るのが主目的でお宮に詣るのでは。権力がそうさせたものか、社会の構造が変わった影響か、一度祭の原点を考え直して欲しい。全国の国指定民俗芸能と云うものも、はじめはそんな目で見られたのだろうか。
- ◎ 父は夜間及び土日の休日を利用して約三ヶ月で上・下篇を写本している、私の活字化は約半年を費やした。ネット文化の発達した現代、判らないことネットで検索し確認すると、つい時のたつの忘れ、肝心の入力は大幅に遅れてしまう結果となった。

平成二十二年（二〇一〇）年一月三十一日（日）

